

大體此位にして止めて特に私との關係が深かつた人々に就いては、別に項を改めて申上ぐることにしようと思ふ。

## 四一、私と政黨の發生

### 一、新歸朝の伊藤博文公

私は度々お話ししたやうに、政治界に志を断ち、其の方面では働きもなかつたから、友達ともだちの相談に應じて力を藉かかることなどもなかつたのであるが、伊藤さんとは明治二年頃大藏省時代から大隈さん等と同様に親しくしてゐて、伊藤さんは極く書生肌であつたから、文章や詩を作つて親密にするばかりでなく、他の娛樂のことなども共にしたので懇親の度は一層深かつた。併し後には私が實業界に入つて境遇が自ら違つて來たから、時々會ふと云ふ程度になつて居た。年齢は私より伊藤さんの方が一歳下であつたけれども、私は先輩として尊敬して居たのである。そして書生しよせいまるだしの伊藤さんは實に磊落らいらくで、私とは意見を遠慮なく話し會ふ間柄であつた。丁度明治三年大藏省の事務改革と共に、將來の財政經濟をどうするかと云ふことに就き考慮した末、徒らに國內のみを見て居ては駄目である、外國の事情をも調べなければならぬと云ふ譯で海外視察員を出すことになつた。それには先づ米國を調べる必要がある、特に太政官札を兌換券と爲さしめるに就いて研究する必要が

あつて、丁度米國では千八百六十年南北戦争後の財政整理の一つとして不換紙幣を兌換券に引直したことがあるから、此の事務の執り方なども知る必要があると伊藤さんが頻りに説き又私は將來の商工業は會社組織でやらねばならず、又一方金融の組立が出来なくてはならない、換言すれば會社組織と金融制度とは相俟つて日本を發展せしめるものである。從來の様に相對貸借で資金を調達するやうでは駄目である、同時に公債發行の仕組がないから、どうしたら甘く行くか、是れも考へねばならぬと思つた。私は形ばかりはこれを佛國で見たが詳しくは解らぬので、此れも調査する必要があるのでして、之れをも調査して来るやうに希望を申出たのである。これは私が主として大藏省の改正係として諸種の改正のことに當つて居たので、大いに新知識として申出で大藏省から此の派遣の進達をしたのであつた。

其處で公債制度、銀行制度、會社組織などの調査をもすることになり、渡米する伊藤さんもその用意をした。そして隨員には外國語の出来る人とか筆のたつ人を選び、芳川、福地、吉田などの人が行つたのであつたが、福地、吉田の兩君は私の關係で隨行することになつたのである。其の出發は明治三年の秋冬の交であつたと思ふ。歸朝は翌四年の四五月頃であつて、調査して來た事項は

- 一、大藏省制度の改革（竝に事務の仕組）



伊藤博文公

- 一、銀行制度（所謂ナショナル・バンク・システムと云ふので、千八百六十年南北戦争後設立された國立銀行制度）
- 一、貨幣制度（即ち金本位制）
- 一、會社組織
- 一、出納の方法（竝に帳簿の改正）

などで日本にとつては悉く新制度のみであつた。然るに伊藤さんが歸朝後餘りにアメリカ風を吹かせ、高襟主義であつたから、薩州人に嫌はれ、

中でも大久保利通さんなどは生意氣であるとして好意を寄せなくなり、遂に大藏少輔から大阪造幣局へ左遷せられたりしたことは前に述べたと思ふ。當時は井上さんが大藏省きつての働手で大藏卿は伊達宗城さんであつたが、大久保さんが大藏卿になつてから井上さんは大藏大輔となつて幅を利かせたのに反し伊藤さんの方は米國の諸事情を調査して歸朝したが却つて勢力を墜したやうな譯で

あつた。其時伊藤さんも残念に思つたらしく、

『井上も濫澤も私には少しも同情して呉れぬ、友達甲斐のない者だ。』

と云ふ愚痴の手紙を寄越したりした。後年伊藤さんが政治界の第一人者となつてから、私は

『貴方は餘り偉さうな事は云へぬ。此前此様な手紙を寄越したことがあるではないか?』

などと云つて、心易い間柄だけに笑つたこともある。それは後ちの話であるが、兎に角斯様な手紙の往復をする程懇親の間柄であつたのである。

## 二、政治家の伊藤公と實業家の私

私が大藏省を退いた時には伊藤さんは再び樞要な地位に復して居り、岩倉さんが外國使節となつて行つた際の如き、大久保、木戸さんと共に副使として行くやうになつて居た。そして夫れより先き伊藤さんが調べた財政經濟の制度は、井上さんの裁斷の下に私の手で着々實施せられたのである。伊藤さんは『濫澤は本末を明かにして、よく仕事を間違へずにやつて呉れる』と云つて愈々深く私との交りを通じて來たのである。其後は別に變つた事もなく伊藤さんは政府にあり、私は銀行業者として野にあつたが、明治十三四年の頃、西南戦争後金融界が大變動を起し、紙幣は下落した。當

時の大藏當局は大隈さんが大いに積極政策を執つて居たのである。之れに對し松方さんは消極論で紙幣の減縮を圖つて行かなければ此の難局を切り抜ける事は出來ないと唱へた。恰かも政友會の積極説に對して憲政會の消極策が對立せる如き有様で、たゞ地位があべこべであつたのみである。他方伊藤さんは主として政治方面に活動して經濟とは縁が少く、松方さんの様に細かに立入つて論議する事はなかつた。又私達銀行家は此の紙幣下落の對策に就いて大藏省のやり方を放漫であるとし、松方さんと同様紙幣減縮必要論を支持して大隈さんの政策を攻撃した。従つて大隈さんは『濫澤は俺の行ふことに反對する』とて大いに憤り、遂には私を嫌ふ様になつた。是れを伊藤さんが聞いて『大隈さんの憤るのが悪い。これは誤解を解かねばなるまい』と云ふので、私をつれて大隈さんの處へ行つて『君が面と向つて議論をしないから蔭で反對する様に思はれ、誤解を生んだのである』とて兩者の間の調停をしてくれる程であつた。然し伊藤さんは前にも云ふ通り經濟的方面の關係が薄かつたから、其後は井上さんの様に繁く往來することはなかつた。

又憲法制度の準備の爲めに伊藤さんは海外へ行かれる時にも、其の悉くの事項に涉つては相談せられなかつたが、一通り意見を私に聞かれた。そして長い間には色々の變化もあつたけれども、伊藤さんが首相として國家を一身に擔うた時にはよく往來して意見を述べ合つたのであつた。

明治廿七年日清戦争の始つた當時、國民の意見と政府の意見とは一致せねばならぬと云ふので、新聞社側では福澤諭吉氏、實業家側では私などが打寄り首唱して、支那に向つた軍人の後援を國民が舉つてすると云ふ意味で軍人の慰安を目論み、其の費用を百萬圓ばかり募り、軍人慰安の方法を講じようとした。百萬圓の醜金は今日で云へば何でもないが當時は却々の大金であつたのである。處が其時總理大臣であつた伊藤さんはこれを聞いて、

「其様な事に百萬圓の金を募集するのは困難な事である。實は國債を募集したいと考へてゐるが、此方ならば少しは利息をも拂ふので、只寄付するよりはよいから、それに盡力して呉れぬか？」と云ふ事であつた。國債の總額は五千萬圓で利息は確か六分であつたが、利廻りは七分何厘かに當つたと思つて居る。其處で私達は銀行其他に運動して東京で約半額、大阪で一千萬圓位、其他地方で約千五百萬圓を募集し、意外の好成绩を得られたので非常に喜んだ次第であつた。

### 三、思ひは深い政黨組織當時の文書

伊藤博邦公から曾て先代博文公の筆に成る覺書やうなものに、私の署名した一通の書類を見せられて、之れに對する感想を餘白に書く様にと依頼されたことがある。其の博文公の書かれた文章と

云ふのは、

方今國家多難ノ際ニ當リ濟時ノ方策(方策中ニハ經濟財政及外交等ノ事ヲ凡テ含蓄スルモノナリ)一ツニシテ足ラス然レトモ到底其是非ヲ甲乙ノ間ニ左右シテ決セサルニ於テハ竟ニ其時機ヲ失シ救正スヘカラサルニ陥ラン事ヲ恐ル故ニ今日ノ急務ハ目前ニ現出スル所ノ國家維持ノ方策ヲ主唱スル者ノ各種ニ就テ其一ヲ選定スルノ必要ヲ感シ左ノ決論ニ歸着セリ乃チ

澁澤ト伊藤ト所見ヲ關シタル結果

澁澤ハ伊藤所執ノ政策ヲ以テ是ナリトス然レトモ自己ノ境遇自ラ主動ト爲リ或ハ之カ爲ニ身ヲ犠牲ニスルコトヲ得ス唯之ヲ是認スル以上ハ内外ニ對シ之ヲ公言スル事ヲ憚ラサルノミナラス他人ニ向テ之ヲ贊セヨト言フ事ヲ躊躇セス  
と云ふのであつて其の終りに私の手で

明治三十一年六月十八日

澁澤榮一手記

と署名してあるのである。

これを公にするのはどうかと思ふが、さして不都合とも考へられないから、此の書面に關聯した

事實を事實として伊藤さんと私の親しい關係を此處に追憶しようと思ふ。

扱、伊藤さんなどの力で憲法も布かれ、議會も開かれたけれども、うまくその運用が出来ず二十四五年から三十年頃までは依然官僚味たつぷりであつたので、一方には自由民権熱が高くなり、議論が仲々喧しくあつた。私は之れを見て官僚的であることは最も排すべきであるから、思ひ切つて政黨を組織する必要があると思つた。憲法發布に就いて伊藤さんは非常に盡力せられ、遂に議會政治の成立を見るに至つたので、其の功は多とせねばならない。然るに内閣の成立なるものを見ると殆んどなつて居ないのみならず、何れも袞龍の袖に隠れて事を爲さうとする有様であつたから、私は伊藤さんにどうしても速に政黨を組織するやうに勧めたのである。伊藤さんも餘程考へた模様で勿論私の言つた事のみで動いたのではあるまいが、其の時の自由黨を纏め、自ら首腦となつて世間に乗れり出さうとしたのが、此の覺書の出来た當時即ち明治三十一年頃政友會組織の時である。そして結局は多數者の政治となる、多數人の賛同に依つて政治を行ふといふことが本筋であるといふのが伊藤さんの考へで、それに私が賛成したのである。伊藤公は政黨組織のことを勧めて居た關係から、私にも入黨せよと勸説せられたが、私は其の素志からしても政治に携はらない事に固く決心して居るので、「共に仕事はしないが趣意には大賛成であるから、他人に賛成を求めすることに躊躇しない

い』といふ意味の返書をしたと思ふが、是れを書面としたものが此の書類であると思ふ。書中「多難ノ際」とあるのは、伊藤さんや井上さんと常に會談した時、當時の國家の事態を憂へて互ひに口にして居た言葉である。今日から見れば名文でも何んでもなく、寧ろ何の意味か解らぬが、同主義である旨を契つて書いたものに外ならない。

其處で愈々伊藤さんは政友會を起す事に決心した。私は之れを奨めた關係上、伊藤さんの方では私も入黨し、内閣組織の時には閣員の一人にはならないまでも、大いに後援する位に思つて居たらしい。従つて伊藤さんは「政黨を組織するのに同意した以上、他に同意したと云ふことを宣明し、宣傳に力を盡してくれるであらうし、當然政治家として黨の爲め盡力して呉れる事と思つて居た」と云うて私を詰つたのである。併し私は「さう云ふ位地には立たない」と答へた處、「それでは友を賣る者だ」と云つて大いに苦情を言はれた。そこで「それは伊藤さん、貴方が解釋を間違へて居る。皆のよく知つて居る様に私は役人になりたくない。最初大藏省へ出たのも大隈さんの説得で一時的のものであつた」などと前後の關係を懇々説いた。併し伊藤さんは「之れに力を盡して呉れないのは親切が薄い、人情が少な過ぎる」と不満の情を示し、私が種々辯解したに拘らず、どうも十分に解けなかつたので、遂には井上さんに話して貰つて諒解を得たこともあつた。

要するに伊藤さんは大政治家で、井上さんの如く實務に就いて仕事をした人でないが、實に優れた人物であつた。日本の政治上に遺した功績は喋々するまでもなく、世人の知悉せる處である。

——彼れ伊藤博文、當初固く超然主義を執りたりと雖も、親しく憲政の實務に膺るに及んで、政黨を排拒して到底圓滿に政機を運用する能はざるの理を悟り、乃ち其第二次内閣の末路に當り公然自由黨と提携し、其援助に倚りて戦後の事業を經營す。(中略)

博文熟く此車蹟に鑑み、私に政黨結成の念を起し、曩者台閣を退くの後、普く全國を漫遊し、到る處現在政黨の流弊の甚大なるを説き、之を改革するにあらざれば、憲政の美果を收むる能はざるを切論し、陰に胸中の微意を漏らす。其意に謂へらく『今後大に勢力を政界に張らんと欲せば、單り宮中の信用にのみ維れ頼るべからず。又單り藩閥の城壘を恃むべからず。汎く同志を民間に求め、鞏固なる政黨を擁し、始めて克く政界に馳驅するを得ん。但々既成政黨は、組織粗漫、情實纏綿、今や全然民心を失ひ、能く爲すあるに足るものなし。此時に當りて乃公の閱歷聲望を以てして、一たび旗を政界に樹てなば、直に既成政黨を一蹴し、絶大の勢力を形成すること、猶ほ掌を指すが如きものあらん』と。即ち博文の手を政黨に染めんとする所以のもの、陽に憲政の

濟美に資せんと云ふに在りと雖も、而かも亦多少の功名心を其間に參ゆを知らざるべからず。

憲政黨は山縣内閣と提携してより以來、大に天下の信望を失し、自ら黨運の衰頹を來す。乃ち政權を分領して、衰運を挽回せんと欲し、之を政府に要求したりと雖も、言下に其拒絶する所となる。會々伊藤博文の盛に政黨改革論を唱ふるあり、其人自ら進んで黨界に入らんとするの意圖略々看取するに足る。此に於て博文に頼りて局面を展開せんと欲し、斷然山縣内閣と提携を絶ち更に博文に乞ふに、來りて我黨を總裁せんことを以てす。博文食指大に動くと雖も、談唐突に出で、機亦未だ熟せず、乃ち巧辭之を拒む。憲政黨の計畫、爲めに一たび齟齬す。日を経るに及んで、博文の憲政黨併呑の意圖益々濃に、而して憲政黨の博文推戴の希望愈々加はる。爾來絶えず交渉を繼ぎ、兩者の情誼日に密邇し、歩々新黨結成の準備を講ず。既にして準備全く熟し、其黨を名けて立憲政友會と曰ひ、博文自ら總裁の地位を占め、八月二十五日の創立委員會に於て、宣言及趣意書を公にし、九月十五日發會式を行ひ、總裁博文、宣言の趣旨を擴めて會衆を訓誡し、頗る的正の言を爲す。此會に屬する者は、主として舊憲政黨員にして、博文幕下の官僚及各階級の崇拜者、相争うて之に投じ、他黨所屬の政客中、亦來りて盟に加はる者あり。其衆議院に於ける所屬議員數は總員の半數を超え、從來罕に觀るの勢力たり。此會は黨主獨裁の制を取り、黨員

皆な總裁の指導訓誡に黙従するの下に立つ。(中略)

博文は政友會を起さんとするや、一日參闕して天機を奉伺し、敷奏間々政黨の事に及ぶ。

傳へ曰ふ、博文は政友會結成に關して勅許を奏請し、允裁を得て其事に従ふと。故に當時世上漫に政友會を呼んで勅許政黨と謂ふ。私に接するに、政黨結成の意圖を聖聽に捧げたるは則ち有り、勅許を得たりと謂ふが如きは、畢竟無稽の妄言のみ。

博文時に東宮輔導顧問、帝室制度調査局總裁、皇室經濟顧問等の要職を佩び、宮内省所管の官邸に起臥す。時論其職任の政黨結成の事と相兩立せざるを判り、廷吏亦博文の行動を非議し、交々辭職撤退を諷す。博文拜けて辭表を呈し、政友會發會式前日を以て允許を得、次で官邸を去る。

(工藤武重著、明治憲政史)

## 四二、大藏省役人時代の回顧

### 一、大隈重信侯と井上馨侯

故井上馨侯とは、伊藤博文公や大隈重信侯よりも接觸の度が多かった。大藏省を辭職する際の如きは謂はゞ進退を共にした譯であつて、其後井上さんは依然政治界にあり、私は實業界に轉じたが最後迄何かにつけて相談し合つて來た。

初め私が大藏省に奉職する時には大隈さんに、奉職してからは大隈さんよりも伊藤さんに引立てられたが、明治四年に大隈さんが參議となつて大藏卿を大久保利通さんが勤められた折、井上さんは大輔としての任にあり、總て大藏省の事務を全然委任せられたやうに處理して居られた。故に大輔と云うても井上さんは大藏卿と同様の地位にあつて、四年、五年、六年の春まで大藏省の仕事にせられた。そして私が眞に大藏省の仕事をしたといふ時期も其頃であつて、井上さんの下で働いたのであつた。人からは私が大いに手腕を振つたなどと云はれて居るが、大した仕事も出来なかつた。只夜に目を次いで刻苦勉強したのみである。

井上さんは言論の人でなく實際の人で、大體にすん／＼實行すると云ふ側の人であつたから、時理論ぬきで我儘を云はれる事があつた。従つて話にしても學問的でなく、可なり粗雑な嫌ひはあつたが、實に何事にも通じて居て、不規則ながら思ひの外の事を知つて居られ、意外の事を云ひ出される事があつた。又非常に多能な方であつた、而して案を立てることなどは得意で實に湧くが如くであり、これで悪るければ斯うすると云ふ風で變通自在を極め實務に長けた人であつた。併し氣が短く、直ちに大聲で人を叱りつけたので、大藏省で井上さんを「雷」と呼んで居たが、それに關聯して私を「避雷針」と云つてゐた。其の意味は勿論私も怒りつけられることはあつたが、さまで他人の様に怒りもせず終りまで何事も相談づくであつたから、「雷」の井上さんが怒鳴り出すと、「避澤君に頼む」と云つて、私を避雷針代りにしたからである。

私が大藏省に仕出した事情は、屢々云ふ様に大隈さんに私の心情を打明け、「仰せに従ひませう」と云ふので、深く意見の交換も行つて居たのである。當時大隈さんが大輔、井上さんは少輔であつたから、井上さんは「詳細は大隈から聞いた」と云ふ風で、最初から親切にして呉られた。そして大藏省の改正係の組立は大隈さんがしたが、係の指揮者は井上さんで、係長は私であつた。其の實行調査の事項は貨幣制度の確立とか、公債發行並びに取扱ひ制度とか、銀行の組織とか、新しい

是等の仕事に對しては、伊藤さんが明治三年の初めに米國で調べて來たものを、四年になつてから實施しようとしたのであつた。其衝に當つたのが井上さんであつて、其時は大輔になつて居られたのである。

一體井上さんも伊藤さんも長州人であつて、甲乙はなかつた譯であるが、薩州人たる大久保利通さんに伊藤さんは嫌はれた。米國から歸つた時アメリカ風を吹かせたと云ふので、折角調べて來た財政經濟の制度も大藏省へ置いたまゝ、大阪の造幣局長に左遷せられたのである。處が一方井上さんは大輔となり、大久保大藏卿に代つて其の事務に任じたので、眞に大久保さんと井上さんとは相許し合つて仕事に任じて居たと云へる。又私はそれ等の仲間と云ふ地位ではなかつたけれども、井上さんとは専ら共々仕事をしたと云へる。従つて改正係から實務に就いて、租税頭、權大丞、それから大丞、續いて勅任官三等出仕となり、少輔と同位地に進められた。其時吉田清成と云ふ少輔が歐洲へ行つたので、其代りの事務を執つて居たが、其後遂に辭職するやうになつたのである。扱大藏省の仕事を本當にやり出したのは四年の春からで、井上さんが大阪から出て大輔となり、大藏卿の伊達さんが止めて大久保さんが代り、伊藤さんは大阪へ行つて留守で専ら井上さんは伊藤さんの調べて來た制度の實施に當つたのである。従つて私も井上さんと親しく接し、お宅の方へも伺つて殆



んご形と影との如くにして居たのである。兎に角私が大藏省で大いに働いた時期と云ふのは、廢藩置縣後の整理の時からである。井上さんと云ふ人は極く性急な人であるから、俄に註文を出すので却々困難であつたが、取調べの時なども改正係に相當な人が居つたからよく出来たのである。最もよく働いたのは三日三晩不眠不休で働いた事もあるが、それで餘りに疲勞を覺えもしなかつた。中には『もう堪へられぬから寝かしてくれ』と云ふ者などあつた程で、其間諸制度改正の始末、銀行の新制度等新しい仕事の数々あつた。井上さんはそれ等の事に就き總べて順序立て、議論を立て實行に移らうとする人ではなかつたが、よく私の説にも調和し又私の説をよく容れて呉れた。そして注意が頗る行きとゞいてゐて、先へ／＼と進むと云ふ風であつたから非常に働きよかつた。尙ほ他人との折合も私が専横なことを少しもしなかつたので、別に嫌はれる事もなく勤め得られた。同時に當時は血氣旺んな若さであつたゞけ、仕事が輻湊すればするほど働けた。實に當時は大藏省の仕事が盤根錯節の間に處理したと云へる程で、過失もあつたかも知れないが、井上さんが磊落の人で、自分の考へを遠慮なく云ふ人だつたから、思ひのまゝに仕事が出来たのであつた。殊に私に對しては政治界に志のないことをよく諒解して居て、よく盡して呉れた。

又經濟界のことでは、金融の制度を整備するに努め、伊藤さんの調べて來た米國の銀行制度を實

施しようとして井上さんも私も主張した。それに對して吉田清成君は英國の制度がよいと云つたが、私は米國式を事實やつて見ねばならぬと考へ、先づ資本を多數の人より集めるよりも三井を主として實行するがよいと云ふので、茲に第一國立銀行を起したのであつた。銀行の組織が後に誤つて居たことが判り、伊藤さんも井上さんも私も此の仕組に就いては失敗したのであるが、當時は固く執つて動かす、其の趣意を以て進み且つ人にも獎めて居たが、愈々組織の出來たのは井上さんの力である。従つて銀行の創始に對しては井上さんに感謝しなくてはならぬであらう。五年の十一月に國立銀行條例が發布せられ、銀行組織の基礎が定つた。折りから三井が是非之れをやりたいと云ふことであつたから、前述の様に第一國立銀行を起したのである。

廢藩置縣の後ち整理した處の太政官札を先づ兌換券にする、又其の兌換券に對する正貨準備をなす爲め今日で云ふ緊縮策を採らねばならぬと論じたが、之れは井上さんなり私なりの大藏省側の希望であつた。然るに此の緊縮策は當時攻撃の焦點となつた。又百事新しい時の事として幾分勢力争ひの氣分もあつたらうが、出納の權を大藏省が握つて居る爲め、緊縮策など唱へるに對して一般に横暴であると思はれてゐた。大體右の様な譯で、當時の大藏省は他の太政官初め一般の諸官省の攻撃の的となつてゐたのであるが、遂ひに明治六年の豫算編成に方つて井上さんが辭職すると云ひ出し、

私も進退を共にして年來の希望を達する爲めに大藏省を止めたのである。其時の事情は詳細に前にも述べたから改めて茲に述べぬ。兎に角井上さんと私とは進退を共にしたのであるが、兩者の辭職した趣意は夫々異つて居た。政府の執つた政策が形式に流れ、實際を重んずる處がないと云ふ點には二人の意見は合致したのであるが、私の意志は第一に大藏省の首腦として井上さんに代つて仕事をさせらるゝやうになつては困る。これは云ふまでもなく私自身豫て希望して居る實業の爲めに盡力し、其の成果を收めようと考へたからである。此點は大隈さんにも、井上さんにも話して了解を得て居たので、遂に其年に起された第一銀行を經營することになつたのである。

## 二、井上内閣流産に終る

井上さんは自ら表面には出なかつたが、其後益田君等を使つて貿易會社を起しなごした。それが今日の三井物産であるが、井上さんは依然政治家を以て自ら任せられ、一兩年の内には朝鮮使節、又黒田さんなどと共に英國使節を命せられた。私は銀行業者として立つて居たから自然と兩者の地位に相違が出来て、第一銀行設立の翌年、三井と共に之れに出資して居た小野組の蹉跌から問題が起つた時、井上さんは朝鮮へ行かれる前であつたが、『濫澤の爲めのみでなく、我が經濟界の爲めに

第一銀行の困難を救ひ、其の建直しをせねばならぬ』とて、其の方法などを心配し、種々三井方面のことを親切に取扱つて呉れられた。

其後井上さんは朝鮮から英國に赴き、次で十四年大隈さんが伊藤さんと政黨組織の事で意見を異にし一種の論旨免官の様になつて退き、松方さんがこれに代つた時、英國から歸られて外務省に居られた。爾來二人の位置が異つて居た爲め、二人の間は多少疎遠のことなどもあつたが、意志は常に通じて變らなかつた。従つて井上さんは經濟界の事に不満があると私の所へ來て、『これではいけない』などと云ひ、時に呼びつけられたりして意見を交換すると云ふ風で、井上さんは種々と經濟界の話をせられた。

明治十四年頃と思ふ、政黨のことに關しそれを起すと云ふのではなかつたが、同志を相寄らしめ政治教育をするに云ふことで、其の時分に福地源一郎君のやつて居た東京日日新聞に資金を提供することになり、銀行業者も其の發展に力を添へたことがある。私も一萬圓程出して新聞の發展を望んだ一人である。それで福地君は頻りに政治思想の普及を圖るべく種々のことを書きたてたが、私自身は六年以後政界に力を張らう等とは少しも考へて居なかつた。併し井上さんの方は政治觀念が強かつたので、此の時分にも屢々私は『政治の事に就いて私は貴方の相談相手にはならぬ』と云ひ

云ひして居たのである。

それから明治廿二年頃に全州市町村の自治制が布かれることになつた。其の時分井上さんは内密で、『自治制研究会』と云ふものゝ援助をした。小松原などと云ふ人も居たと思ふが、獨逸人の自治制度に詳しい者から自治制度の事を聞き、井上さんが先導となつて自治黨でも云ふやうな政黨も出来かゝつたこともある。そして私にも『仲間になつてやつて呉れ』と云はれたが、『それは困る』と云つて、相談相手の中から省いて欲しいと押問答をしたことがある。

三十四年伊藤さんが台閣を下り、松方さんや伊藤さんの肝煎で、井上さんに後繼内閣を組織させたいといふことであつた。此事は前にお話したと思ふが、此の話を受けた井上さんは直に私に大藏大臣をやつて呉れと云はれた。而も直接交渉の上に、更に内務大臣になると云ふ芳川顯正さんを通じ、或ひは楠本正隆君や園田孝吉君などを通じて頻りに慫慂して來たが、私は最早役人にはならぬいと確乎たる覺悟を持つて居るので之れをきつぱり斷つた處、井上さんが澁澤が出なければ自分も引受けぬと云ひ出した。其處で今度は山縣さん、伊藤さんの方から人情づくで私に大藏大臣を引受けて呉れと云つて來て、『君がやれば井上もやるのだから』と切に奨められたが、初めから私は政治をやらぬと決心して居るので、斷然お断りすると申出た。併しどうしても聞かず、『自己一身の爲め

不人情を敢てしてもよいのか』などと頻りに云はれるので、私は

『人情の爲めならば主義を没却してもよいと云ふ筈はない。併し左様に熱心に勤められるのを一概に斷ることも出来ませぬから、第一銀行を一緒にやつて居る人々にも相談し、銀行經營上から皆の者に判斷して貰つて、皆が承知したなら引受けませう。』

と答へて置いて事の顛末を詳しく銀行の重役に話した。其時の重役は佐々木、日下、西園寺等の人々で、種々協議の末『今銀行を離れてもらつては困る』と云ふことであつたから、日下君が代表で山縣さんと伊藤さんの處へ断りに行つて貰つて兎に角さつぱり断つた。そして遂に内閣は流産して沙汰止みとなり、結局桂内閣が出来た様な譯であつた。後に井上さんは『若し失敗して退く様だと末路に名を傷つける。君が引受けて呉れなかつたのが幸ひで、私も内閣を引受けなくつてよかつた』と云はれて居たが、其後内閣組織を中止したお祝をしようと云ふ事で御馳走になつたこともあつた。こんなお祝は類のないものである。それから後は時々變つたことであつた度に寄り合つて話合つた。尤も或る場合には議論を闘はずと云ふやうなこともないではなかつた。

### 三、對外問題に對する私の態度

外國との交渉が劇しくなつて來てから、伊藤さんは露西亞の東洋進出を非常に氣にして、日本が朝鮮に對して積極的に出ることは露國の心象を害する、事を好む様にと取られては困ると心配して居たが、井上さんも同意であつて、朝鮮で日本は我物顔に振舞つてはならぬと云つて居られた。而して京城と釜山の間の鐵道敷設が計畫され、韓國政府と交渉があつたが更に要領を得ず、在韓歲月を經過した。處が米國人モールズが京城仁川間の鐵道敷設の特許を得て居るから、之れを譲り受けて先づ之れを成功せしめ、更に本來の目的に進むこととなり、結局此の仁川京城間の鐵道を私達がシンヂケートを組織して資本を集め、之れで買収して會社を造つたのである。これは大隈さんが外務大臣の時であつて、伊藤さんはそれを懸念し、井上さんなどと一緒になつて反對されたが、山縣、桂さん等の人達は賛成した。それから明治三十六年日露の風雲が急を告ぐるに及んで、兒玉さんが心配して私の處へ飛んで來て、

「實業界の人々が戦争をやるがよいと云へば、直ぐに出征して露西亞を討つことが出来る。それに戦争をやれと言つて呉れ。若し實業家が戦争を嫌がつて居ては、到底出來ないのだから……。」

と云ふ。其處で戦争に非常に関係のある郵船會社に相談して、

「國民として郵船内部の意向が聞き度い。よんどころなく戦争する場合には、御用を勤めるかごうか？、特に郵船の關係は重大だから訊くのである。」

と云うて質問し、郵船からの回答を書面で以て出させた。此事に付いても井上、伊藤などの人達は「馬鹿なことをする」と大いに憤慨して居られた。

其夏であつた。犬吠岬へ私が避暑して居たところ、井上さんから電報で、「國家の大事だからすぐ歸れ」と云つて來たので、直ぐ歸京して見ると、

「日露の交渉が切迫したが、朝鮮の鐵道はどうなつた。早く敷設せねばならぬ、さう緩慢では困る。」と云ふので、私は

「貴方の様に我儘では困る。會社の創立には努めて居るが、貴方は反對説ではなかつたか？」と云ふと、

「理窟を云ふのはよさう、何とか成らぬか？」と云はれるので、

「金があれば出來るけれども金がないから困つて居ます。」

と答へたが、此時井上さんの心配で金が出来、彼の京釜鐵道が出来て、古市公威君を社長として成  
立したのであつた。

日米關係に付いては井上さんも私と同説で、力を添へられたもの、一つである。然るに井上さん  
は身體が弱く、以前の様な活動は出来ぬ模様であつたが、大正三年に中日實業協會が出来るとは  
大いに盡力され、又製鐵所のことも大隈内閣が成立した時分には非常に心配して居られた。先年片  
岡商工大臣が製鐵事業のことを考慮して、其の事業の大項目に注目して居るやうであつたが、私も  
當時から井上さんと之れに意見を加へて居たのである。

斯様に私と井上さんとは長い間直接間接に相共に働いて久しく變ることなく、國家のこと、經濟  
界のことに努力して、繼續的に交誼を厚うして來た譯である。そして井上さんは稀に見る敏活な勉  
強家で、又極く正直な親切な人であつた。政治に關し經濟に就いては、よく小言も云はれたけれど  
も、一つの目的を定めるとそれを變へずに進まれた。兎に角私は明治四年から亡くなるまで  
二つとない關係を保つて來たのであつて、私は財政經濟のことに就いては常に意見が一致し、最  
後まで信じ合つて來たのは思ひ出しても氣持がよい次第である。

## 四三、明治大正の大政治家

### 一、善處即大丈夫也の原敬氏

私の渡米中に原敬さんが亡くなつた、いや兎刃に仆されたのである。其の報知を耳にしたのは大  
正十年十一月四日の朝、シカゴの客舎に於いてである。私は大橋新太郎氏から此事を聞いて原さん  
は實にお氣の毒な事になつたと思ふと同時に、此の重要な時局に際して、原さんのやうな偉大な人  
物を失うた事を國家の爲めに悲しみ、轉た痛惜の情に堪へなかつた次第である。元來東洋の一帶に  
わたつて宇義の上からか、それとも誤つた解釋からか、刺客を志士のやうに取扱ふ氣風がある。此  
の原敬さんの暗殺は、果してどんな理由から此の擧に出でたのか判らぬけれども、或ひは其の間違  
つた氣風に禍ひされたものではなからうか。何れにしても此の凶變は國家の爲め遺憾千萬の事であ  
る。

故人を評するに當つて、公正なる見地よりすれば殆んど缺點のない人はないが、此處には敢て原  
敬論を試みようとは思はない。唯私の原さんに就いて追想する二三の事柄に關して一言しようと思

ふ。支那の言葉に『能言真君子、善所即大丈夫也』といふ事があるが、原さんは此の『善處即大丈夫也』の面影があつた人と思ふ。尤も其の遣られた事の中には適切でなかつた事もあつたらうし、又第三者が見て悪いと思はれるやうな事もあつたらうが、兎も角事を處するに妙を得た人であつた。私なども二三度直接關係した事に就いて、あの場合によく此の果斷に出ることが出来たと思ふ様な事がある。

口の人としては餘り優れてゐぬが、實行の人としては明治大正の政治家を通じて、先づ原さんなどは最も卓越せる一人であつたらう。直接本人から聞いたのではないが、原さんは不言實行を信條



原 敬 氏

として居つたらしい。(此事は既に述べたが)而して多年を遵奉して來られたかに思はれる。されば原さんから堂堂たる大經綸、大政策を聞くことは出来なかつたけれども其の實行の跡を見るに實績を收めたるもの、尠からざるを見るのである。たゞ不足を言へば、それが國の事よりも黨の事に偏し過ぎはしなかつたかと思ふ節がないでもなかつた。尤も原さんの肚を忖度すれば、百の議論よりも一の實行に如かず、而して其の實行を期するに

は議會に大多數を有しなければならぬから、黨の事に關しては人一倍熱心なものであつたらうが、それにして愛黨心が餘りに強過ぎた嫌ひがあつた。加ふるに結果に重きを置いた關係上、時に玉と碎くるの決心と時機とを失した事もあつた様に思ふ。缺點をいへば此の外にも無いではないが、名利に恬淡で私利私慾の念が毫末も無く、自身では一生平民で押し通したけれども、至つて情誼に厚く周囲の人々に對しては飽くまでも盡した點など、原さんの美德として數ふ可きであらう。時局重大、前途多事の際に於ける首相として、氏に俟つところ頗る多かつたのに、天壽を完うせずして兎及に仆るゝに到つたのは、實に原さんの爲めに惜むのみならず、國家の爲めにも亦大なる損失と謂はなければならぬ。

——君は南部に於ける名門の子弟であつた。南部の鼻曲り蛙とて、其強情、我慢は本來の持前であつた。併し少年時代より餓鬼大將の氣分が饒くて、死に抵るまでそれで終始した。君が多くの敵あると共に、多くの味方のあつたのは、畢竟此れが爲めだ。

君は政治家的天分過多にして、經世家的天分過少であつた。此一點に於ては君の先輩陸奥君とは、大なる相違がある。陸奥君は多くの缺點あつたに拘らず、尙ほ是れ經綸の才であつた。君に

は國家の大經綸と云ふが如きものは、不幸にして是れなかつた。併し政治家としては、近來稀有の雄才であつた。

君は理想家でなく、現實家であつた、君には過去もなく、只だ現在のみであつた。世界の公人中、恐らくは君の如く、今日主義に徹底したものはあるまい。君には過去の煩悶もなく、將來の取越苦勞もなかつた。但だ當座の問題を、さら／＼と解決して行けば、それで澤山であつた。而してそれが亦非常に鮮かな手腕にて解決せられた。それも其の筈だ。何となれば一切拘泥する所なく、只だ當座々々の出來得る丈の事を、出來したに過ぎなかつたからだ。併し此れは尋常一様の政治家の楷子かけても、企て及ぶ所でなかつた。

原君は時々刻々變化した。然かも政治家として見れば、退化なく、進歩であつた。凡そ政友會總裁としての原君程、其の威信の黨内に徹底した者はあるまい。第一世總裁の伊藤公よりも、第二世總裁の西園寺公よりも、第三世原君が、始めて名實兩ながら總裁たるの推戴、畏愛を、其黨員の殆んど總ての者より贏ち得た。此れは如何に割引しても、原君の美德と云ふ能はずんば、美點と云ふ可きであらう。そは何故である乎。

(第一)は自から一切責任の衝に當つたからだ。富と貴とは、卿等の取るに任す。難題と面倒と

は乃公に一任せよとは、原君が其の同僚に對する態度であつた。

(第二)は總べての黨員を通じて、原君が第一の勉強家であつた。勿論黨務に就ての勉強家であつた。政友會は、決して座上空談の政黨でない。此一點に就ては、如何に政友會が横暴でも、腐敗でも、認識せねばならぬ。然るに其活動的政黨中に於て、最大活動家は原君であつた。原君は未だ曾つて黨員に向つて行けと云つた事はない。彼は只だ來れと云ふた。如何なる難戰、惡戰、混戰の場合でも、君は全軍の第一先登者であつた。

(第三)は君が多量なる戰鬥力と、更らにより多量なる勇氣を具有したる事だ。君は決して觀兵式の大將軍ではなかつた。君は或る意味に於ては、戰鬥の爲めに戰鬥を好むの性癖さへあつた。君は如何なる強敵に遭ふも、決して退却せざるのみならず、必ず逆襲を試みた。萬一退却の止む可らざる場合にも、背奔せずして、前走した。

(第四)は君が凝注力だ。君には技藝とか、文學とか、宗教とか、哲學とか、骨董とか、書畫とか、あらゆる道樂がなかつた。君は何時も政治一點張りであつた。約言すれば君は政治に淫した。されば其の黨員に接し、黨務を見るが如きは苦痛なる義務でなく、愉快なる道樂であつた。言はば政治は君の生命であつた。

(第五)は君の精力絶倫で、體力も之に比して、亦絶倫であつた事だ。君の身體は、堅牢なる蒸汽機關の如く、何時も汽力が充溢してゐた。君の體力は、殆んど君の意の儘に、何等の支障なく遠慮なく使用せられた。而して君の精力は、宛も無盡藏の如く、如何なる場合にも、綽々乎として、遊刃餘りあつた。黨員の多くは、君に競争の叶はぬは愚か、追隨して、奔り且つ僵れた。

(第六)君には一種の親分氣質があつた。俄鬼大將でも、輕薄なる俄鬼大將もあれば、執着なる俄鬼大將もある。君は前者にあらずして、後者であつた。一たび君と交を締めた者は、其同輩と後輩とに拘らず、一旦緩急あれば、君に埃つ所があつた。而して君も亦た、必ず之に酬むた。若し君が大なる汚點を我憲政史上に残した事ありとせば、其の理由の一半は、之に存する。

(第七)君は公私兩ながら當てになる政治家であつた。此の一點に於ては、前に星亨あり、後に原敬ありと云ふ可きであらう。曾て山縣公が星を當てになる人物として、取り扱ふた如く、桂公も亦た、君を當てになる人物として、取り扱ふた。君は取引には、決して甘くなかつた。否な頗る辛くあつた。併し一たび確定すれば、決して漫りに之を渝へなかつた。然諾の事にかけては、君は其の先輩陸奥伯よりも、寧ろ大いに當てにす可き一人であつた。

(第八)君は政治上に於ける、金錢の價値を、極めて能く諒解した一人であつたが、さりながら

君自ら金持となる可く、金儲けに醒醒しなかつた。君の立場として、自ら富者とならんと欲せば如何なる富者とも、なり得たであらう。然も君の大望は、政治的權力であつて、富ではなかつた。即ち政治的權力もて、天下の富を左右するは、君の愉快の一つであつたが、然も自ら天下の富豪となるの野心は、毛頭是れなかつた。即ち君の個人としては、寧ろ營利に淡泊であつた。

(第九)君は理智に勝ちて、頭腦明晰であつた。此れと同時に、斷ず可きに斷じ決す可きに決した。君は自らの前程を、他人に向て、尋ねる程の悠長漢でなかつた。即ち吾が行程は、吾自ら之を測定した。併し其周囲の事情や、其の背後の黨員の消息やも、極めて注意深く考慮して、決して猪突、妄進しなかつた。君は決して脱線しなかつた。此の意味に於て、君は最も安全な政治家であつた。

(第十)君の強味は、爲すにあらずして、爲さざるにあつた。君は大活動家たると同時に、決して自ら進んで問題を、提起するが如き事を敢てしなかつた。君は何時も不敗の地を占めて、他の來るを待ち設けた。逸を以て勞を待つとは、是れ君の政治的六韜三略中の第一義諦であつた。新たなる提案を以て、天下を忙殺するが如きは、打算的なる君に於ては、餘りに莫迦らしくて成すを屑としなかつた。君は唯だ四圍の要求に餘儀なくせられたる場合、其の最も行はれ易きもの



を取り上げて、之を行ふた。されば君の仕事は、概して勞少くして功多かつた。

以上は君に就て、記者が平素觀察したる一班だ。君が唯一無二の政友會總裁たる所以、職として此處に存した。併し此の十個の美點(?)の裏面には、亦たそれ丈の短所あることは當然だ、必然だ。記者は返すくも君程の人物にして、國家に殉せずして、黨派に殉じたるを遺憾とする。併し君は近世我が東北の産したる超卓の人物だ。平生政友會に對して親交なき吾人も、我が日本人として君を其誇りの一人とするに異存はない。(國民新聞、徳富蘇峰)

## 二、逝ける大隈重信侯を偲ぶ

大隈さんも遂に私の米國旅行中になくなられて仕舞つた。大隈侯の持論たる百二十五歳説から言ふと大分損をされた譯であるが、元來大隈さんの百二十五歳説は人間は二十五歳までが成長期であるから、無病息災であれば其の五倍即ち百二十五歳まで生く可きものである、と斯う云ふ理窟を言はれたのであつて、恐らく侯自身もそれまで生きようとする氣持はなかつたらう。損をしたと云へば損をしたやうなもの、八十五の高齡まで生きて眠るが如き大往生を遂げ、而も『もう少し生かして置きたかつた』と國民に惜しまれる處を見れば、大隈さんも亦地下に在つて瞑することが出来るであらうと思ふ。

大隈さんは非常に抱容力に富み、何事に對しても俺に出來ぬ事はないといふ様な意氣を持つて居られた。但し少し風呂敷の擴げ方が大きかつた爲めに、往々にして袋の紐が結ばれなかつたり、又袋に穴が空いて洩れたりした事もある、併しそれは侯の短所であると同時に長所でもあつた。私が大正十年十月初め渡米する事に決定してから、一度大隈さんを早稲田の邸に訪問した。侯は其の以前から病氣をして居られたが、其時は大した事はないやうであつた。そして病中にも拘らずアメリカの問題について種々談話をされ、『どんな事があつても戦争をするやうな事をしてはならんぞ』と云つて、私にも出來るだけ其の意味で盡力され度い旨を述べられた。大隈さんの念頭には恐らく息を引きとるまで國家といふ事を忘れられなかつた事と思ふ。

私と大隈さんとの關係は随分古く、丁度大隈さんが大藏卿で築地に居られた時分、私は新政府から召出されて大藏省の租税頭に任する旨の辭令を渡されたことがあつた。併し私は新政府に出仕する氣持がなかつたので、大隈邸を訪れ辭退したのであるが、此時初めて大隈さんに御目にかゝり、侯の快辯に説伏されて新政府に仕ふべく決意したことは既にお話したから重ねて茲に述べない。大隈さんと私とは多少性格の異つた點、意見の相違した點もあつたが、此事あつてから親交は倍々深

くなり、爾來五十年餘り大隈さんの亡くなられた日まで親密な間柄を持続して來たのである。

大隈さんとは斯ういふ間柄であるので、大正十年十月十二日、即ちアメリカに向つて横濱を解纜する前日、再び候を其の私邸に訪問したが、其時嗣子信常さんが居つて、『折角ではあるが病狀が面白くなく、若し昂奮するといけないから……』といふ話だったので、遺憾ながら面會する事は出来なかつたが、『何れ機を見て私の來た事をお傳へ下さい』と傳言して辭去したのであつた。漸く使命の幾分を果して歸國し、久し振りで大隈さんにお會ひしている／＼お話をしようと思つて居つたのに、歸つて見れば既に幽明境を異にして、再び相見の事の出来ぬ永久の眠りに就かれたのは遺憾千萬である。大隈さんの功罪を數へ上げたならば随分澤山あらうが、在野の大政治家として將た東洋の著名なる平和論者として、更に我が教育界の偉大なる功勞者として、侯の事績は永く歴史の頁に止まるであらう。

### 三、山縣有朋公の思ひ出

山縣有朋公も既に鬼籍に入られてゐる。山縣さんとは方面が違ふ爲めに、私は特別の親交はなかつたけれども、私が伊藤博文公や井上馨侯などと親しい關係があつたから、其の爲めに山縣さんと



山縣公

も相當の交際はあつた。併し公の晩年とは全くかけ離れて、十數年來遂に親しく會談するの機會がなかつたが、大正九年アメリカからヴァンダーリップ氏の一行が來朝した際、山縣さんがヴァンダーリップ氏等と會見せられ、其後私も用事があつたので、久し振りで山縣さんを訪づれたことがあつた。其際用談が濟んでから公の謂はれるには

『私も日米關係に就いては永い間心配して居るが、先頃來朝したヴァンダーリップ氏は至つて穩健な人物であり實力があるばかりでなく、至極正しい考へを持つて居る人の様に思はれた。米國人は總じて自己心が強く、他の思ひ遣りのある人は至つて少ない様であるが、ヴァンダーリップ氏に到つては頗る穩當な意見を懷いて居る申分のない人のやうに見受けられた。あゝいふ人と親しみを深くしたならば、日米親交の上に餘程の効果があると思ふ。どうか今後とも日米親交の爲めに此上ともに盡力下さる様に希望します』

こいつて、私共がヴァンダーリップ氏を始め米國實業團を招待した事を非常に喜ばれた。話は大分古いことに遡るが、日清戦争後に於て私は朝鮮の關係に就いて屢々山縣さんと會見した。

伊藤(博文)さんや井上(馨)さんはロシアとの衝突を虞れて、朝鮮に臨むに頗る退嬰的であつたが、山縣さんや桂(太郎)さんは進取的であつたので、兩者の意見がどうしても一致しなかつた。此の兩者の意見にはそれ／＼相當の根據のある事は申すまでもないが、吾々民間側から言ふと、内閣の更迭するに伴うて政府の方針が變るので、朝鮮に於ける經濟的發展を策する上に於いて非常に仕事仕難かつた。其後日露の關係が漸く危機を告ぐるに當つて、どうしても朝鮮の鐵道を急速に敷設しなければならぬ必要を痛感するに到り、退嬰的であつた伊藤さんや井上さんなども遂に日露の衝突は避くる事が出来ない事を悟つて、井上さんを通じて私に朝鮮の鐵道を至急完成する様にとの懇談があつた。それで私などが中心となつて京釜鐵道の敷設を完成したのであるが、結局山縣さんなどの意見が實現された譯で、其頃には山縣さんとは随分頻繁に交際したものであつた。従つて其の性格の一斑を知る事が出来たけれども、特別の深い親交がないだけに、其の全部を知つて居るとは言へない。

山縣さんは非常に眞面目な方で、自分の長所をよく發揮し得る人であつた。又後進に對して親切であるから、自然名を成し地位を固めるに成功した。生前はいろ／＼な世評があつて大分誹謗されたやうであるが、永年あれだけの實力を保ち得たのは、或點から見れば專横の譏りを免れないだらうが、兎に角特殊の魅力を持つて居られたのは否まれぬ事實である。國家に對する觀念も非常に眞面目であつた。たゞ、時勢の進運を深く考へなかつた點があつたらしく、何時でも自分が世話を焼かなければ不安心のやうに思ひ、何事にも口を出したので、其の動機は悪るくないにしても、第三者から見ると随分間違つた仕振りもあつたらうし、又軍閥といふ背景を有して居つたので、非常に横暴に見えた場合もあつた様である。併し結果に於いて宜しくない事であつても、山縣さん自身は良い事をしたと思はれて居つたかも知れぬ。それは公自身の心持では凡て國家を思ふ赤誠からした事だつたからである。されば其罪を公の責任に歸する人もあるが、考への足らぬ點や見當違ひの事はあるとしても、公が強ひて作らうとして作つた罪でない事を認めなければならぬと思ふ。又後進に親切であり、乾兒を引き立てた關係から、自然山縣さんの勢力が増し、一面に於いては陸軍に於ける先輩なので、自から求めなかつたにしても何時とはなしに其の代表者の様な地位に置かれたものらしい。實業界には餘り深い關係はないけれども、明治の元勳としての功績は没却する事は出來ないと信ずる。

## 四四、我國財政政策確立の緒口

### 一、松方正義公の偉業

松方正義公が中央政府に乗り出して來たのは、確か明治三年だつたと記憶する。當時豊後の日田縣知事から大藏省租稅寮の租稅權頭に任せられたのであつた。租稅の佐は即ち權頭で、當時の租稅頭は故陸奥宗光伯であつた。そして大藏卿は大久保さん、大藏大輔が井上さんであつたが、大藏省は殆んど井上大輔が一人で切り廻されて居られたので、松方公は當時は左まで勢力はなかつたが、此の大藏省入りが抑も老公の財界に勢力を張る第一歩であり、且又後年に到つて我が財政策に對して大いに貢獻せる緒口であつたのである。

私が松方さんと初めて親しく交はる様になつたのは明治五年頃の事で、其頃は松方さんが大藏省の權大丞をして居り、私が大丞であつた。詰り其の當時同じ省内で同じ釜の飯を食つて居つたので自然仕事の關係から親しくなつた譯である。明治六年五月に井上侯が大藏省を去り、其後大隈重信侯が大藏卿となり、次で松方公が大藏大輔となつて初めて帝國の財政經濟の方面に向つて、大いに

力を注がれることゝなつたのであるが、明治十四年に大隈侯が政府を退いて野に下られてからは松方侯が大藏卿の地位に就かれ、爾來一層其色を濃くしたのであつた。其の後の松方公は我が財政策に關して直接關與せざるはなく、其の功績として數ふ可きもの二三にして止まらぬが、就中西南の役後の財政大緊縮、日本銀行の設立、金本位制の實施等公の我國財政經濟の方面に對する功績は甚大なるものがあるのみならず、公は明治聖代の内閣に再度迄も首相の印綬を帯びられた御方であるから政治界にも偉勳の數々があるのである。

之れより先き井上侯が大藏省の要務に就いて、政府の諸公と意見を異にして辭職せられ、大藏省の事務は大隈重信侯が引受けられて、松方侯は其の次官の任に就かれた。然るに大隈侯が井上侯の後を襲うて實權を握るや、大いに積極政策をこられた。其の結果として財政の膨脹を來たし、殊に西南戰爭に際して著しく不換紙幣を増發した爲めに、益々財政は膨脹するに到つた。何時の世にも「争の後は空景氣が出るもので、此時も徒らに物價及び賃銀は昂騰し、經濟界の混亂を招來するに到り、紙幣の價値は著しく下落すると云ふ有様であつた。之れは大隈侯の積極論、悪く言へば大風呂敷主義から來たものであつて、之れに對し松方さんを始め野に居た私なども消極論を唱へて反對したものである。處が明治十四年大隈侯が野に下り、松方公が大藏省の實權を握るや、持論た

る消極政策を行ふ事となり、財政の大緊縮となつて現はれたのである。

第一銀行の創立と共に東京、横濱、新潟、大阪等に於いて四つの銀行が出来たが、其の業務も實際に當つて見ると曾て理論上から計畫した處と相違する點が多く、創業勿々經營に尠からぬ困難を感じた。殊に明治八年頃世界の金銀比價の變動よりして、其の銀行の信用如何に拘らず發行紙幣に兌換の要求が頗る多くして、既設の各銀行は營業も維持し難い有様となつたので、各銀行協同して大藏省に向つて銀行紙幣兌換制度の改正を請願し、私は從來の交誼上松方公に此の事情を詳細に陳情し、公の盡力に依つて銀行制度を改正さるゝに到つたのである。

## 二、不景氣の招來と松方公の苦心

明治十年には西南戦争が勃發して、我國財政上に大影響を來たし、政府は已むなく各種の紙幣を濫發して一時の急に應じたので、其後物價が次第に騰貴して、此の趨勢は戦争終熄後も尙引續き一時は諸物價騰貴から商業界は繁盛の有様を現出したが、明治十三年頃から遂に正貨と紙幣との間に價格の相違を生じ、此の金銀比價の變動から頻りに紙幣が下落するに到つた。そして現に通用して居つた太政官紙幣は、發行の際十三ヶ年を以て正貨に兌換する旨を布告してあつたにも拘らず、其

後も種々の名稱を以て紙幣が濫發せられ、何時完全な兌換が出来るか其の見込もない當時の狀況であつたので、政治界にも經濟界にも種々の物議が起り議論が沸騰した。其際私などは消極主義を唱へて自己の發行せる銀行紙幣の幾分を減却せらるゝも、此際政府は英斷を以て大いに一般の通用紙幣を銷却減縮せられたいと主張し、大隈侯から叱責せられた事もあつた。

當時の一般輿論は一日も早く兌換制度の完成を望んだのであるが、一方當時の商工業の施設に到つては、成るべく進歩的指導がなければ諸事業の發展は望まれぬから、大體に於いては素より消極策を主張すべきも、或る方面には積極策を要する場合も少なくないと松方公は考へられて居た。松方公は不言實行の人であつた。そして一度信する所に向つては飽迄も其の所信を斷行せねば止まぬ性質の人であつた。公は當時の財政状態の病源を看取され、徒らに聲を大にせずして先づ通用紙幣の收縮に勉め、他方には米穀の輸出を奨勵して其の代價を以て正貨を獲得すべく、殆んど寢食を忘れて之れが實行に努力せられた結果、物價は徐々に低落して、明治十五、十六年頃には世間は極端の不景氣を招來した。此の極端な緊縮方針に就いては、伊藤公、井上侯等は痛く之れを憂慮され、之れでは人心が萎微して世間が衰頹に陥りはしまいかと思ふが、足下はどう考へるか私 의견を徵された事さへあつた。其頃外國から歸朝された陸奥(宗光)伯の如きは、之れは大變だ、何とかして

此の政策を緩和させなければならぬと叫ばれた。松方公の當時の苦衷は大いに察するに餘りあるが斯くの如き環境の裡にあつて松方公は毅然として其の所信を枉げず、斷々乎として而も穩健に其の政策を持続され、自らの信ずる既定の緊縮方針を緩められなかつた。

それが爲め明治十九年には、銀紙の價值が對等となり、初めて通用紙幣の價值が回復さるゝに到つた。斯様にして緊縮方針を實行し、且つは紙幣制度の完全を期せられた結果、明治十四年頃には一圓紙幣が五十錢位まで下落したのが、漸次恢復して一圓紙幣が一圓に通用するやうになつた。是れ一に松方公の力であつて、公の苦心は如何に大なるものであつたか、私は幾分か此の事實を知つて居るが、實に今日から考へて想像し得られぬ程のものであつたのである。

### 三、日本銀行創立の勇斷

銀行紙幣の事に關して更に強く記憶せる公の功績がある、即ちそれは我國の紙幣發行權の統一であつた。古來我國には銀行と云ふものがなく、従つて初めは其の營業方法が全く判らなかつた。將來商工業の發展を企圖するには、是非とも確實な金融機關の必要があるのである。各々自分の有する資本だけでは事業を擴張することは出来ぬ、多くの資本を集むる機關としては確實なる銀行の創

設に限るのであつて、例へば物資の間屋に於けるが如くにしなければならぬ。さもなければ結局物物交換の舊態に墮ち、商工業の完全なる發達は期待せられないであらう。貨幣は物資の定量の交換を便にすると云ふ原則に従つて、貨物の賣買に必須なるものであるが、一方にはまた餘裕の金のやり場に困る人のため、其の遊金を活用せしむることに役立つのである。茲に銀行の生命と活用とが存すると云ふことが出来る。銀行創立の當初は明治三年伊藤公が米國式銀行制度の採用を提唱せられ、又英人について親しく研究して歸朝した吉田清成氏は英國式銀行制度を推稱し、朝野の間に賛否兩論があつて、種々之れが可否に就き討議されたが、之を判斷して實行するのは時の大藏省の主宰者たる井上侯で、私は之れに參與する位置にあつて、審議攻究の末米國式が奇効ありと斷案して遂に伊藤公説の米國式を採用したのである。夫れで愈々銀行條例を制定することゝなつて、私が其の主任となつて之れを作成し、之れを發布するに到つた。爾來設立の各銀行には紙幣發行の特權を付與することにしたのであるが、其の結果第一から第百五十三までの銀行が創立され、之等の銀行は何れも得た特權によつて皆各々紙幣を發行したから、之れが將來國內の經濟界に大いに注目を要する問題を惹き起したのである。

松方侯が大藏卿とならるゝや早くも此點に着目され、明治十五年には先づ日本銀行を創立して、

紙幣發行の事を統一せんと企てられた。當時紙幣發行權を有する銀行が百五十三の多きに達し、其上に更に日本銀行に紙幣發行の事を許可するに於いては、將來の金融界は實に危険な事であつて若し一銀行に不信用な事件が起つて紙幣の取付けがある場合には、之れが全體の銀行紙幣に波及して一般の疑惑を解く事は頗る困難なことである。こゝに於いて松方公は是非個々の銀行の上に更に中央銀行を設け、之をして中樞的機能を發揮せしめなければならぬと云ふ説を主張された。明治十五年に日本銀行の創立されたのは全く松方さんの勇斷によつて生れたものである。これで我國の銀行制度は伊藤説の米國式と吉田説の英國式との長所を採り、之を折衷したものとなつたのである。

日本銀行の創設に就いては私も創設委員の一人として參加した。松方公は元來が英國式の主張者であるが、特に米國式の銀行を經營してゐる私を創立委員の一人に加へた點よりするも、其の心事の至公至平の外何物もなかつた事を推知する事が出来よう。而して松方公の一大見識によつて創立された。日本銀行は次第に發達して遂に今日に到つたのである。是より先き國立銀行の設立と共に各國立銀行紙幣制度を改めなければならぬが、之れと同時に各國立銀行に打撃を與へ、經濟界に混亂を生せしめる様な事があつてはならぬから、此の銀行紙幣制度改正の事も却々困難であつて、公も之れには餘程心配されたやうである。

茲に於いて公は私と安田善次郎、山中隣之助氏とを大藏省に招致せられて懇々と相談があつた。そこで私共は銀行制度は米國式が良いと思ふけれども、紙幣制度の改正は公の注意が適當であつて既に日本銀行設立の上は尙更の事と思考し、其旨を公にお答へし、其の代り各銀行の紙幣償還方法に付いて寛大なる手續を設けて御便宜を戴きたいといふ希望を申述べた。是に於いて大藏省から各國立銀行へも、其の趣意を訓示し、終には日本銀行は委任を受けて各銀行の紙幣償還を代理することとなり、其の擔保の公債の利息から漸次に償還する事が出来たから、何れの銀行も自己の手から少額の資本を支出するのみで其の償還が済んだと同時に、政府は各銀行から紙幣發行權を取上げてしまつた。實に恰好なる松方公の御手際で、公が確乎たる意志と、名よりも實を重んずる主義であつたが爲め、此の稀れなる功績を收め得らるゝに到つたのである。兎角斯様な問題には種々の紛議又は騒動が勃發するのが多くの例であるが、斯くも無難に國立銀行を繼續せしめ、平和な手段によつて紙幣制度の改正を遂げて、財界調和の大策を完うせられた松方公の偉大な功績は、私の推奨措く能はざる處である。

其他興業銀行、勸業銀行、農工銀行など特殊銀行の創立も、多くは公の發意によつて出来たものである。正金銀行は大隈さんの發議されたものであるが、之れも亦松方さんの手によつて其設立を

見るに到つたものである。

——明治の維新によつて大政は奉還せられ、新政府は樹立したけれども、歳入は僅少であつて財政は缺乏を極めた結果、明治元年四月に太政官札を發行して、歳入を補うたことに端を發して爾後各種の政府紙幣が發行せられるやうになり、又之れを納付させて國立銀行紙幣が發行せられたのである。此の兩紙幣は共に不換紙幣であつて、正貨に對する紙幣の相場の下落と物價の騰貴とは、此の不換紙幣を整理することを急務とするに到つたから、政府は政府紙幣整理の方策を講じたが、同様に不換紙幣である國立銀行紙幣に就いては、銀行券の發行を全國百有餘の特權銀行に行はしめるか、或は又中央銀行に行はしめるかと云ふ問題を考慮して、之れから解決してかゝることが必要であつたのである。

紙幣整理の任に當られた松方大藏卿は、明治十四年九月、「日本帝國銀行」設立を提議した財政案を政府に提出され、更に翌年三月には、日本銀行設置に關する建議書及び創立趣意書を提出せられた。此の建議に依れば日本銀行を設立する目的は、

第一、日本銀行を全國の樞軸とし、國立銀行を支店と同様に視て、之れとコルレスボンデンスを

結んで、相互の間を聯絡融和し、之れに依つて資本の有無を通じて金融を便易にすること

第二、國立銀行は、資本は寡少であり、信用は薄弱であるが有力な中央銀行を設立して、貸付割引を行はせ、他の銀行の資金の欠乏を補ひ、信用を助け、之れに依つて一般商工會社の資力を擴張すること

第三、中央銀行は、専ら手形の割引を本務として、金融の輪轉を迅速にし、金融の壅塞することを救うて金利を低減せしむること

第四、中央銀行を設立して後ち行務が整頓するに到れば、國庫の出納、國債の償却等の事務を委託し、官金の繁閑を量つて手形割引等に用ひ、國庫の殖益を圖ると同時に、民間の融通に便宜を供すること

第五、割引歩合を高低にして正貨の出入を調節する爲めに、外國手形を割引いて正貨を吸収する道を開くこと

に存してゐた。而して白耳義中央銀行に範を採り、且つ又我國の慣習をも參酌して、日本銀行條例と定款とを起草されたのである。(新日本史、銀行篇黒川英雄)



#### 四、斷乎として金本位制を採用す

松方公の更に敬服に堪へないのは、金貨制度の確立に公の果斷が與つて力あつたことである。維新勿々は我國には貨幣制度はなかつたが、明治二年に初めて大阪に造幣廠が設けられ、次いで明治五年私がまだ大藏省在官時代に、金貨本位制を採用する事に定めて、其の條例も私が調査して拵へたものであつて、爾後二三十年存続したが今日のごとは異つて註釋つきの長々しいものであつた。併し當時の貨幣制度は、制度の上では立派に金貨本位となつて居つたのであるが、事實は金貨本位ではなくして、金銀兩本位となつてゐたのである。之れには種々の原因はあるけれども、主として支那を對象として居つた關係上、止むを得ない事であつたとも言へる。



松方公

處が日清戦争後支那から二億兩餘りの償金を取る事となつたので、此の償金を基礎として完全なる金貨本位制としなければならぬといふのが松方さんの意見で、之れに關しては賛否兩様の意見があつた。私などは當時の状態から金

本位制度實行に反對した一人であつて、園田孝吉、田口卯吉の兩氏なども私と同じく時期尙早論者であつた。

其頃阪谷(芳郎)男や添田(壽一)博士杯も大藏省にあつて、熱心に公の原案を支持されたものである。殊に大藏省内に貨幣制度調査會と云ふのが設けられ、委員には田尻稻次郎、阪谷、添田等の一人、其他田口卯吉、莊田平五郎、園田孝吉、益田孝、金井延の諸氏及び私も其の一人で、約三十人ばかりの實業家、學者等が集まつて盛んに討論したものである、私などは今直ぐに之れを實施すれば、或ひは經濟界を混亂に陥れる虞ありとして大いに懸念したけれども、公は斷乎として一部の反對を斥けられ、金單本位制を實行せられたのである。斯くて我國に眞正なる金本位制が確立したのであるが、今にして思へば松方公は確かに先見の明があつたと云ふ事が出来る。

明治三十一年英照皇太后の崩御に方つて、私が京都に行つた時伊藤公の意見を問うて見たら、『遣り損ふやうなことはないだらうか』と伊藤公も亦私と同憂を有つて居られ、特に早く歸京されて松方公と會談されたが、其後私に言はるゝには、『松方と種々論議したが、特に懸念する事もなからうと思つて、自分も亦同意した』との事で、私も稍々不安が薄らいだのであつた。斯くの如く有識者の間に於いてさへ自信が少なかつたのであるが、松方公の信念は確乎不動で遂に其の實施を斷行す

るに到つた。斯く觀すれば松方公の先見と勇氣は近代稀に見る處であり、我國金融界に對する大恩人であると云ふ可きである。(上卷六四二頁參照)

### 五、老公に就いて思ひ出す事ども

松方さんと私との個人的關係に就いても尙種々思出話があるが、公の晩年になつてからは互ひに疎遠勝ちになつて居つた。處が大正十一年私がアメリカから歸朝した當時、添田壽一博士を通じて松方さんから私への傳言があつた。それは澁澤がアメリカから戻つたさうであるが、いろ／＼アメリカの事情を聞きたいから、暇があつたら遊びながら一度鎌倉に来て呉れ、と斯ういふ傳言であつた。それで一日私は鎌倉に出掛け、松方さんにお目に掛つて、主としてアメリカの話や其他に就いて私の意見を述べた處、老公は餘り自分の意見は述べられず、主に私の意見を聽いて居られたが、それが生前に於ける老公との最後の會見であつた。

大正十二年の大震災に當り、老公が生死不明であるといふことが傳へられ、大いに案じて居つた處幸ひにも無事に避難されたといふ事を聞いて、大いに安心した次第であつた。然るに其計に接し、年齢から言へば寧ろ長壽の方で不足はないが、舊知が斯く段々減つて行く事に淋しさを感せしめら

れる。老公の歿後三田の邸宅を吊問して、今は幽明境を異にせる老公の亡骸に最後の訣別をしたのであつたが、老公の面影は恰かも眠れるが如く、少しも苦悶の色などは見えなかつた。眞の大往生とは老公の如きを云ふのであらう。

老公の言語は薩摩辯で分明を缺く點もあつたが、極めて濃厚親切な人で、古人の所謂他人に先つて憂へ他人に後れて樂しむと云ふ風があり、臨機應變に巧妙とは云へないが剛健質實とは誠に適切なる評語であつた。其の態度も亦實に見上げたもので、幾多の功績を私せず一に時勢の資として常に謙讓の心を失はれなかつた。そこに美しい公の人格を窺ふ事が出来る。公が首相としての功績又は日田縣知事時代の令名も偉大であるが、私の關係外のことでもあり、公の眞髓はやはり財政經濟にあつて、公が政界に居られた間財界のことに關係されぬことは殆んどなかつたと思ひ、日田に建立せる碑文中にも私は其事を書き残して置いた。其の碑文は實は徳富蘇峰氏に大體の意味を述べて依頼して、原稿を作成して貰つたものであるが、その全文は左の通りである。

明治大正ノ聖代ニ於テ、大政ヲ輔翼シ皇猷ヲ贊襄シタル、文武元勳其人多カラズトセズ、然モ資成忠成シタル者、實ニ海東松方公ヲ推サズンバアラズ、公再ビ洪鈞ヲ秉リ、財務ノ重責ニ膺ル、

前後十有餘年、地租改正、日本銀行ノ創立、國立銀行制度ノ統一ノ如キ、概ネ公ノ力ニ頼ラザル無シ、而シテ不換紙幣ノ銷却、金貨本位制ノ確定ノ如キハ、特ニ天下仰テ以テ照著ノ功績ト爲ス、明治元年閏四月、公壯齡ニシテ擢ンデラレ、日田縣ニ長官トナル、日田ハ豊後ノ一隅ニ偏在スルモ、山水清淑學藝ノ淵叢タルナリ、然モ幕府直轄ノ地ニシテ最モ難治ト稱セラル、加フルニ世局倥傯物情騷然タリ、公能ク大體ヲ持シ、民意ヲ察シ、寬猛兼濟ヒ久シカラズシテ人心悅服ス、土俗墮胎殺孩ノ惡習多シ、公自ラ先ヅ私財ヲ投ジ、更ニ資ヲ有志ニ募リテ育兒基金ヲ得、明治二年地ヲ日田ノ中央ニ相シテ養育館ヲ設ケ、治下ノ能ク育スルコトナキ産兒ヲ此ニ收容シ、命名スルニ松某若クハ某松ト云ヒ、皆公姓ノ一字ヲ以テシ、明治六年ニ至ル、其數舉グルニ違アラズ、後年公ノ功成リ名遂グテ此地ニ臨ムヤ、公姓ノ名トスル男女相會シ公及ビ公夫人ノ壽ヲ獻グ、其恩ヲ謝ス、而シテ郡民相慶シテ皆ナ萬歳ヲ唱ヘタリ、公ノ惠政ノ民ニ及ブ深且遠シト云フ可シ、頃日同地方ノ官民胥ヒ謀リ、公ノ恩德ヲ貞石ニ勒シ之ヲ不朽ニ傳ヘント欲シ文ヲ予ニ徵ス、予公ト相知ル五十餘年、誼辭ス可カラズ、乃チ其一斑ヲ誌シテ以テ後人ニ諭グ、若夫レ公ノ偉勳豐功ニ至リテハ錄シテ國史ニ存ス、復タ爰ゾ予ノ特書ヲ俟タン哉。

「元老と稱するもの、實は維新の元勳を優遇する稱呼にして、其の元勳は疾くに逝き、今の所謂元老は當年の屬僚上りに過ぎず」とは、曾て犬養木堂が喝破せる一齣であつた。まことに然り、海東松方正義公、もとより維新の元勳とは言はれない。併し公の公的生活は、九十年を殆んど官場に捧げたもの、夙に要局に膺りて獻替することの多かつた事は、何人も認めずに居られまい。

公は何と云つても、財政方面の先覺者である。今日の進歩した世の中で云ふ財政家と云ふことは出來ずとも、當時に在りては井上世老と共に、押しも押されぬ財政家に相違なかつた。大隈侯は例の無遠慮な口調で、「松方もさつまに生れなかつたら郡長位が精一杯だ」ナンテ評したのだが、事實は世に松方閣、松方系の牢乎たる城廓を築き、日本財政史に没すべからざる功績を残してゐるに徴しても、維新後の帝國財政から公を開却することは出來ないではないか。

故世外老と公とは、確か同年であつたと思ふ。明治五年に陸奥宗光が租税頭、公は租税權頭、大藏卿は大久保利通、澁澤榮一子が大藏大丞、大藏大輔は井上馨で、明治政府の財政を切り盛りした

のである。其後大隈も加はつたが、例の十四年の政變で大隈が野に下つてからは公の舞臺となり、大に手腕を揮はれたもので、兌換制度によつて通貨の流通を圖つたことや、特殊銀行の創設や、金貨本位の確立などは、誰でも知つてゐる公の功績である。(東京日日新聞)

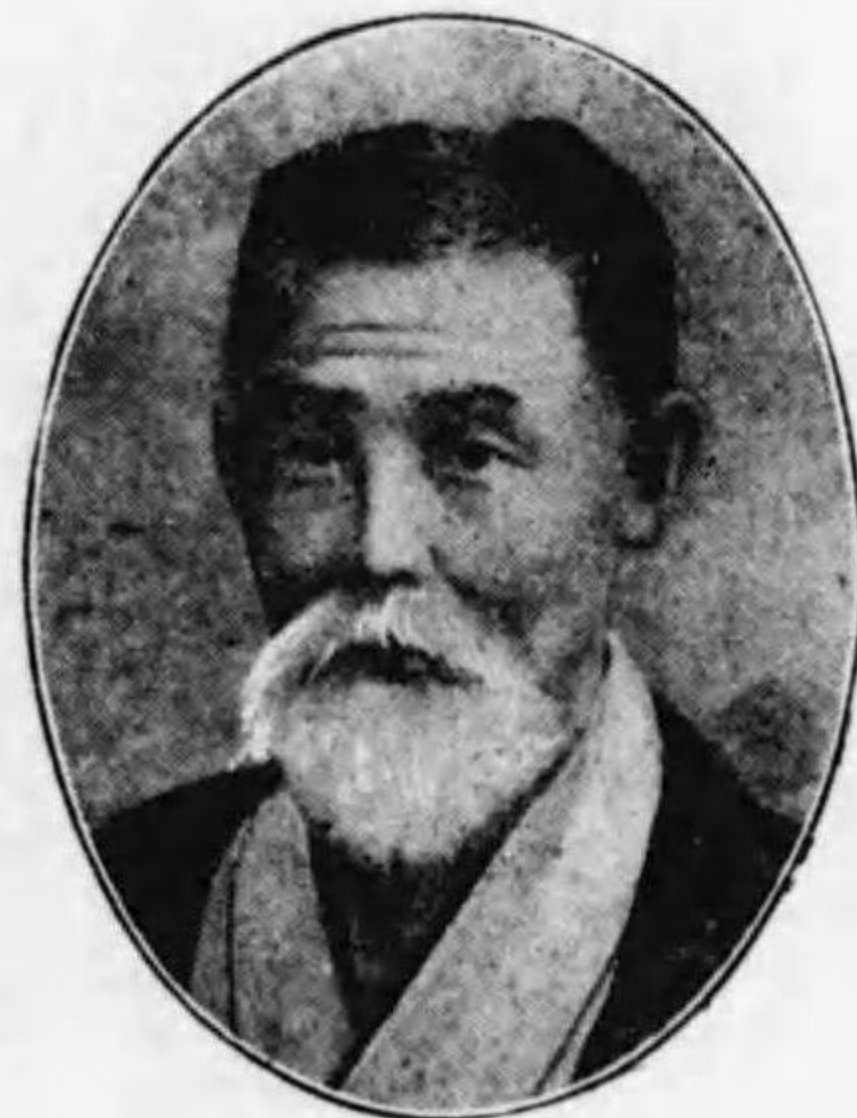
## 四五、中外商業新報の創刊

### 一、創立者福地櫻痴居士

中外商業新報の創刊(明治九年)に就ては益田孝氏、福地源一郎氏などが盡力されたもので、私は實業界に居た關係上多少お力添へをしたが私の効果があつたかどうか判らない、當時の新聞は政治論に力を入れて居て、商工業上の事には殆ど意を注いで居なかつた、さすがに益田さんは能く氣がついて、物價の高低とか、商業取引のいきさつとかいふことを知る機關が、わが國に是非必要であるといふことを頻に主張された、さういふことから中外商業新報は生れたのである。

福地源一郎といふ人は私が明治の初め大藏省に居た時知り合ひになつたが、明治三年十一月頃、伊藤さん(後の博文公爵)が大藏少輔で頻に庶政の改革を企てられたが、どうも今の姿では大藏省もいけない、一つアメリカに行つて十分調べて來たい、大隈さんも(後の重信侯爵)當時大藏省に居られたが——伊藤さんは大隈さんにも相談して、公債をどうする、紙幣の始末はどうする、銀行をどうする、確實な金融機關を造らねばならぬ。更に進んでは諸官省の制度も大變令に據つて居たので

はいけない、大藏省の制度はごうしたら宜いか——仕事が實に多い、これを調べるにはとても一人ではいけない、誰か相當な人を連れて往かねばならぬが心當りはないか、私は伊藤さんからこんな相談を受けた、それからアメリカ行きに就ては大政官の同意を得なければならぬから意見書を書いて呉れと云はれて私が筆を執つて書いたものだ、それでア



福地 櫻 齋 士

メリカに連れて行く人は筆の器用な者が宜いと云ふ話から私は福地を推薦した、伊藤さんもそれは面白いといふので福地の外に芳川顯次郎氏、吉田次郎氏が随行することになった、當時陸奥宗光、永島作太郎等の人がヨーロッパ歸りでアメリカに居つたから、それらの人も一所に大勢で調べて歸つて来た、これがそも／＼わが國の經濟界に文明式の

制度を輸入した始めといつて宜いのである。

銀行もその後大に變化したから伊藤さんが初め起きたことは殆ど影も形もなくなつたが、金融機關にても今までのやうな金貸ではない、銀行をこしらへねばならぬと云ふので、調べて歸つたものが後の國立銀行條例と云ふものに變化したのである、伊藤さんがアメリカから種を持つて來

て、井上さん（後の馨侯爵）が裁斷役となり形を造つたのが私と福地とである、銀行と云ふ字は福地があみ出したのである。

福地と云ふ人はなか／＼勉強した『會社辨』といふものをこしらへたり、『立會略則』といふものを書いた、この著述は大藏省の藏版で残つて居るが、福地はどうしても『會社』といふものを起さなくてはいかぬといふので『會社辨』を作つたのである、『立會略則』は吉田次郎が原案を作つて私が修正したもので今日の法律眼から見たら幼稚なものであるが、兎に角その時分には何もなかつたのだから、それでもわが國の經濟の發達に役立つたのである。

## 二、新事業に慧眼な益田孝男

益田さんは明治五年頃井上さんと知り合ひになつた折井上さんから「かう云ふ者が居る、使へる男と思ふから大藏省へ入れて造幣局をやらせたらよからう」と云はれて益田さんは造幣寮へ來ることになつた、それから間もなく井上さんは財政上の意見が合はないで辭職する、私も井上さんと同論であつたからやめる、益田さんもやめた、これから私は民間に出て日本の發達を計るには、どうしても商工業を起さねばならぬと云ふ深い信念を持つて銀行を起した、益田さんも民間で仕事をす

ことになつた前に伊藤さんがアメリカで調べて来た不換紙幣の引換へ方法と金融機關を造ることが目的であつたが、その金融機關に就ては主として三井と小野とが出資者となつて各百萬圓づゝを出し、その他から五十萬圓を集めて二百五十萬の銀行をこしらへ、幾分かわが國の商工業が進んで来るやうになつた。

しかし、どうもまだ十分にいかない、これは文字の上で評論し、指導するものがなくてはいかぬといふので、益田さんなどが頻りに外國のことを調べて、經濟に關する新聞が必要であると主張されそれに福地も力を添へて今日の中外商業新報が産れたのである。

私は官をやめて民業をやり出したものだから、自然と先輩の位置に立つやうになり、當時初めて商業會所を作つて私が會長、益田、福地の兩氏が副會長と云ふことで仕事を始めた、その頃東京府會が初めて出來て、楠本さん(後の正隆男爵)が濫澤も是非議員になれと二度も三度も勧められたが、私は政治に關係しないことに極めてゐたから斷つた、そして福地君や大倉君には勧めて兩君は府會議員になつた、府會で福地が福澤さん(論吉氏)と議長争ひをしたこともあつた。

福地は少し力の軽いところはあつたが極淡泊なまた嫌味のない人で殊に筆は實に流ちやうで、面白い人と云つて宜いが、たゞ惜いことには何事もチャンとした結末の付かぬ人であつた。それに引



益田孝男

替へ益田君は實に思慮周密特に實業に就ては誠に能く屈いた人で、かつ新しい事には實に早く目が届いた、當時經濟に關する新聞の必要を認め、中外商業新報の創刊に力を添へたこともその一つであらう。中外を今日のやうに盛大なものに進めたことに就ては木村君(清四郎氏)なり、野崎君(廣太氏)なり、また現にやつて居られる築田君(欽次郎氏)の丹精ではあるが、明治九年の創刊に力を入れた益田君などの骨折は、どうしても没却することは出来ないと思ふ。

新聞が政治を論じあるひは外交を評すると云ふやうなことは新聞の性質とも云ふか、どうしてもさう云ふ方に傾き易いものである、無論それも必要であるが、併しまた私は一國の經濟の進歩に就て、如何に必要なものであるかと云ふことを忘れる譯にはいかない、また決してこれは忘れてならぬことと思ふ、既にこの『中外商業新報』の如き良い新聞が今日の如く盛大に發達したと云ふことが、即ちその必要な證據であると思ふ、もつとも如何に必要であるからと云つて、何でも彼んでもが發達すると云ふ譯ではない、例へば人は如何に貴いものだと云つても、良い人物

がなければ賤しい者ばかりで世を送らなければならぬ、新聞もその通りで、如何に必要であるからと云つても、それに長じた人がなければ本當に良き効果を現し、新聞そのものを發達させることは出来ない。

### 三、經濟新聞の主眼点

私は新聞に就ては無學であるから誤つて居るかも知れぬが、新聞が新しい場合には、どうしても經濟のやうな地味なものよりは政治とか、社會とか云ふ人氣に投ずるものに流行が早く来て、勢ひその方が先へ名を出すことになるだらうと思ふ、中外商業新報がこの間において、わが國の經濟の發達に就て深く考へ、輕躁に走らず、さりどてまたあまりに自重に偏せず、いはゆる中正を持して徐にその歩を進めて來た事は——特に近來益田君の働きと方針には大いに賛同するのである、いはゆる「言悖つて出るものはまた悖つて入る貨悖つて入るものはまた悖つて出づ」と云ふ大學の教への通りで、何事でも一時に急に進むとまた退却も激しい、それ故、地盤を固めて一步は一步に進めて行くと、着々物を暢ばして往くことになるのである、中外商業の經營の如きは全く私の希望するところと一致して居る。

凡そ事業には氣勢と云ふものがある、たゞ實着といつて眠るが如き有様になると自然人氣を引立てることを欠く嫌ひがある、地味な經濟新聞ではさういふ欠陥がないとはいへぬ、それを中外商業は近來この點に就てもよく注意されて居ることを私は喜ぶのである。

私は更に茲に希望を述べる——これは獨り中外商業新報にばかりではないが、經濟と云ふものをつたゞ利害のみに依つて判断するのではなく、正しい道理に依つて判断すると云ふことにならなければならぬと思ふ、詰り「富」と云ふものは持つて居るその人の富だけが眞の富でなくて、世の中の大きな利益が眞の富であると云ふやうに誰もが考へて貰ひたいのである、獨りで貨財を集めると云ふことは出来るものでない、また假りに出來たところでそれは眞の富にはならない、どうしても全體の人の進歩を圖り、全體の人の人格を進め全體の人の事業が進んで來るといふことになつて初めて眞の富といふものが生ずるのである、たゞ個人的に獨りで貨財を集めても決して榮華を得る譯にはいかない、己立たんと欲して人を立たせ、己達せんと欲して人を達すといふ孔子の教へが、經濟界にも適用されなければならぬと思ふ。

更に一步を進めていふなら、政治もまたそれで、政治は術數である政治は力であるなど論じることが、併し根本は道德でなければならぬ、根本の道德を忘れると國家は危機に出會ふか、あるひは頽

廢に陥るか、けだしその二つを免れることは出来まいと思ふ、今日政治家の大部分は政治は道德なりといふことをほとんど忘れてゐる、この有様では遂に日本はどうなるかと言ひたいのである故に政治に對しても道德は勿論必要であるが經濟に對してもまた必要である。

個人が富むと云ふよりは、寧ろその國の經濟事情が本當に發達して行けば、これに従事する人は必ず相當な地位、相當な働きをして、それから生ずる幸ひを受け得られるのである、例へばカーネギーの如き、その父が世の中の進歩から從來の家業であつた機械の仕事がだん／＼損になつて立行かなくなつたに就て、家をたゞんでアメリカへ出掛けた、それが彼の十四の時であつた、それから勤勉努力してあの通りの大富豪となつたのである、彼は最後にその富をどうするが宜いかと考へ、これを經濟界の爲に散じる、世界の經濟界の發展を圖るのが、己の富を積んだ本旨だと云ふことに達した、それで世界の經濟の發展には平和が必要だと云ふので平和殿を造つたり、方々にカーネギー・ホールを造つた、そこにいはゆる富を私せぬといふ彼の崇高なる精神がかゞはれるのである。

私は世界において政治界ではジョージ・ワシントン經濟界においてはアンドリュー・カーネギーこれが實に雙壁であると思ふ、けだし經濟と道德を一致させた人であると言ひ得る、兎角富を成す

人は、その人一代は働きがあるが、その子その孫になるとそれだけの働きはない、働きがなくて富のみあると、それこそ君子財多ければその徳を損じ、小人財多ければその過を増す、君子でも小人でも財のためには往々過ることがある。

經濟は道德と全く一致するものであると云ふことを、中外商業新報は主眼として世の中を指導して戴きたい、しかも若し不道理に依つて富を成さんとする者があつたならば筆の力に依つて假藉なく論難して戴きたい。同時に道理に適うた者は、直接にその人を稱讃せぬでも、大いに聲援を與へて、自から一般の人々をしてこれに注意せしむるやうに、刺戟誘導して戴きたいと思ふのである。

中外商業新報ハ初メ中外物價新報ト稱ス明治九年十二月二日第一號ヲ發刊ス當時ハ每週一回ニシテ刊行費ノ幾分ハ内務省勸業寮ヨリ保護セリ蓋シ同寮ニ於テ取集メタル勸業ニ關スル海外報告其他ノ材料ヲ世ニ公ニセンカ爲ナリ明治十一年一月ヨリ五日目一回ノ刊行トナリ明治十三年一月ヨリ四日目トナリ明治十五年ヨリ每週三回トナリ明治十八年七月一日ヨリ日刊トナリ明治二十二年一月二十七日中外商業新報ト改稱ス青淵先生ハ同新報ノ出資者ノ一人ニシテ同新聞ノ改良ニ力ヲ添ヘタリ



## 商況社の喬遷を祝し併せて將來 同社に望む處あるを告ぐ

澁澤榮一

中外物價新報の我商業世界に現れしは今を距る十三年以前にして、明治九年に初めて發行せしものなり、而して其要旨は題號の如く、主として中外の物價を詳載し旁ら商業上の時事を記し、社説の如きは勉めて着實を貴び、商業社會緊要措くべからざるの時にあらざれば、叩りに言を發せず弄筆舞文濫譽輕毀の擧に於ては、最以て慎戒を加ふるを以て、世の輕佻者流の偏愛激賞を享けざりしも、事に實際に従ふの人士は、皆其確實信切を貴重せざるものなく、發兌爲めに増進し、社業日を送ふて昌盛の運に向へり。

然りと雖も、當時我儕實業者の間には猶此新報に不足を感ずるの想あり、是れ其記事の周密にして、社説の正確なるにも拘らず、執る處の主義は唯物價を詳記するに止るを以て、敢て商業の活機を説き、經濟の妙理を談する能はざる所あるを以てなり、然るに今茲に其組織と題號とを更め併て其居を新築し、其紙面を改良し、準備既に成るを以て今日をトして改題第一紙を發行するに至る、

我儕實業者に在ては、殊に之を喜び、之を祝し贈るに一言を以てせざるを得ざるなり。

然り而して、余は之を祝するに當りて、琳瑯の言葉を綴り瓊玉の文字を並べ、苟も實價ある紙片に向て虚榮の贊辭を塗するを好まざるが故に、寧ろ破格に失するも慎て虚文を斥け、貴社の爲に我儕實業者が將來に希望する處を申告せんと欲す、貴社幸に其直情徑行なるを恕せよ。

貴社の今日ある所以は既に前章に述べたる如くにして、我儕は貴社を信認し、其新報を貴重するといへども、我儕の事業は年に進歩して止まらざるなり、之を貴社が創立の日に比すれば、其知識經驗、實力共に決して同等の地位にあらざるべし、語を換て之れを云へば、即ち明治二十二年の實業者は、復た明治九年の實業者にあらず、商業なり、工業なり、蠶桑の業なり、皆多少進歩改良して其面目を一變せしを以て、願くば貴社も亦従前の地位に安んぜず、共に揚鞭聯馳して世人をして貴社の報する處は必ず實際の現象に基かざるはなく、貴社の説く處は必ず實業者の領領する處にあらざるはなく、故に貴社の言論は實業者の精神を代表する者にして、貴社の報道は實業者の舉措を規度するの具なることを信認せしめ、彼の英のエコノミスト、米のブラッドストリート等の如く、片言隻語も九鼎大呂より重きに居るの地位に達せざるべからず、是れ余が貴社に望む處の一なり。物價は商業より生じ、商業は物價を左右するが故に、物價新報といひ、商業新報といふ其義一な

りとせば則己みなん、然れども果して其義一なりとせば、殊更に物價の字を改めて商業とするを要せず、夫れ物價といへば相場なり、商業といへば賣買取引の事なり、其區域固より差別あることは事理を解するもの、皆知る處なり、故に余は今日貴社が記載すべき事物は、舊中外物價新報の記載したる處のものより、其區域較々廣く、且其實際に接して叙述申論する處も、一層深入すべきを信ず、果して然らば、貴社は自今殊に筆法を正して公明正大を主とし確實信切にして、其耳目は務て平虛ならしめ、能く事實に通覈して其信偽を辨し、正邪を察し、善惡を判し、苟も權勢に媚びず、貨利に諂はず、挺然直立して萬一にも世人をして、彼の雜報は是れ陰に疵保する處のものあり、此論説は是れ殊に他の歡心を邀ふるものなり、或は此に銅臭あり、或は彼に諂色あり等の刺評あらしむるなきを要す、是れ余が貴社に望む所の二なり。

我商工業の爲めに、海外商工業の事情を報道するは今日是在て既に緊要の事に屬し、將來益其必要を感ずるものなり、而して貴社は其新報に題するに中外の字を以てすれば、常に其責任を負擔するものといふべし、故に毎紙必ず海外商工業の事情を記載して、其報道を怠るべからず、然るに海外商工業の事情といふも、其區域甚だ濶く能く之を網羅せんには、毎日數丁の紙に印するも、恐くは之を盡すに足ざるべし、然れども余が茲に海外商工業の事情といふは、我が商工業に重なる關係ある

事物にして、例へば生糸織物綿花綿糸銅鐵陶漆器若しくは石炭麻茶等の類に就て、能く歐米市場の情態を詳にして、間斷なく之を記載し、讀者をして前月は某國某貨の市況を詳記せしが、今月は之を欠き、某貨の昂低は前に密にして後に疎なり、某事は僅に其初を掲載して後には其報道なしと云はるゝ如きことをなさず、一度其端を開きたる重要な事物は、實際の消長に隨て、常に新報上に跡を存し、讀者をして之に信依せしむべきを要するなり、語を換へて之を云へば、則此新報には邂逅世人を驚かすの事項を載するよりは、寧ろ常に商工業者の參考に便すべき記事を勉むるにあり、是れ余が貴社に望む處の三なり。

嗚呼我儕實業者は貴社に望むに此三要を以てせり、之を快諾し、之を擯斥するは貴社の採擇にありといへども、貴社もし此三望に副はず、我儕と異軌分行するに於ては獨り貴社の名譽に關するのみならず、我儕の不便不幸も亦甚だ少なからず、而して我儕の不便不幸なるは是れ豈天下商工業者の不便不幸ならずや、貴社の責任重且大なりといふべし、貴社其れ勉めよや。

## 四六、私の良き補行役

### 一、佐々木勇之助氏の人となり

第一銀行の頭取佐々木勇之助氏は、第一国立銀行創立以來の知己であるから、五十餘年の親しい交りを経て居る譯である。最近見えられた時、「老驅劇職に堪へぬから……」と申して勇退の意を洩らされてをつたが、「私は七十七まで勤めたのであるから、貴方も私と同様にせめて喜壽まで勤められたらどうか？」とお勧めした様な次第であつた。斯ういふ親しい仲であるから佐々木氏に就いては相當詳しく知つて居る積りである。

佐々木さんは幕府の旗本の家柄だつた佐々木直右衛門といふ人の子息で、元第二十銀行の頭取だつた故佐々木慎思郎氏の弟である。厳格な武家の家庭に人となつただけに、少年の頃から頗る謹厳な性格を備へて居られたさうであるが、幼時は漢學を修め劍道を學び、將來武士として立つ教養を受けたけれども、十四五の頃幕府は遂に倒れて王政維新となり、時勢の變遷は氏を武士として立たしむる事が出来なくなつたので、方向を轉換して舊幕時代に幕府の御用方といつて、金銭出納の事

を取扱つて居つた三井組に入つて、計算の事務に當つたのだと聞き及んでゐる。其頃は既に幕府が倒れて明治政府が樹立して居つたのであるが、三井組、小野組、島田組などは引續き新政府の爲替方を勤めて居つた。

明治三年の暮に、大藏少輔伊藤博文一行が渡米して財政制度の取調べをなしたが其の建議に基き米國々立銀行法に準據して国立銀行條例を制定する事となり、私が其の主任となつて専ら銀行條例の制定並びに銀行創立の事務を擔任し、国立銀行條例は明治五年十一月に愈々公布された。之れより先き、私は銀行條例を起草しつゝ、一方に於いて新政府の爲替方たる三井組、小野組其他の富豪に国立銀行の設立を慫慂し、三井組、小野組は率先して發起人たる事を承諾したので、明治五年六月に第一国立銀行の創立を大藏省に出願し、銀行條例公布以前であるにも拘らず、同年八月十五日に創立の許可を得て株主を募集し、翌年八月一日から開業するに到つた。之れが我國に於ける銀行の嚆矢である。處で總資本金二百五十萬圓の中、三井、小野兩組とも一百万圓宛の出資であり、頭取も支配人も兩組から一人づつ出るといふ有様で、其他の幹部は勿論、行員の殆んど全部が三井、小野組から入つたのである。以上の事は第一銀行創立の項で詳しく述べた所であるが、この際に三井組の事務方の一人であつた佐々木勇之助氏も、第一国立銀行の下級行員の一人として勤務する事と

なつたのである。之れが抑々私との關係が結ばれる因縁であつた。

私は當時大藏省を井上侯と共に辭めて、野に下つてはゐたが、尙御用滞在の命があつたので、總監役として第一國立銀行を主宰してゐたのである。丁度其頃第一國立銀行内に稽古所を置き當時横濱の東洋銀行のクラークで、後にロンドンのパースバンクの支配人になつた英國人シャンド氏を講師に聘して、銀行行政を始め銀行諸般の業務を行員に傳習せしめる事となつたが、其の行員の人選に就いては、相當嚴選を加へたものであつた。此の人選に際し

『元三井組の事務方に居つた佐々木勇之助といふ青年は、歳の若いに似ず却々頭腦も確かりして居り、算數の事も達者で物の役に立つ人間である。』

といふ進言があつたので、私は早速引見して見ると、十九や二十の弱年に似合はず其の態度も立派であり、二三の質問に對してもキビ／＼として少しも臆せず答辯したので、之れは將來見込のある有望な青年であると思つた。それで熊谷辰太郎、本山七郎兵衛、長谷川一彦、野間某などと共に拔擢されて傳習生となつたのであるが、果して私の見込んだ通り、銀行條例などに就いても最も早く理解し、洋式の簿記法を始め諸般の事務にも衆に優れて練達し、規則上からも實務上からも、其の進歩が眼立つて速かであつた。私は益々頼もしい青年と思つて特に注意する様になつたのである。

## 二、先輩に抽んで出て課長となる

右の様な譯で佐々木勇之助氏は第一國立銀行以來、簿記方の一人として行務に精勵する傍ら、シャンド氏の直弟子として其の教授を受けて居つたのであるが、明治七年十一月に三井組と共に大株主だつた小野組が破産し、銀行は同組に對して巨額の貸付金があつた爲め、一時大打撃を蒙るに到つた。此際に當り私は其の善後策に就いて最善の努力を盡し、田所町にあつた小野組爲替方に對する貸付金は百萬圓の出資金を以て處分する事とし、瀬戸物町にあつた貿易方に對する貸付金に對しては、貿易方の總支配人だつた先代の古河市兵衛氏と折衝を重ねて決濟をなし、銀行は資本金の中間百萬圓を減資して建直しを行つたが、此の決濟に當り年少の佐々木氏は表立つての働きはなかつたけれども、内部に在つて非常の努力をなし、萬事に遺漏なく決濟事務の進捗を計つたものである。

第一國立銀行は此の蹉跌に鑑みて其後は貸付の方法を改め、且つ大藏省に陳情して預金規則に改正を加へ、同時に行員の淘汰を斷行して舊來の弊風を一新し、營業の面目を更新して銳意創痍の恢復に努めたが、明治八年八月には私は名實共に頭取たるに至つたので、更に内部の刷新を行ひ人材登用主義を標榜して有用の人物を拔擢して重用した。此際佐々木氏は歳は若かつたが最も適任であ

つたので、當時外輩はあつたけれども人物本位から簿記方の課長に登用したのであるが、果して私の期待に背かなかつたし、部下の行員も一人として不平を稱へる者がなかつたのである。

### 三、佐々木氏の隠れたる功績

元來私は日本の實業界を振興せしむるには、大動脈の働きをなすべき中樞機關の整備が急務であること信じ、此の大動脈の働きをなすもの即ち金融機關たる銀行に第一手を染めたのも實に之れが爲めであつた。従つて銀行の經營上についても凡て開發的の考へが多く、銀行の利益といふ事を無視する譯ではないけれども、日本の全體の經濟といふ事を先きに考へるといふ風であつた。第一國立銀行が明治十一年頃から奥羽に支店、出張所を設置したのも、最も文明の遅れてゐる同地方に文明の惠澤を及ぼさなければならぬといふ意見からで、明治十一年以來朝鮮に支店を設置したのも、日鮮通商上の發達を助長しようといふ目的に外ならなかつたことは前に述べたと思ふ。佐々木氏は何事に對して



佐々木勇之助氏

も決して出遮張るといふ事をせぬ人であるが、さりとして凡てに盲従する人ではなかつた。私の積極主義であるに對し、何方かと云へば佐々木氏は守成的であり、寧ろ消極的な意見を懷いて居つて、自分の意見と合致しない時は進んで賛意を表する様な事をしなかつた。賛成しなければ必ず別に意見があるので其の意見を徵すると秩序立て、理路整然と意見を開陳するのが常だつた。奥羽地方に手を伸ばすに就いても、佐々木氏は「商業銀行として立つて行くに就いて利益を無視する事は出来ぬ。而して利益の點からすれば奥羽地方に手を擴げる事は不得策であるから見合した方が宜からう思ふ」といふ反對の意見を懷いて居つた。併し奥羽開發といふのが私の主張だつたので、當時は其の意見は行はれなかつたが、明治二十九年更新の第一銀行創立に際し、仙臺に七十七銀行、秋田に秋田銀行、盛岡に盛岡銀行といふ風に、續々地方銀行が設立せらるゝに到つたのを機會に、往年の佐々木氏の意見を採用して奥羽地方の支店を漸次閉鎖した。斯くの如く佐々木氏の意見は非常に綿密であり切實であつたので、私は大小に拘らず相談したものである。

朝鮮銀行が生まれるまでは、第一銀行は事實に於いて朝鮮の中央銀行の實質を備へ、朝鮮に於ける金融界の實權を握つて居つた。第一銀行は朝鮮に於いて銀行紙幣を發行し、それが一般に通用して居つたもので朝鮮の幣制を整理したのは、全く第一銀行の多年の努力によつたものと云つてもよ

い。而して佐々木氏は背後にあつて、多大の努力をされたのであつて、表面的には現はれぬけれども、其の成果の一斑は氏の功績に歸すべきであらう。

#### 四、誠意努力の圓滿な人物

國立銀行條例が廢止となり、更新の株式會社第一銀行と改稱するに到つたのは明治二十九年であるが、此年佐々木氏は取締役兼總支配人に擧げられ、大正五年私が實業界を隱退するに當つて頭取の椅子を襲はれ今日に到つたのであるが、表面は兎も角實際に於いては取締役兼總支配人に擧げられた際に、第一銀行の實務は佐々木氏に托せられた様なものであつたし、御承知の通り私は殆んど凡ゆる方面に關係して居つたので、第一銀行にのみ専心する事は出来ない。それで大體の締め括りはして居つたけれども、大抵のことは安心して佐々木氏に一任して居つたのである。従つて爾後の第一銀行を盛り立て、今日あらしめたのは、佐々木氏の努力が與つて多いのである。

要するに佐々木氏は、私があつた爲めに得をした點もあるだらうが、又私があつたが爲めに損をした點のあるのも争はれない事實である。私は實業界を隱退した後は凡ての會社と一切の關係を絶つたが、第一銀行だけは特殊の關係があるので今日でも相談役となつて居る。然るに佐々木氏は

隱退後も屢々私を訪づれて何かと相談されて居る。本當に誠意のある人でなければ出来ない事だと思ふ。兎も角佐々木氏は行務に就いては全く卓越した頭腦を持つて居り、人格と云ひ事務上の技倆と云ひ精神と云ひ、兼ね備はつてゐる人物で、日本は勿論世界の經濟界の動きに通曉してゐる。唯私の積極的な開發的な考へに對し、佐々木氏は露骨に言へば石橋を叩いて渡るといつた風があり、此點では必ずしも一から十まで意見の一致を見るといふ事はなかつたが、お互ひに銀行の爲めに忠實にやらなければならぬといふ點が一致して居つたので、圓滿に業務の發展を議し、且つ後顧の憂ひなく他の方面にも努力する事が出来たのである。

——佐々木勇之助君は、創立當時から英人シャンド君に簿記を教はつて、實務に當つた同行（第一銀行）生拔の元老で、明治二十九年頃から既に取締役兼支配人として實權を握つたのである。何しろ初代青淵老人は財界のお太陽様だから、第一銀行ばかり照らして居る譯にも行かないので、第一銀行を盛立てたのは寧ろ佐々木君の力とも云ひ得る譯だ。此の佐々木君は安政元年生れと云ふ時代物だが、流石に五十三年も銀行生活をやつてると云ふだけに、年はとつても數理に明かるい點では、今時の蒼白い銀行員共の及ぶ所にあらず、關西にその人ありと知られた三十四銀行の

故小山健三君も、佐々木老には一步を譲つてたと云ふことだ。

老人に似ず仕事もテキパキやつてのけるし、イエスとノーも極めて簡明直截、兎に角老舗の第一銀行の頭取であり、五十三年も賣出した顔で、最近までは銀行集會所の會長を勤めた銀行界第一の長老であるが、此の老人若い時には可成り酒も飲んだが、今は漢書と書畫に凝つてゐる。園碁も可成り自慢だつたが、伴の謙一郎君や、修次郎君の方がメキ／＼腕を上げて來たので、伴共に負けるのも業腹だと云ふわけか、そつちの方はあまりやらぬとの話。(財づる物語)

## 四七、八十餘種の關係事業と絶縁

### 一、新舊人の改進

明治三十七年の大患恢復後、私は當時八十餘種の關係事業中約過半数の諸事業との縁を切つたのであるが、それでも相當多数の事業に關係を有して居たので、丁度古稀の齡に達したるを機會として、第一銀行の頭取其他數會社以外の關係諸會社の重役全部を辭任したのである。

元來世の中に立つて事業をするについては、成るべく專業が宜いといふことは、解り切つた話である。世の進運に伴うて專業が盛んになつて來る、極く卑近なる例を擧ぐれば、此處に一村落が出來る、人の集る所、必ず其處に物を製作する人もあらう、又其の製作物を買うて消費する人もあらう。此の間に立つて物を供給する人は、必ず其の場所の繁昌に従つて變化すると云ふことは免れぬ順序である。甚だしきは呉服も賣る、茶漬も賣る、味噌も賣れば、草鞋も賣る、俗に云ふ萬屋といふものは、之れは何の理由から生じて來たか。一業一品では決して其の生計を支へることが出來ない、經濟が立たぬからして、自然の勢ひでさういふ事になるものと見える。併し其の土地が段々繁

昌して、種々需要供給の状態が進んで来ると、其間に呉服屋は呉服ばかりになり、種物屋は種物ばかりになる。現に東京の有様は今日の繁華に到らぬ昔日でも、稍々分業法が成立つて来た。僅かな一都府に付いてもそれ位の譯であるから、世の中のことには總て推して知るべしと申しても宜からうと思ふ。歐米の趨勢を見ても、人文の進歩、學理の向上に従つて、益々分業が盛んに行はれるやうに思ふから、人としては成るべく一に専らなるが宜いといふことは論を俟たぬ。然らばそれ程道理のあることを、なせ私がそれまで各會社に關係したかといふことに付いては自ら非難もあらうけれども、私自らは已むを得ざる事情があつたと辯解したのである。

忘れもせぬ、明治六年に銀行屋になつて銀行業の經營も遣つて見たが、殆ど其の總てが意の如く行かないで、失敗に終らうとしたことがなく、數多かつたのである。其の初めは勿論自ら經驗があるものでなし、銀行と云ふ學問をしたこともない。日本に銀行といふ事業がなかつたから、見知つたことは一もなかつたけれども、役人をして居る際に靜かに考へて見ると、どうも此の明治の新政府は政治觀念ばかりが強つて經濟觀念が甚だ乏しい。殆んど一技一能ある人が都會へ出て來ると總て如何なる希望を持つかといふと皆役人になるといふ考へで、甚だしきは教育機關を造つて、其の教育に依つて、而も役人では一生を満足に送り得られぬ如き技藝を學んで居る人さへも、猶ほ商

賣人となる事を恥づると云ふ念があつたので、さういふ時代に銀行屋になるといふのであるから、自分の意思では是非此の實業方面から社會の傾向を引止める様な途がありはしないか、といふことが自分の祈念であつた。同時に商賣人の位置が甚だ低い、又學問觀念が甚だ乏しい、従つて道德とか、徳義とかいふ様な氣風が甚だ少ない。丁度明治七年に第一銀行が創立されたのであるが、其の前に政府の勸誘に依つて爲替會社、開墾會社、回漕會社といふやうなものが出來た。所謂官の干渉に依つて成立したもので、三井とか、小野とか、或ひは島田とか、大阪でもそれ／＼舊來の豪家から選まれて其の仲間に入つて組立てたが、實地を取扱ふ人は其の中の番頭さんで、御役人は唯政治の權力を持つてそれに干渉するに止まると云ふ姿であつた。それは明治初年のことで、私は其邊のことは能く知らないけれども、明治二年の冬に大藏省の役人になつて様子を見ると、右の會社は一年餘りで見事に失敗してしまつた、政府が力を入れて組立つたものが皆失敗してしまつたのである。私が出た時分には僅に爲替會社が一つ残つて、是れも餘程損をしたけれども僅かに維持して居つた。而して一般の商賣人はどうかといふと、兎角役人は政治上に付いては特殊の智恵がありましたが、商賣關係に付いては理窟を以て商賣のことを云ふ、逆もそれで引合の付くものでないといふやうな思入で、古風の商家は改進的の商賣人をば、平たく申せば山師と云ふやうな觀念を以て迎



へて、もう御役所へ出入をする。洋服を著、時計を持つ商賣人ならば油斷すな、權利とか義務とかいふことを口にするやうな商賣人は、まるで流儀違ひの商賣人であるといふやうに、伊勢町傳馬町の商人からは押並べて見られたのである。それであるから明治六年に銀行は立てたけれども、古風な商賣人は今に潰れるのだといふやうな觀念を以て待遇されたから、どうしても新舊の調和が程能く運ばなかつた。

そこで私は、是は困つたものだ、新舊思想の戦だ。新舊の戦ひというて相對して攻撃をするといふ譯ではないけれども、自分達の事業を誠實に驅勉にやつて打勝たなければ、到底之れは新舊人を改進せしむることは出来ない、だから身を以て當るの外はない。幸ひに新思想の事業が成立つて行つたならば、遂ひには成程と初めて守舊家が此方へ見做つて来るやうになるであらう、争つて見た所が益も無い、謂はゞ論より證據で、事實に待つ外ないのである。元來自分の持論は、其頃から日本の商賣人は力が強い、個々別々にやつて居てはどうしてもいけない。又此の公共の事業を進めて行かうといふ方の考へからすれば、己れ一身の富のみ増すといふことは、自分等は餘り好まない。況や其時の政策としても相當な智慧のある人を其處に使はうとしても、細い資本では少い報酬しか出せぬといふことは當然のことであるから、どうしても合本法に依つて相當の報酬を出して、良い

人、智慧のある人を得なければ、學問の利益を受けるといふことも出来ない。故に事業の發達は合本法を以て進めて行く外無いといふのが、私の唯一の目的であつた。若し之れを私の政策と云ひ得べくんば、それを普及することに努めなければならぬのである。そこで此の改進主義を以て守舊主義に打勝つといふには、どうしても銀行ばかりではいけなくなつて來た。各種の事業に對しても勢ひ手を著けなければならぬ必要が生じて來たのである。

## 二、何故に多數の會社に關係したか

其頃から王子の製紙會社に、確か銀行に従事した翌年に關係し始めた。是れは外國人から聽いたか自分で考へたのか、紙といふものは文明と離れないものである。眞正の文明を進めようとするには、日本の紙を改良しなければいけない、紙の事業といふものが文明を進める一大要素である。新聞紙にしても、書籍にしても、總べて學問といふ事に付いては紙が必要である。續いては印刷法といふものが簡便に且つ緻密に出來なければならぬから、印刷事業に力を入れるが宜からうといふことであつた。けれどもそれらの事は人文の進歩といふ方で、物質的の事業の進歩といふ考へでなかつたのであるから、深く力も入れなかつたが、海陸運送——即ち鐵道船舶といふものに付いては、特

に力を入れざるを得ぬやうに考へた。尤も海運に付いては明治七八年頃から岩崎氏が大いに力を入れて居つた。其の前に私が官に居るときに郵便蒸汽船會社といふものが出来て居つたが、之れも政府關係の事業であつて、擔當者其人を得なかつた爲めに旨く行かなかつた。岩崎氏の汽船會社に對して兩立が出来ない、遂ひに此の會社も三菱に合併してしまつた。そこで十三年頃には、唯三菱ばかりに海運事業を獨占させるのは甚だ宜しくないといふので、種々なる方面から反對説が出て來て遂ひに共同運輸會社といふものが成立した。是等も私は銀行業者として力を添へざるを得ぬ爲に賛成の位置に立つたのである。それに付いて當時三菱攻撃は殆んど濫澤が發頭人であるときまで看做された。けれどもそれらの事は後に段々解つて、明治十八年には其の共同運輸會社と三菱とが合併した。其の合併した後ち更に數年を経て、私も遂ひに日本郵船會社の取締役にならねばならぬやうになつて、其の時まで其の地位に居た次第である。又工業に關係したのは先づ紡績業で、是れは明治十年からの事である。いつも戦争があると事業が膨脹する。日露戦争は最も激しかつたのであるが彼の西南の役後十一年、十二年の頃も、輸入の超過といふものはなかく激しかつた。今日から云へば其の數字は少ないが、其時の有様から見ると異常に荷爲替が殖えて來た。其の時分には總ての輸入品が神戸に入らずに横濱に入つて來たので、私の銀行でも俄に商賣が殖えて來たというて訝る

位であつた。普通の商賣は甚だ乏しいと思つて居たけれども、戦争の爲めに大いに變化を惹起して同時に是れは大變だと思つた。向後木棉物に付いては、残らず日本人は外國の品物より取扱ふことは出来ぬやうになつてしまふに相違ない、ごうかして之れを内地で作ることが出来ないものであらうかと云ふのが、紡績事業に力を入れなければならぬ動機であつたのである。其の他絹織物又は製麻の事業も多くは右に述べる理由によりて創立するに到つた。瓦斯事業は其の以前から東京府の共有金の關係で私が擔任して居つたから、是れも相當の時機に自分の主義の合本法に依つて東京府の關係を離れ、民間で經營するが宜からうと思つて居たが、遂ひに十八年に民業とすることになつた。さういふ譯で、ごうしても社會の物質的の事業を勢ひ自ら拵へて、さうして此の銀行事業と良いコネクションを造るより外無いと考へた。又それが實際急務であつたのである。之れが彼れ是れと遂ひに多數の仕事の關係を殖したわけである。恰も前に申す通り草鞋も賣らなければならず、味噌も賣らなければならず、反物も賣らなければならなかつたのである。

併し何時までもさう云ふ時代で居るものではなからう。既に其の時代の要求は満足した。まだ多少不満足があるかは知らないけれども、追々に改むべきは改めなければならぬと自分も思つて居た。私に對しても當時、餘り各種の事業に關係が多いといふ非難もあつたから、それで俄かに心を動か

したといふ譯でもない。年を取つたから多少用を節したいと云ふのは、勿論重なる原因であるが、併し全然老衰したから社會を御免蒙るといふ趣意でもなかつたのである。而して元來どのやうな人でも、左様に無限に多數の仕事に能力の届くものでないことは明かである。其の初の期念は斯う云ふ様な事情であつて、自身と雖も左迄間違つた了簡ではない、當時に於いては實に已むを得ぬことであつたと思ふけれども、何時までも之れを繼續するといふことは適當でなからうと思つた。さらばと申して、私が明治六年に商人にならうといふ念慮を起したのは少しも誤つては居ないと考へるから、棺を蓋ふまで其の主義をば立て通し度いと決心したのである。其間に時々自らは動いた積りはないけれども、他より動かされたことは幾度もある。併しながら幸ひに今日まで繼續し來たから矢張り此の實業界に身を置いて、微力ながらも力を盡して行き度い積りであるが、併し何時までも昔日の有様を繼續すべきものではなからう。況や其の時代から比較して見ると、申さば皆脊丈が伸びて、最早十分に獨り歩きが出来るやうになつたのであるから、或る場合には私の居つた方が多少爲めにならうかとも思ふけれども、最早隱退すべき時機だと思つたから決行した譯である。

併し第一銀行は其の初め私の商人となつた場所であるから、經濟界を全く退くと云ふ場合でない限りは、それも餘り老衰して職務を全うすることが出来ないから、繼續して居るのも宜くないと思

つたけれども、未だそれ程に老衰したとは思はなかつたのであつたが、關係者に嫌はれぬ以上は第一銀行の事業に就いてはもう少し微力を盡したいと思つたのである。併し其他の諸會社は、随分止めるに就いて困難な事情のある所もあつたが、丁度七十と云ふ時でもあり、無理に重役の任務を解除して貰つたのである。從來私は關係諸會社の多くは首腦の地位に在つたから、假令其の會社の重役の位置を離れても、自身經濟界を退かぬ限り、其の關係は從來と變はらぬと思つたのである。況や私は相當の株主でもあるし、其株を早速賣つてしまふなどいふ意味では決してなかつた。さすれば情態に於て少しも變る所はない。唯表面の職務を辭したに過ぎなかつたのである。其故、行掛り上多少の相談をしなければならぬことがあつたら、私は喜んで相談に應ずる積りであつたのである。

### 三、一切責任ある地位を去る

私は丁度喜壽を迎へた年の七月、第一銀行頭取の任期が満了せるを機會として、同銀行の頭取の職を辭し、實業界に於ける一切の責任ある地位を去つたのである。

實業は私の宿願であつたが、其の實業界から全く去らんとするに當つて自分の過去を回顧して見

ると、私も随分色々な變轉をして來て居る。私は國家を憂ふるの至誠に於いては、一步も他人に劣つて居なかつた積りであつたが、不幸にして唯之れを達成するに必要な知識に乏しきを常に慨嘆して居つた。併し幼少の頃から階級制度の打破を痛切に感じ、階級制度の打破を唱へて居た私は、遂に一橋家に仕官する運命に達するに到つた。而して攘夷を叫んで居た私が遂に海外に遊學して西洋の物質文明の大きいに我國に勝る事を嘆賞せない譯に行かない様になつた。斯様にして凡ての方面に於ける豫想外の事物は、即ち私をして全然政治界を斷念せしむるに到つたのである。而して歸朝後一時駿河に仕へ、間もなく政府に仕へた私は全く政治方面に活動せんと欲する念がなかつたので、専ら殖産興業に就き研究したのである。私の海外遊學は極めて短日月であつたけれども、其間に得る處が少なくなかつた。之れを國內に應用せんと欲するも、國事草創にして容易に實行に移る事が出来なかつたのである。就中私が最も達成せんと欲したのは合本組織を國內に普及すると共に官尊民卑の弊を根本的に除去せんと欲するにあつたのである。而して銀行條例の制定されたのは明治五年十一月であつて、該條例は伊藤博文公が渡米して取調べたる上、私に調査を命ぜられたるもので、當時在朝有力者中伊藤、大隈等の諸氏は早くも我國に合本制度を輸入せんとして、會社を設立したのであるが、何れも失敗したのである。

惟ふに事業界を改革せんと欲すれば、先づ銀行制度の改善を必要とし、之れに伴うて貨幣制度を確立する事が必要である。即ち私は在官中是等の制度に最も力を注いだ。此時に當り井上侯の大藏大輔を辭任するや、私も亦共に官職を辭して多年の宿望であつた合本事業の奨励に全力を傾注せんとして、第一銀行の創立を見るに到つた。其後日露戦争後の事業界勃興の機運に際して、一部の論者は尙個人經營の事業を奨励せんと欲して居たが、私は合本制度を最も適當であると信じて居たので、當時私の關係して居た事業は一時四十四にも上り、世間には私が徒らに虚名に走しり、私腹を肥やさんとして居ると非難するものがないでもなかつたが、私は元來の宿願である合本事業の發達を促し得たのを喜んで居た。併しながら銀行業者が多數の事業に關係するのは好ましくないのみならず、私は前に述べたやうに老齡に達せるを以て關係事業の大部分と縁を絶つに到つた。此時に當つて第一銀行をも去らんとしたが、關係者諸氏の勸説辭し難く遂ひに留任する事にしたのである。

第一銀行は明治六年三井、小野等に依つて計畫せられ、私は其の相談役として其の創立を助け、其の翌々年即ち明治八年に到り、私は頭取の職に就いたのである。爾來四十有三年間終始一貫して同銀行に勤め、而も其間常に健康を保つを得たことは何よりも欣幸とするところであつた。而して株式會社に於いて斯くの如く長く勤務することは實に異例とすべきのみならず、私は既に七十七の高

齡に達して居たのである。而して銀行内に於いても十分頭取たるべき地位聲望を有する後継者が在つたので、私の任務は之れに譲らんと欲して、大正五年の春辭職を念ひ立つたのであるが、當時同僚諸氏の勸説黙し難く遂に任期満了の七月まで待つ事にしたのである。第一銀行の經營に付いては當時未だ十分に其の目的を達して居たとは云ふ事が出来ないが、創立以來幾多の變遷を経て、當時に到るまで業務の擴張、會社の基礎の健實なる點に於いては、大いに見るに足るものがあつた。而して後任者は十分の經驗を積むに到つたので、後顧の患もなかつた。其上法人會社に於いては一人が永く其職に止まる事は出来ないから、斷然月級取及び一身に關する事業から全く手を引くことに決定したのである。併しながら未だ老齡事をなすに耐へない程衰頹して居たとは信じなかつたので、餘年を公共事業に捧げ、即ち外交又は社會政策の如き其の根源は財政經濟にあるを以て、之れに付いては相談に預り、又進んで關係し盡力する爲めには、倒れて後埃まん決心をしたのである。

## 四八、華府會議に國民使節

### 一、訪米第四回の動機

私の米國に旅行したのは前後四回であつて、第一回の渡米は明治三十五年（西曆一九〇二年）で一ヶ月餘りアメリカ各地を歴遊し、言語の十分通せぬ私には不便も尠くなかつたけれども、實業家政治家、教育家等と交り結び、多數の新らしい知己が出来た。第二回は明治四十二年（西曆一九〇九年）で、渡米實業團の團長として訪米し、九月一日シヤトルに上陸して十一月三十日サンフランシスコ發歸朝の途に就くまで、此間丁度三ヶ月を要した。第三回は大正四年（西曆一九一五年）バナマ運河開通記念萬國博覽會が桑港に開かれるに當つて、開催地の加州とは特に縁故も深いし、又同博覽會に就いては我國でも賛同した關係もあるから、視察旁々懇意な五六の人と共に渡米し、十一月八日桑港に上陸後、各地の視察を了へて十二月十七日頃桑港發歸國の途に就いたので、此間滯米約四十日ばかりであつた。第四回目の渡米は大正十年十一月横濱を解纜したが、渡米の動機や目的に就いて簡単に述べると、元來私共が中心となつて組織して居る日米關係委員會と云ふのが

あつて、此の日米關係委員會には金子堅太郎子、目賀田種太郎男、井上日銀總裁（當時）阪谷芳郎男、藤山雷太氏等始め、日本郵船、大阪商船の重役其他アメリカに關係ある有力者が多數加入して居つて、お互ひに日米親善の爲めに盡力し心配して居つた。處がワシントン會議が開催されるに就いては、是非是等の人々の中から日本委員會の代表を一人渡米せしむる必要があると思つて居た。之れは私ばかりの考へでなく、他の會員も一般に同様の意嚮であつたのである。

日米關係委員會の意嚮はかういふ風であつたが、私個人としても夙に渡米の希望を懐いて居つたのである。米國の加州なりハワイなりの移民の處置に就いて從來徹底的の方針が確立して居らぬ、即ち精細なる調査と其の真相に立ち入つた適切な案が成り立つてゐないやうに思はれてゐた。さうして加州にしてもハワイにしても之れに對する日本の政策は是迄は謂はゞ出來合の方策であつて、『紳士協約』を守るといつても夫れは頗る不徹底極まるものであつた。之れでは在留邦人の立場が益す困る許りである、何とか徹底的に解決方法を講ずる必要があるとは私の常々心配し又調査を進めつゝあつた處である。我國の移民に對する方策が徹底を缺く處から、或者は「ナアにアメリカなどに遠慮せずに大にやれ」と外交の軟弱を攻撃する、又或者は「アメリカの言ふ事ならば何事も御無理御尤もで無理をも徹させてゐる」と憤慨して居る。併し私の考へとしては今後我國より移民を送

らぬ事は、所謂紳士協約に基いて實行し來つたのであるから、既に解決せられた問題であるが、現在彼の地に在住して居る邦人が安心して居住し得るやうな方法を講ずる事が、最も必要であると思つて居つたのである。而して米人の口にする事と事實とは相違して居るからよく實情を調べ眞に適切な解決法を見出したいと常に思うて居つた。斯ういふ考へからして此の問題に就いては、屢々調査研究して來たけれども、十分の進歩を見る事は出來なかつたから、「之れはどうしても一度渡米して實地に視察し研究調査をする必要があるな」と思つて居つたのである。

加ふるに大正九年に加州及びニューヨークの人々が渡來されて、種々移民問題や其他の日米問題に就いて協議する處あつたが、其の結果意見の一致を認める事が出來ず、結局は勞して効なしといふ有様であつた。それで益々一度渡米しなければならぬ必要を感じて居つたので、其の時機については果して何時がよいかといふ事が未定であつたに過ぎない。それで大體に於いて大統領が代り、内閣員も決定し其の大體の政策が定つた後に渡米しようと思つて居つた處が、恰かもワシントンに於いて太平洋會議が開催される事となつたので、是れ渡米の好機會であるといふ考へを持つに到つたのである。

確か大正十年の七月十六日だと記憶する。工業俱樂部で日米關係委員會が開催されたが、其の席

上で華府會議の話が會員の間に持ち出され、ワシントン會議は軍備縮小及び極東問題が主なる議題となるやうであるが、殊に我國と最も密接な關係を有する支那問題も當然議題に上るであらう、而して此の會議の結果如何は日支、日米關係に至大の影響を及ぼすものであるから、此際多年日米關係に就いて種々心配をして來た關係上、日米關係委員會としても傍觀して居る譯には行くまい、是非誰か行かなければなるまいといふ大體の意思が、此の會で表示されたのであつた。

さて日米關係委員會から誰か代表者を派遣するとして、金子堅太郎子などは言語も自由であるし彼地に交友も多いから最も適任者の一人ではあるが、何分にも幾多の公務を帯び仲々多忙な方なので、數箇月間留守にするといふ事は出来さうもない。金子子爵が駄目だとすると、先づ私か阪谷男か添田博士か位のものである、勿論人物として此外に適當な人は多數居るけれども、何れも其の仕事の關係上永く留守にする事が出来ない事情があるからである。それで私は結局私が此際老體を提げて行かなければなるまいと内々決心して居つたが、之れは誰にも發表はしなかつた。只自ら斯く期してゐたのみである。

其後、日米關係委員會のあつた翌々日即ち七月十八日に、金子子爵と同行して當時の原首相に面會し華府會議について政府ではどういふ方針を探らるゝ考へであるか？今回のワシントン會議は世

界の會議であると同時に、日米の會議であると信する、されば我が日本としては最も慎重な態度を以て此の會議に臨まなければならぬと思ふが、殊に私共は多年日米關係に微力を盡して來たのであるから、政府當局の方針を聞いて私共の態度をも決し度いと思ふといふ意嚮を述べ、尙ほ日米關係委員會から代表者を派遣したい考へである事をも話した。原首相は大いに其意を諒とし、是非援助をされたいとの挨拶であつたが、未だ政府の方針も確立し發表する迄に到らぬから、後日更めて會見しようといふ事で會見を終つた。

## 二、渡歐實業視察團と予の渡米

話は全然別になるが、此頃有志の實業視察團を組織して渡歐したら宜からうといふ相談が一部の間に持ち上つた。之れは主として戦後の歐洲產業界を視察しようといふのが目的であつて、之れに就いては駐日英國大使からも是非實行されるやうに希望するといふ申出があつたので、此話は具體的に進歩を見るに到つた。そこで原首相は此の歐洲商工視察實業團の組織に就いて相談の爲め、二十人ばかりの實業家を招いて協議をしたが、其際當時の井上日銀總裁は、是非三井合名の團琢磨氏を一行に加へたいといふ希望を洩らし又私も至極賛成なので、一行の團長格として其の加入を奨め

る事とし、井上總裁と二人で頻りに勧誘したが、團氏は現に三井合名の總理事の重任にあるし、夫れに健康も氣遣はれると言ふので容易に承諾されなかつたが、再三の奨めと、私も渡米するといふ事を話したので、それではアメリカの視察團をも組織すること、いふ申合せて團氏は團體加入を承知されたのであつた。此間多少話の行違ひもあつたが、兎も角團氏其他の實業視察團の顔觸も決定し、又私の渡米の事も定つたのである。

斯くて同年九月九日丸の内の工業俱樂部に於ける會合に於いて、ワシントン會議を機會として私も渡米する事が發表され、又團氏も實業視察團に加はつて渡航されるといふ事が表面決定を見るに到つた。而して實業視察團一行は先づアメリカに赴きて、同國の産業状態を視察の上、主として歐洲各國の戦後の産業状態を視察する事となり、私自身は華府會議の視察を兼ねて加州及びハワイの移民問題の實地研究及び調査並びに善後策講究と、ニューヨークに於ける日米關係委員會と今後一層聯絡を深くすること其他の使命を帯びて渡米する事となつた。それで同時に日米關係委員會からも代表者を隨行させたいといふので、添田壽一、頭本元貞兩氏が同行する事となり、外に堀越善重郎氏及び私個人としての隨行を加へ一行八名の顔觸が揃うたのである。

それで全權一行の出發や會議の模様を聞いて見ると、全權一行は十月十五日横濱解纜、會議は十

一月中旬頃から開かれる豫定であるといふ事であつたから、成る可く會議前に渡米しようといふので、私等はハワイに寄港する必要ある爲め、サンフランシスコ航路をとつて十月十三日横濱出航の春洋丸にて渡米する事に決定したのであつた。

十月十三日横濱を出帆した春洋丸は二十三日ホノル、に寄港した。ホノル、には歸國の際立寄る豫定なので、それまでに種々の調査材料を得べく同地の日本領事や原田氏、奥村氏其他の人々と打合せをなし、且つ註文をして直ちに桑港に向つた。桑港には同月二十九日着、在米日本人會の會長、同書記長、矢田總領事及び同志の四五の人々と打合せをなし、行きがけは華府會議あるを以て滞留せず、歸りに再び立寄つて調査する事として、シカゴに赴き此地に一泊した。

シカゴでは丁度シャトルの航路から來た實業團が來合せて、偶然にも同じ旅館に宿泊したが、四日の朝此のシカゴの旅舎に於いて、大橋新太郎氏から首相原敬氏凶變の事を聞いて感慨無量であつた。シカゴに一宿の上直ちにニューヨークに向ひ、十一月五日同地に着したが、華府には既に我が全權が到着して居つたので、添田博士に同地に先發して貰ひ、軍備縮小問題に就いては成る可く早く進行せしむる様にした方が宜しからうと思ふと意見を開陳する事とし、私は同六日華府に赴いて七日、八日、九日の三日間滞在し、加藤、徳川、幣原の各全權と會見して、私の抱懐する意見を述



べて懇談する處あつた。此の會見に於いて總ての事が吾々の意見通りといふ譯ではないが、大體に於いて吾々の意見と相違ない事を認めたので、華府には添田博士に止つて貰ふ事とし、私は再度ニューヨークに赴いたのである。

ニューヨークには十一月の下旬まで滞在した。尤も私はニューヨークに於ける日米關係委員會の用務の外に、生糸事業の關係、宗教の關係、諸工業上の關係に就いて用務を持つて居つたので、同地滞在中もベツブルグ、ロツチエスター其他にも旅行をして、調査並びに視察をなし、且つ當業者とも打合せをしたが、同地に於ける有力者にして日本に多大の好意を有して居るヴァンダーリツプ氏は恰も歐洲に旅行中であつたので、日米關係委員會の事に就いてはジツキー氏が主として盡力され、ピツカーンシャム氏が中心となつて實務に當らるゝ事になつて、日米の兩委員會が互に聯絡をとる事になり、使命の一部を果たす事が出来た。此の日米關係委員會の成立と聯絡に就いては、背後に居つて盡力される實業界の有力者や政治界、宗教界の有力者杯と屢々會見し、吾々の意見も述べ又米國人側の意見も聽いたが、何れも非常に好感を以て迎へられた。

日米關係に就いては私は大分前から微力を盡して居るが、眞の親交を結ぶにはどうしても國民と國民とが隔意のない、馳引のない誠の心を以て互ひに握手するにあると私は常に考へて居るので

ある。此の意味に於いて、私は所謂國民外交の必要を痛感し、多年日米兩國民の意思の疏通を念としつゝあるものであるが、從來の日米問題の中には一部野心家の爲めに故意に煽動され、問題化するものもあつたけれども、多くは兩者の意思の疏通を缺く結果として、其處に誤解を生じ、誤解が基礎となつて溝渠が益々深くなり、其間に面白からぬ問題が惹起した例が大部分を占めてゐる。即ち日米問題は兩者の誤解に胚胎すること尠少ならざるを知ることが出来る。私は數度渡米して、親しく彼地の官民と接觸し、多數の交友をも有して居るのであるが、初め日本及び日本人を理解して居らぬ人達も、親しく會談して之れを説明すると釋然として一見舊知の如くなり、互ひに胸襟を開いて意見の交換をする。而して永く日本及び日本人に對して好意を有するやうになるが、此點に於いて、米國人は率直な處があると思ふ。今回の旅行に於いて、豫て出来かゝつて居つたニューヨークの日米關係委員會との聯絡が結ばれるやうになり、日米兩國民が諸種の機會に於いて隔意なき接觸をするやうになつた事は、兩國民のために甚だ喜ぶべきことである。ニューヨークに於ける用務は此の日米關係委員會の件を始め大體片づいたので、私は十二月三日フライデルフイヤーに赴いて用務を辨すると共に視察をなし、越えて五日再度華府の客舎に旅装を解くに到つた。

### 三、二重大問題の圓滿解決

再度の華府滞在は十二月の五日から十一日まで、あつた。此間に於いて例の海軍の軍備縮小案が附議され、同十日には其の決定を見た。會議は公開されたので私も十日には出掛けて決定の模様を傍聴したが、多少の修正はあつたが、結局原案が可決された。元來此の海軍々備縮小に就いては、米國の提出した原案はアメリカとイギリスが十、日本が六といふ割合であつたが、日本では十、十、七の率に修正する事を希望して居つた。五、五、三の原案が適當であるかどうか、之れに軍事上の専門的見地より批評を下すことは門外漢の私には分らぬが、私個人としては決定を見たる五、五、三の比率は決して妥當を缺いたものとは思はれない。我が全權が結局此の原案を承認するに到つた事は、至當のことであると思ふ。

ワシントン會議に就いて吾々日本人に懸念されたのは、此の會議に於いて山東問題が提出され、日本が不利の立場に陥りはしまいかといふ事を心配したのであつた。支那全權は講和會議の際も大いに暗中飛躍をなして、列國間にプロバカンダを試みたのであつたが、其際最も好意を示したのはアメリカであつた。此度の華府會議にも或ひは此事が繰返へされるのではなからうかと懸念された

のも、一面から言へば考へ過ぎたとも言へやうが、又從來の關係を知るものよりすれば無理からぬ事であらう。果して山東問題に就いて支那側の暗中飛躍があり、例に依つて種々のプロバカンダが行はれたが、アメリカの全權ルーゾン氏が山東問題は日支兩國間に限られた問題であつて、當然兩國の間に於いて解決すべき性質のものであるから、此の會議に付議する必要はないと言明したので、華府會議の議題となるに到らなかつた。斯くて軍備縮小問題も波瀾を見ずして解決を見、日、英、米、佛の四國協約も成立し、兎も角も最も注目せられたる二重大問題は圓滿解決を告ぐるに到つたのである。

此の軍備縮小比率に就いては至當であるといふ説と、失當であるといふ論とがあるやうであるが、現に或る一部の間には、アメリカは十であるに對し日本が七を主張したにも拘らず、飽くまでも之れを主張して彼をして容認せしめなかつた事を攻撃して居るが、論者の言ふ處を聞けば一應は尤もであるけれども、顧みて我國の狀態に鑑みる時は、強ひて十、十、七の希望を主張するのが果して、我國の現狀に於いて妥當であるか否かに就き大いに考慮する餘地があると思ふ。私個人としての見地によれば、單に軍事上よりすれば恐らく我が希望たる十、十、七の比率と雖も不満足たるを免れないと思ふ。どうしても十、十、十、即ち同比率でなければならぬ、蓋し之れとても十分満足し得

るとは言ひ得ない。少しく極端な様ではあるが、將來英米の握手に對立する事を豫想するならば、十、十、二十、即ち兩國の軍備を標準として我が軍備の標準を定めなければ、安心が出来ないといふやうな議論もされ得る譯である。

一體軍備の事は單に國防の見地のみから許りで決定すべきものでないと思ふ。即ち國內に於ける他の方面とも權衡をとらなければならぬものと信ずる。されば今回の軍備縮小協定に就いては、或る軍事専門家の中には大いに不満を感じて居るものもあらうし、又日本の武力的國威を發揚する念のみを以て本問題に對するに於いては、比率を減ずるのを不満足に思ふかも知れぬが、軍備は當然其國の富の程度から割出す可きものであるから、公平なる見地に立ちて我國の富の程度より論ずれば、五、五、三の比率でも寧ろ割合が強くないかと思はれる位である。斯く大局より觀測すれば此の軍縮の比率は決して我國の失敗ではない、實に妥當である。其の十、十、七の比率を希望せるに就いては、種々理由の存するものもあるのであるが茲には述べない。

華府會議に於て日本の外交としては、其從前の債務を辨済したに過ぎない。先きに蔭かれた悪い種子から、悪い收穫物を收むるの已むなきに至つたに過ぎない。同會議中日本の讓歩は右に止まら

なり、南滿洲其他二十一箇條要求に關する日本の讓歩的聲明に至つては前述の通りである。實に華府會議にあつては軍備制限問題固より討議事項として重要なものであつたに相違ないが、太平洋及び極東問題の度に於て敢て前者に譲らないものであつたことは、ハーディング大統領より當初列強に宛てた同會議招集狀の示す所であり、又會議の成果である各種の條約及び決議に見るも明白である。米國は同會議の劈頭、突差の間に先づ太平洋方面に關する四國條約を成立せしめて日英同盟を葬り去り、日本の極東に於ける羽翼を除いた。然る後ち支那に對する九國條約、山東に關する日支條約其他各種の條約及決議によつて、列國の對支行動、實は眼前の問題として日本の行動を羈束せんとした。而して其目的を達するに成功したものである。從來列國の支那に於ける利權競争政策、勢力範圍主義、帝國主義等を葬り去つて、更に門戶開放主義、機會均等主義を強調し、仔細に之を定義して、以て列國の對支政策を協調の基礎の上に置いたものである。此明約を以て列國の對支政策は茲に新时期に入つたものと言ふべきである。固より「協調」とは「デザンテレスマン」の謂ではない。門戶開放主義は利他主義ではない。爾今列國は自國の利益を忘れて他國の利益を計るに到るものと速斷するのは誤れること勿論である。實行の必ずしも容易でなく、併しながら實行しなければならぬ所の協調主義に、生命を與ふるものは關係國民の

頭腦一つであり、此主義を解釋し適用するに於て運用其宜しきを得せしむるは、政治家外交家の手腕如何に繋るものである。惟ふに所謂商工業上の機會均等は商工業上の競争を豫定するものであるがしかし商工業上の競争は必ずしも直ちに戦争を豫定するものでない。華府會議は海軍々備の制限にしる、極東問題、太平洋問題の處理にしる、世界の平和、極東の平和を目的とするものである。這般平和の維持及び將來の極東問題に付き、爲政家の最も注意を要するは、極東に於ける新たな均勢である。殊に華府會議に現はれた英米兩國間の關係である。抑々世界戦争は列國の海上權力史上に重大なる推移を示すに至つた。マハーン氏は海上を支配するものは世界に覇を稱するものであることを強調した。英國は既往二百有餘年、此海上支配權を把握して居たのである。然るに世界戦争は、英國の手から右の海上權力を奪はんとして居つた獨逸に之れを與へずして、却て之れを米國に與へんとする形勢とはなつた。米國は今や海上權力に於て英國の壘を摩するばかりでなく、進んでは之を凌駕せんとするの概を示すに至つた。兩雄並び立つのは至難である。英米の當局者之を知り之を憂へた。そこで英國は華府會議に於て、海上權に關する年來の主義主張を棄て——從來は英國の海軍は何れの二國にでも當り得るの主義、即ち所謂二國標準主義を維持して來たが——爾今一國標準主義を以て、而かも米國と同等の地位に下つて満足することゝな

つた。兩國海軍主力艦の力を五對五の比率に定めたのは即ち其結果である。之れを例ふれば從來は英國丈の獨力で海上權力と云ふ商會を經營して來たものが、今後は英米の共同經營に移つたものである。而して日本は三、佛伊の兩國は一・七五と云ふ出資比率で、右の共同事業に参加した形である。佛伊の兩國は目下の處歐洲のことに忙殺せられ、極東の均勢上には餘り問題とならない姿である。露國は華府會議に参加せず、未だ叙上協調圈内に入つて居らぬ。獨逸も亦固より問題とならぬ。殘る所、結局極東の均勢は英米日三國の間の問題である。均勢の維持は平和を意味し、均勢の破壊は戦争を意味する。間々道聽途説の題目となる日米戦争の如きは、勝敗の數何れに宿るとしても、日米兩國に取り共に百失あつて一得なきものである。日本にとりても、米國に取りても、其希ふ所其望む所の結果を齎らすものではない。鵜鴉の争は漁夫の利となる。此意味に於て日米戦争論を唱ふるものは國民としては非愛國的であり、人類としては自滅的行動であると云はねばならぬ。尤も第三者、爲めにする所あるの論としては格別である。華府會議に於て日英米三國は戦はざることを誓約したに拘らず、世には猶ほ或は「アリエール・パンサー」を有し、日本をして相戦はしめんとするの徒輩がある。兩國民は互に自國、爲め、自己の爲めに、左様の宣傳に迷はない様切に警戒すべきである。(新日本史、外交篇)

#### 四、各地視察と意見交換

華府會議の模様は總て決定を見るには到らなかつたけれども、十二月十日には最も重要な問題は大略目鼻がついたのであるし、加ふるに年内に加州に引揚げる約束をしてあつたので、十二月十一日を以てワシントンに別れを告げ、途中ロス・アンゼルスに數日滞在、更にサンチャゴに立寄り、各階級の人々と接觸して意見の交換をなし、且つ親しく調査をもなし實地の視察をなして、同地方に於ける邦人移民状態を研究し、十二月二十四日桑港に到着した。加州に於いては専ら本邦移民状態の實地調査と善後策講究を主要目的として居るので、出来るだけ各地の實地視察をなす爲め、ロス・アンゼルス、サンチャゴ方面の視察を終へて桑港に着するや、翌二十五日桑港を出發して先づシャトルに向ひ、二十七日同地着、翌二十八日滞在して同地有力者を始め在留邦人其他各方面の人と懇談し、彼我の意見を交換して大いに得る處があつた。翌二十九日にはポートランドに引返して一泊、三十日夕方同地を出發して三十一日の夜十時頃桑港に歸着し、茲に桑港の一客舎に於いて多事なりし大正十年を送り、新らしき年を迎へたのであつた。以上各地に於ける視察調査等は固より十分であるとは言へぬかも知れぬが、幸ひに各方面の好意により種々便宜を受け大いに参考資料

を得る事が出来た。

桑港の一客舎に於いて大正十一年を迎へたる私は、一日、二日兩日は休養をなし、三日より再び桑港附近の特に本邦移民の多い地方の視察をなした。先づ第一にフレスノに行き同地に一泊、米國人側、日本人側、労働者側といふ風に各階級の人々と寄り合つて懇談し、或ひは宴會に招待されて隔意なき意見の交換をなし、耕地や本邦移民の生活状態の實地視察などもしたが、何れの地方に赴いても此の方針を以て米國人の地主や労働者に接すると共に本邦移民の地主及び労働者等とも接觸し兩者の意見や希望を聞き、適當なる善後策講究の参考に供したのである。斯くて私はフレスノよりリビングストンに寄り、更にタローックに赴いたが、タローックは世人も知る如く大正九年日本移民迫害問題が起つた土地である。詳しい事は今更説明する迄もないが、白人労働者等が日本人労働者の排斥を企て、亂暴にも多數の白人労働者が覆面をなし、暴力に訴へて日本人労働者を自動車に積み込んで、之れを追ひ出さうとしたと言ふのが當時の日本人労働者迫害の事實である。

其後此の問題は幸ひに解決を告げたが、現在は果してどういふ風な状態であるか、圓滿に行つて居るかどうか多少懸念されたのであるが、同地に行つて見ると意外にも非常な好感を以て迎へられ又私の爲めに特に歓迎の宴會を開いて呉れたやうな次第であつた。そして現在は兩者の間は至つて

圓滿であるし、當時の事は一部少數の白人労働者の誤解に基いたものである事が判明したので、私も其の席上に於いて、歸國の上は一昨年ターロツクに起つた移民迫害問題は、極めて少數の白人労働者の誤解から突發したものであつて、決して白人全部の意志でなかつた事及び今日は至極兩者の間が圓滿であることを報告する旨を約束し、且つ爾後日米兩國人の隔意なき眞の親交を希望する旨を述べたのであつた。斯くて四日には一旦桑港に歸り、五日は日米關係委員會の件に就いて多數の人々と會合し又該調査をもなしたが、更に六日、七日の兩日はサクラメント、ロータイ、フロリン、スタクトン等の實地視察其他に費し、八日桑港歸着、九日は同地に滞在して再び同地の日米關係委員會の協議會を開き、之れにて加州に於ける用務も一通り辨じたので、一月十日米本土に別れを告げて歸朝の途に就いた。

加州の移民問題に就いては種々申述べざる事もあるが、只一言申し添へて置きたいのは、日本移民排斥は決して米人一般の聲では斷じて無いといふ事である。殊に加州に於ける日本移民は、同州に於ける農作上の重要な地位にある。米人中にもよく之れを理解して居る人々が多數あるから、今日に於いて根本的善後策を講究するの必要ある事を痛切に感ずるのである。

## 五、ハワイを視察して歸朝す

一月十六日私の一行はハワイに着した。之れより先き、ハワイに於ける本邦移民問題調査の爲め頭本元貞氏に先發を請うたので、頭本氏は舊臘十二日先發して既にハワイに於ける諸種の調査をされて居つた。私は十六、十七、十八、十九の三日半をハワイに滞在し、其間に於いて砂糖耕地、パインアップル耕地、諸工場の視察等をなして、大體に於いて本邦移民の實情を知る事を得た。ハワイに於ける本邦移民は加州に於けるそれと事情を異にして居て、農業労働者は恰も日本に於ける地主と小作人との關係に等しく謂はゞ資本家と労働者との對立であつて、加州に於けるが如き白人労働者と邦人労働者との軋轢といふやうな事實はない。現に大正九年ハワイに於いて邦人労働者の同盟罷業があつた如き事實があり、之れが解決方法に就いては加州と全然其の趣を異にする點を深く考慮するの必要あるを思はしめた。ハワイ滞在は僅か數日に過ぎなかつたけれども、往路立寄つて材料蒐集を依頼したのと、頭本氏の先發によつて大體の事情を明かにする事を得たので、十九日コレア丸に乗船し四ヶ月振りを以て一月三十日横濱に歸着したのである。

此の渡米に關して私の行動を顧ると、素より何等功績とてないけれども、少くも御邪魔にはなら

なかつた積りであるし、又多少の助力をした積りである。且つ東の方ではニューヨーク、フィラデルフィア、ピッツバーグ其他、西の方では桑港始めロス・アンゼルス、サクラメント其他、北の方ではシカゴ其他といふ風に、全米に亘つて大體に於いて日本人の状態を察知し得る處妙くなかつたのである。加ふるに滯米中、ヴァンダーリップ氏と十分なる意見の交換をなし、又各地の有力なる米人と會見して日米兩國の親和を圖り、華府會議にも局外にあつて聊か力を添へ、満足とは言へぬけれども兎も角圓滿の解決を見るに到つたのは衷心より喜ぶ處である。而して日支關係に就いて密かに米國の態度を懸念されたのであつたが、米國の公正なる態度により杞憂に過ぎずして單に懸念に止つたのは當然の事とは言へ悦ばしい次第である。尙ほ軍備縮小問題に關し、其の比率より論ずれば、英、米に比し多少遜色を見るかも知れぬが、軍備の事たるや前にも述べた様に國家の富の程度より割出すべきものであつて、此の見地よりすれば決して失當ではない。加ふるに國防の事たる、攻勢に出る場合と單に外寇を防ぐといふ場合とは其の勢力に等差があるのであつた、假りに十對六の比率であつても、侵略的攻勢に出でずして、退いて守る眞の國防の見地よりすれば、軍人さへ眞面目であつたならば、新銳の武器と相俟つて十分戦ひ得るものと思ふされば今にして四ヶ月の旅程を顧みて遺憾の事がなかつたばかりでなく、私の使命も先づ大體果たし得た積りである。

## 四九、米財界重要人物

### 一、ナショナル・シチー・バンクの首腦者

前後四回の渡米で、私が彼の國の人々と會つた數から言ふと、宴會や演說會に參集された人々を數へて、恐らく幾萬人、幾十萬人に上るかも知れない。殊に明治四十二年第二回渡米の際には、各地で演說をなし、晚餐會やランチに招かれ、直接名刺を交換した人々だけでも頗る多數であるから、到底一々記憶に残つて居らぬけれども、其中の重なる人々に就いて印象のまゝを御話しようと思ふ。尤も私自身が實業家であつたから、會見した重なる人々は主として實業家であつた。

シチルマン氏はナショナル・シチー・バンクの首腦者で、米國財界の重要人物として名聲あり、モルガン氏と肩を並べる位の有力者であつて、氏は人に接するに少しも隔意のない、親しみのある快活な人で、謂はゞ、凡ての點に就いて開放的な性格の持主であつた。

或晩、シチルマン氏は紐育の中央公園の附近にある自邸に私を主賓として招待し、晚餐會を催されて特に親交を温められた。當夜の晚餐會には私の外に十四五人列席したが、晚餐が終つてから、

自身で各部屋を案内し且つ説明の勞をとられた。私は通譯の市原盛宏氏（日本銀行に居つた人で朝鮮銀行創立と同時に最初の總裁となつたが、今は故人である）と共に、其の説明を聞きながらシナルマン氏の後に従つたが、廳て其の寢室に入つて見ると丁度寢臺の正面の所に、ナショナル・シチー・バンクの一日の仕事の成績が一覽表にして掲げてある、誰が見ても一目瞭然たるものであるから、一と通り目を通したゞけで直ぐ呑み込める。之れは毎日統計にして報告される事になつてゐるのださうで、其の日の一覽表には差引帳尻ロツクフエラー九十萬弗、スタンダード會社三百九十萬弗など云ふ數字があり、預金總額が七億二萬弗かの數字を示して居つた。進歩したとは言へ、未だ三十五年頃の我國の實業界は今日に比し殆んど隔段の差があつたゞけ、流石に大きな處は違つたものと羨ましく思つた事であつた。

シナルマン氏とは尙ほ種々意見を交換し、今後一層日米の經濟的提携の爲め互ひに努力しようと思つて袂を分つたが、惜しい事には既に故人になられて仕舞つた。至つて誠意のある人で、且つ日本に好意を有して居つた紳士であるから、若し今日存命であつたならばもつと親交が深くなつた計りでなく、我國の爲めにも都合のよい事が尠くなかつたらうと思ふ。今は子息のシナルマン氏が後を繼いで居るが私は餘り親交がないけれども、此人は父君に較べると聊か見劣りする様に思はれ

## 二、ハリマン氏とブレジャー氏

ハリマン氏は當時海運事業 鐵道事業を大規模に經營して居つたが、背は割合に低い人であつたけれども、仲々の敏腕家で『五尺の全身總て之れ膽』といふ様な風格を備へて居つた。ハリマン氏は其後——確か明治三十八年と記憶する——日本にも來られた事があるが、露骨に言へば少し鋭い程の感じを興へる人であつたが、一言半句で全豹を諒解するやうな慧敏な性質であり、加ふるに凡ての物事に對して氏独自の徹底的意見を有して居つた。従つてアメリカに於いても頗る有力なる地位を占めて重きをなしたゞけであつたのである。世人も恐らく記憶して居るだらうが、明治四十三年頃のアメリカの國務卿ノックス氏の提唱で、南滿洲の事業を所謂緩衝地帯にする意味合に於いて、之れを絶對中立といふ事にしたら怎うかといふ交渉があつた。之れは將來に於いて日露の衝突を避けしむるといふ事を考慮したものであるが、其の背後には確かにハリマン氏が在つたと思ふ。氏も亦故人となつたが、海運と鐵道の事業に關しては仲々偉い人であり、日本に對しては餘程好感を有して居つたから、今日現存して居つたならば、我國にとつて有益なる知己であつた事は勿論であつて、



今更ながら追憶の情を禁じ得ない。

今になつて思ひ出さるゝのは、其頃の我國の狀態である。初めて私が渡米した頃、即ち明治三四五年時代は、我國の事業を盛ならしむるには第一に鐵道の敷設、第二に工業を大いに進歩せしめなければならぬといふ意見が漸く盛んとなり、殊に鐵道を急速に延長するの必要ありとし、歐洲より鐵道借款をなして其の資に充てたやうな次第であるが、斯かる機運が勃興した時代であつたから、私が渡米して日本の現狀を説明すると初めて日本の實狀を知つて興味を覺えた人も尠くなかつた。ニューヨークに於ける有名な事業家ブレイ氏の如きも其の一人であつて、屢々會見する中に實際も親密となり、遂には米國金融界に重きをなすシチルマン氏と共に日本に日米協力の事業を興して、日米兩國民間の經濟的握手をしようといふ相談をするまでに到つたのであつた。私は歸朝後此の事に就いて我國の有力者とも協議し、「アメリカの資本を仰いで、勃興の機運にある鐵道及び諸工業の發達を期し度いと思ふ」といふ意見を述べた處、他の人々も大賛成であつたし、又其時は金利の割合が高いので投資家側のシチルマン、ブレイ諸氏も承知し、兩者の意見は一致したのであるが、種々な事情のため遺憾ながら其の實現を見ることが出来なかつた。私は今でもそれを残念に思つてゐる。

### 三、親日家のクラーク氏

第二回目の渡米は明治四十二年であるが、此の二度目は既に舊知もある事であり、殊に太平洋沿岸の商業會議所の主なる人々の企て、其の招待により實業視察團を組織して渡米したのであるから、桑港を始め各地で種々なる人々と會見したが、桑港ではアレキサンダー氏と故人となつたドールマン氏と特に懇親を重ね、隔意なき意見の交換を遂げた。ポートランドでは大きな材木業を営んで居るクラーク氏と親しくなつたが、氏は日本及び日本人に對して非常に好感を有つて居る。日本最負の人で、日本郵船會社がポートランドに航路を拓く際の如きは、氏自らが荷主を説いて大いに利便を計られた。至つて質素な人で、親切氣の深い性格の所有者であつた。シャトルではローマン、ブレイク、ジャーチパークの諸氏と相識つたが、ブレイク氏は辯護士、他は同地方有数の實業家である。ローマン、ジャーチパーク兩氏とは其後引續き書面の往復をして居るが、何れも善良な人で、手腕はよく知らぬけれども言行一致の誠ある點だけは窺ひ知る事が出来た。斯くの如き人々が多數であつたならば日米間の忌はしい問題も起らず、兩國の交際が至極圓滿に行くだらうと思はれる。此時の印象ではローマン氏は何處か東洋風を帯びてゐる紳士で、遠慮深い性質のやうに思は

れた。尙ほシャトルでは我々一行の爲めに特に日本デーを開いて大いに歓迎して呉れた。又夜會、レセプション、午餐會等には必ず自動車を以て送迎し、先づ至れり盡せりといふ接待振りであつたが、之れは主として前述の諸氏の斡旋によるものであつた。

#### 四、鐵道界の大立物ゼームス・ヒル氏

此の二度目の渡米に際しては、ゼームス・ヒル氏が非常に我々の爲めに便宜を計つて呉れた。元來此の實業團の渡米は、日本の實業家に米國商工業の狀態を廣く見て貰ひたいといふアメリカからの希望に依るものであるが、若し此の旅行中に萬一間違つて様な事があつては、米國の耻であるといふので、妙からぬ犠牲を拂ひ、上陸地のシャトルから最後のサンフランシスコまで、即ち上陸してから米國の土地を離るゝまで、特別に一列車を仕立て、同じ客車で旅行する事にしたのであつた。此の視察旅行は、米國に上陸してから彼の國を去るまで、丁度九十日間であつたが、船賃や鐵道の費用は勿論、レセプションと云ひ、午餐會と云ひ、晚餐會といひ悉く先方が負擔し、始終同一の特別立列車買切りであつたが、主人側の人も加はつて居つたので百人からの人數であつた。其の遣方凡てが大袈裟であり、立派であり、充實して居つた事は、到底日本などの眞似得る處ではない。

而して商工業地の視察のみに止まらず、ナイヤガラ、タコマ富士、グラランド海岸等を始めとして名所舊蹟をもよく見られるやうに日程を定めてあつた。斯くの如く日米實業家の交誼を厚くし、國民と國民との握手を堅くしたのであるが、夫れにつけてもゼームス・ヒル氏の厚意を謝さねばならぬ。ゼームス・ヒル氏は一介の鐵道工夫から築き上げて大北鐵道の首腦者となり、米國鐵道界に於ける權威者として知らるゝ人で、實業家であり又富豪である。至つて公共的觀念の強い人で、世人の垂涎掛かざるヒビング鐵坑の如きも、當然ヒ氏個人の所有となるべきものであつたが、私すべきでないといふ意見で之れを大北鐵道の所有とした如き例もある。蓋し米國實業界に於ける大人物で、今のサミュエル・ヒル氏は其の後繼者であるが、勞働者から身を起した人ではあるけれども、相當に學問上の知識にも富んで居り、殊に農業に對しては獨自の意見を有して居つた。

私は曾てゼームス・ヒル氏の著述を井上馨侯が翻譯された『合衆國の將來』といふ本を讀んだ事があるが、其中に『米國の如き大農法は地力を損ずる虞れがある。然るに日本の如き小農法は地力を損ずることが少ない。大農法によれば一段歩十五より收穫のないものが、日本式の小農法によれば五十の收穫がある、即ち三倍の効果があるのである。されば米國の農業も將來は日本式の小農法を採用しなければならぬ』といふ意見が載つて居つた。此の著者はゼームス・ヒル氏と同名異人か

も知れぬと思つたが、丁度セントポールでヒル氏と隣り合つて着席したので、種々の談話を交換し食後著書の話をすると、『それは自分の演説を筆記したものであるが、小農法の採用は私の持説である』と語られ、且つ農業に關する種々の意見を述べられた。其際ヒル氏がシカゴに於いて銀行家の會合があつた時、銀行家等の依頼によつて演説をしたが、『銀行家に取りて農業は非常に密接なる關係があり且つ大なる得意である。而して農業の根本は土地である。諸君に向つて農業の事を説くのは聊か迂遠のやうではあるが、此の見地から土地利用に關する意見を述べる』と前提して、其の持説たる農業の改良に就いて述べたといふ話をされ、其の演説筆記を私に寄贈された。一讀するに仲有益な意見であるから、參考の資料になるだらうと思つて、歸朝後之れを翻譯して印刷に付し、各府縣知事其他の知己に贈つた事があつた様な次第である。

大正四年私が三度目に渡米した際、是非ヒル氏に會ひたいと思つて電報で先方の都合を聞き合せると、ニューヨークに居るから立寄つて呉れといふ返電があつた。それで同年十二月ニューヨークに於いて二度目の會見をなし、久し振りで種々談話をしたが、氏の持説たる農業の改良に就いては一向に進歩せず、自分の生きて居る中に効果が顯はれさうもないが、今でも機會ある毎に持説の宣傳をして居るといふ事であつた。それから日本の事物の進歩した點に就いて私の談話を聞かれた上

で、

『短い時日の間に非常な進歩をした事は頗る敬服に堪へぬ處である。殊に實業界の發達に就いては貴下が公共觀念に富み、金融、運輸、工業、海運等の發展に貢献するところ多く、實に日本の恩人であつて敬服する次第であるが、さて製鐵事業については何れだけの心配をされたか？』といふ質問があつた。そこで私は、

『日本には鐵の鑛山がなく、従つて銑鐵なり、鋼鐵なり殆んど民間では出來ない。僅かに田中長兵衛氏の經營する釜石鑛山、室蘭の製鋼所及び北海道に於ける三井經營のもの位のもので、製鐵事業としては殆んど數ふるに足るものがない。只政府經營の八幡製鐵所があつて大規模にやつて居るが、大部分は外國の供給を仰いでゐる現状である。』

と答へると、ヒル氏は更に此の問題に對して、  
『製鐵事業を外國にのみ依頼する様では、日本の工業の進歩が難かしい、鐵は工業の首腦であるから是非發達せしめなければならぬものである。日本には鐵鑛がないと云ふが、果して無いのか怎うか？ 又日本にはないとしても、隣邦支那には澤山あるではないか？ 然るに他の事業は民間で經營し成績を擧げて居るのに、製鐵事業だけは政府に依頼するのは怎うした譯か？』

といふ意味を語られ、尙ほ此事に關して種々意見を述べられた。私は同氏の所説に大いに敬服し、歸朝後老後の仕事として同志を説き、東洋製鐵會社を創立して一時は大分都合よく經營されたが、今は八幡製鐵所に經營管理を依頼してゐる始末であつて、ヒル氏に對しても恥かしい譯である。兎も角ゼームス・ヒル氏は一見識を有する米國實業界の大人物であり、又日本に對して非常に好感を有する人であつた。

### 五、日本最負のハインツ氏

大正四年渡米の際にはピッツバーグでハインツ氏と會見した。氏は漬物事業で成功した人であつて大の日本最負である。私と會見の際には「常に濫澤を尊敬して居る」と御世辭を申されたが、室の一隅に飾つてある象牙の彫物を指して「あれを御覽下さい」と言はれたので、何氣なく近づいて見ると、それは私の像であつた。私は全く意外に感ずると同時に、海外萬里を隔てた異境に、日本を知る一知己を増したことを深く喜んだ次第であつた。ハインツ氏とは數時間に亘つて互ひに腹藏なく意見を交換し、大いに得る處があつたが、聽て同氏の案内で同地のカーネギー博物館を一覽した。同博物館ではハインツ氏の出品せる一室があつて、夫れは悉く日本のものゝみを蒐集した日本室で

あつたが、其の出品中に昔の御殿女中が駕に乗つてゐる風俗人形があつた。處が駕に乗つてゐる女中は縞の着物に束髪といふ現代風であり、駕舁きが印絆纏を着てゐる。それで私は館長のポーランド氏に向つて「駕といふのは我國に於ける封建時代の風俗であつて、其頃の風俗は斯く／＼したものである。之れでは着物にしても髪結び方にしても現代風であつて餘りに間違ひが甚だしいから國に歸つたならば私が拵へさせて寄付する事に致しませう」と約束して別れた。其の後の約束を忘れたといふ譯ではないけれども、遂ひ延び／＼になつてゐたが、四五年後になつて漸く約束を果たしたから、今日ではそれが同博物館に陳列されてある事と思ふ。

私は博物館の日本室を見て熟々感じたのであるが、ハインツ氏の如き日本最負の人であり且又比較的日本の事情に通じて居るにも拘らず、前に申す様な時代錯誤的の間違ひをしてゐる。之れは風俗人形だから格別害がないけれども、之れと同じ様な誤解に依つて政治上、國際上に及ぼされる影響が尠くない様に思ふ。先方で格別惡意があるといふ譯でなく、寧ろ日本に好感を有して居る人でも、日本の事情に精通しない關係から、斯うした誤解が往々にして有り勝ちである。夫れにつけても國民と國民との握手、即ち國民外交といふ事が國交の上に非常に必要であるといふ事を痛切に感じたのであつた。

## 六、異彩あるワナメーカー氏

フィラデルフィアでは日曜學校の關係からワナメーカー氏と特に親善な關係を結ぶに到つた。私はキリスト教信者ではないけれども、日本に於ける基督教の日曜學校の事にも關係して居るので、其方の要件も委託された爲め、打合せの任務を有して居つたのである。此のワナメーカー氏はデバートメント・ストアアの創設者であり、大成功者であるが、此人も亦立志傳中の人であつて、十二歳の時には家計が豊かになつた爲めに日曜學校の教育を受けた事があるさうで、日曜學校の爲めに特に多大の盡力をして居るのも、曾て自分が日曜學校の恩義を受けた事が直接の原因となつて居ると自身で語つて居られた。

大正四年十一月二十七日の夜、私共の一行を歓迎する意味で特に自分の經營して居るデバートメント・ストアアにイルミネーションを施し、翌二十八日(日曜日)には自身で案内されて同店内の重要な處を二三見せて呉れたが、實に無駄のない陳列法であり、無駄のない時間の使ひ方には實際感服の外なかつた。而もワ氏の一舉一動は實によく注意の行届いたものであつて、日本人の學ぶ處からざるものあるを感じた。ワナメーカー氏とは種々打ち解けた談話を交換したが、私の身柄や主

義などを聞いた處で、「澁澤君は宗教家でないにも拘らず、どうして日曜學校のやうな事に力を注がれて居るのですか?」といふ質問をされた。それで私は自分は孔孟の教へを奉じて居るので、父母に孝に、兄弟に友に、世界人類に對しては仁を根本とし、國家社會の爲めには自分の力の及ぶ限り盡さなければならぬといふ事を信条とし、且つ之れを實踐躬行せんと努めて居る旨を答へた。するとワナメーカー氏は首肯され、「御話を承はれば孔子の教訓は基督教と非常によく一致して居る點が多い様に思はれる。寧ろ基督教徒となつて世界の同胞のために盡されては如何ですか?」と頻りに勧められた。私には私の信仰があるし且つ信仰問題は簡單に決せられるものではないから、何れよく考へて見ませうと其の好意を謝して別れたのであつたが、自分は今日でも基督教徒にはなつて居らぬ。それは兎も角としてワナメーカー氏は非常に熱心な基督教徒であり、殊に自身の經驗から日曜學校の頗る有益な事を深く信じて居るので、大實業家として頗る多忙な身であるにも拘らず、日曜學校の事に關しては徹底的に世話をして居る感心な人で、米國實業家中の一異彩たるを失はぬ。

## 七、ロツクフェラー氏其他の人々

此外クリーブランドでロツクフェラー氏と會見したが、氏は餘り多くを語らぬ人で自分の説は殆

ど述べず、日本の産業の状態などについて質問されたが、會つて感じの好い人であつた。ロツクフエラー氏に就いては他の人々の噂では種々の事を聞いてゐるが、實際の印象からは多く語る材料を有して居らぬ。此外アメリカで會つた實業家は澤山あつて、一々申述べると殆んど限りがないから以上私の頭に浮んだ諸氏の印象を述ぶるに止どめて置かう。

尙ほ大正九年の春に來朝された米國實業團の人々は、何れも相當の地位聲望を有する人のみであつて、一行のヴァンダーリップ氏は新聞記者出身で、後ち官吏となつて大藏次官にまで出世し、其後ナショナル・シチー・バンクの首腦者シチルマン氏に見出されて其の副總裁となり、現在では獨立して世界的大實業家として知られてゐる人である。ライマンチープ氏はヴァンダーリップ氏の先輩であり、キングスレー氏は保險事業家として知られ、タフト氏は有名な法律家であり、其外の人人も皆アメリカに在つて相當活動しつゝある。

## 五〇、私の親愛する米國の友人

### 一、ルーズヴェルト氏

故ルーズヴェルト氏に初めて面會したのは、千九百二年（明治三十五年）の夏であつた。當時私は歐米漫遊の途次ワシントンに到り、好機を得て大統領たるルーズヴェルト氏を白聖館に訪問したのであつたが、初對面にも拘らず、氏は至極打ち解けた態度を以て私を引見され、口を開いて先づ日本美術の優秀と軍備の充實とを賞讃せられ、特に北清事變に於ける日本軍隊の勇敢と、其の規律の嚴正にして且つ廉潔なりし事とを稱揚して、斯かる敬重すべき國の代表的人物たる貴下と會見する機會を得た事を喜ぶ旨を語られた。流石に大政治家だけあつて、其の言ふことに少しのソツもない。私は之れに對して

「閣下が我國の美術と軍隊とを賞讃せられた事は感謝に堪へませぬが、而も私は實業家であるのに——當時私は第一銀行頭取であつた——閣下の讃辭が實業の發展に及ばれないのは私の頗る慚愧に堪へぬ處であります。併しながら翻つて思ふに、日本の實業が未だ美術や軍隊などに及ばぬ

所があるからだらうと存じます。就いては私共實業に従事して居る者は、今後一層奮勵して之れが發展を圖り、他日再會の機會に於いては親しく閣下のお口から、日本に於ける實業の隆昌を賞讃せられるのを聞く喜びを得たいと思ひます。」

と答へたのであつた。するとルーズヴェルト氏は私の挨拶を聞いて、破顔一笑して云はるゝには「予が日本の銀行家に對して美術や軍隊のみを褒めて、實業に言及しなかつたことは私の注意が行届かなかつた爲めである。予は決して貴國實業の進歩を無視するものではない。次回に再び會見するの機會を得た場合に於いては、大いに貴國實業の發展を祝福する機があらう。」

と陳謝され、尙ほ種々談話を交換して袂を分つたのであつた。ルーズヴェルト氏が、日本及び日本國民に對して満足なる理解と好感とを有して居られたことは、此の會見の際に於いても明かに看取する事が出来たのであるが、果然、日露戦争の勃發するや、兩國の媾和に就いて特に盡瘁さるゝ處形からざりし事は、世界の平和を愛する趣旨にもよることであらうが、亦我國に對する好意の發露であると、私は信じて疑はないものである。

其後千九百十五年（大正四年）パナマ運河開通記念萬國博覽會が桑港に開かるゝに當り、私は同博覽會を視察する爲め渡米したが、太平洋沿岸各地を巡遊した後、ニューヨークに着したのは十



ルーズヴェルト氏

一月の下旬であつた。ルーズヴェルト氏は私の來遊を知るや、十二月二日オイスター・ペーなる本邸に私を招待して午餐會を開き、種々懇切を盡されたのであつた。當日の會合は全く家庭的のものであつて、私の外に招きを受けたのは、日本人では高峰讓吉、頭本元貞の兩氏で、他に二三の米人が同席したのみであつた。ルーズヴェルト氏と私との間には幾多の談話が交換されたが、今も尙ほ鮮明に記憶して居る二三をお話しよう。

第一はルーズヴェルト氏が日本の朝鮮統治に成功した事を祝された事であつた。蓋し朝鮮總督府に於いては其の施政報告を刊行して内外の政治家に配付したが、ルーズヴェルト氏も亦一本を得て之れを熟讀したる結果、日本が馴れぬ植民政策に對して適宜の措置を採り得た事を賞讃されたのである。次いで話題は日本の實業問題に轉

じ、

「先年初めて會見の際には、私の談が貴國實業の發展に及ばずして貴下の不滿を買つたが、今日は先づ以て貴國實業の大いに發展された事を賞讃するの光榮を有する。」

と言つて諸諺一番の後、近年に於ける日本實業の發展を稱揚し、特に金融機關の組織に就いては米國を師として之れを模倣したものであるにも拘らず、今日では遙に先輩格である米國を凌駕して統一の實を擧げたのは慶賀に堪へないと賞讃された。蓋し米國に於いては、當時中央銀行の制度がなく、彼のフェデラル・レザーブ・バンクも其頃は未だ完成を告げて居らなかつたからである。更に談話は加州に於ける日本移民問題に及んだから、私は現在日米兩國政府の間に協定せられてゐる紳士協約は、世界人類平等の主義から論ずれば、國際上甚だ喜ばしからざる事と思ふと意見を述べたところ、同氏は之れに對しては同意されなかつた。ルーズヴェルト氏の意見としては、「凡そ國際間に於いては、其の風俗習慣を異にし、其の舉動頗る粗野にして且つ低廉なる賃銀を以て勞働に従事し、剩さへ若干の蓄積を得れば直ちに故國に歸らうとする日本人は、忌憚なく申せば米國に取つては歓迎し得べきものではない。従つて制限的移民の必要なることも萬止むを得ないことである。併し此の移民制限は決して宗教又は人種を異にする爲めの差別的處置ではないから、此點は諒解せられ度い」といふ意味で、紳士協約の事情止むを得ざる所以を説かれた。

話題は更に支那問題に轉じた。當時私は、日米の經濟界は互ひに協力して支那の實業開發に勉めなければならぬといふ事を専ら主張して居つたので、此の意見を述べて日米提携の必要なる理由を

説明し、更に其頃日本から支那に對して交渉中なる例の二十一ヶ條の事に言及して其の意見を問うたところ、ルーズヴェルト氏は「それに對しては卒然のお答へは致し難いけれども、予は東洋平和の爲めに、日本が其の盟主たらざる可らざる事を確信するものであるから、我が米國民にも予と同一の思想を懷抱せしめ度いと念ずるものである」と述べられたのであつた。尙ほ此外に種々の雜談に時の移るのを忘れて語り合つたが、晩鴉の頃に到つて會談を終り、互ひに再會を約して堅い握手を交し別れを告げたが、斯くの如く我國をよく理解して居り且つ親日家であつたルーズヴェルト氏が、既に故人となられた事は實に遺憾に堪へない。

——千九百六年、カリフォルニア州に於て、日本人排斥の事件起り、風雲甚だ不穩にして、日米開戦の説が傳へらるゝや、ルーズヴェルト氏は教書を發して、左の如く陳述したり。

米國と日本との交誼は、今を去る半世紀前提督ベルリの日本遠征に依つて、同國を泰西文明に接觸せしめたる以來、繼續し來れるものにして、爾來日本の發達は眞に一驚に價するものあり。又日本は光榮ある最古の過去を有す。同國の文明は、北歐國民即ち米國人民の多數が蹶起したる國民の文明よりも古し。今や日本は文明國民の最大なるものとして立てり。戦争の技能も、



平和の技能も、共に偉大にして、軍事、工業及び美術的發達、又其の大を發揚するに至れり。特に日本の海兵は、歴史上顯著なる如何なる者と戦ふも劣らざることを示したり。日本は幾多の大將軍と大提督とを産出した。又日本の商工業は非常に發達し、科學哲學の進歩も亦之に譲らず、日本人民が赤十字社を経て、十萬弗餘を桑港震災民に送致し、同寄贈金は我等國民の満足<sup>まんぞく</sup>を以て、享受せし所なり。國民として將た個人として、日本人民の禮讓<sup>れいじやう</sup>は一の諺となれり。然るに、二三の地方に於て、近來日本人に對して取るに足らざる感情の表現したるを見る。即ち桑港に於て彼等を小學校より排斥したるが如き、彼等は單に勞働者として有效なるの理由に依り、或る地方に於て不平の聲を聞くが如き是れなり。今や米國に於ける第一流の大學すら、日本學生を歡迎するの時に方り、日本人に對して公立學校の門戸を閉づるが如きは、一個の惡事に外ならず。米國民は日本に於て良好なる待遇を享くるものなるが故に、若し同一の交誼を以て之に酬ゆる能はざるに於ては正に我國文明程度の劣等なることを告白するものなり。而して米國に在る日本人に對して、暴行事件の起るや、ルーズヴェルト氏が保護に努め、若し必要あらば、兵力を以て、日本人の生命財産を保護すべきことを公言せり。吉川潤次郎著(偉人ルーズヴェルト)

## 二、記憶の好いたフト氏

以前大統領たりしタフト氏と初めて會見したのは、米國でなく日本に於いてである。曾てタフト氏は一行五六人で我國に來遊された事があつたが、其際私共が主催者となつて紅葉館に於いて歡迎會を開いた。其時陪賓として故伊藤博文公にも出席を請ひ、主客併せて二十人ばかりの集りであつたが、特に純日本式の響應をなして遠來の客を歡待したのである。開宴に先だつて私は主人側を代表して挨拶を述べ、



氏 ト フ タ

「設備其他が行届かぬ上に、料理も特に純日本式であるから、或ひはお口に合はれぬかも知れないが、私共の誠意だけは御汲み取り願ひ度い。」と申述べたところ、タフト氏は

「今席は純日本式の御接待の上に、大政治家伊藤公爵を相客にされ、主人公は澁澤男爵を始め何れも有名な實業家諸氏である。私は御馳走は勿論喜んで頂戴いた

すが、それよりも斯かる有力な人々と會見するの機を造られた事が第一の御馳走と心得る。」  
というて、非常に満足の意を表された。之れがタフト氏との初めての會見である。

其後タフト氏が大統領時代に渡米した際に、私は東京商業會議所會頭であつた中野武營氏、横濱商業會議所會頭だつた大谷嘉兵衛氏等と共に、白聖館に於いて再度の會見をしたが、タフト氏はよく私を記憶して居られたと見え、私が自己紹介をせぬ中に先方から『バロン・シブサワ』と聲をかけて直ちに握手をなし、久瀧を叙して先年渡日の際の好意を謝され、且つ種々談話をしたが、記憶のよい人で、中野、大谷氏等をもよく知つて居られた。私は政治家でないし、従つて談話も政治問題には一切觸れなかつたから、政治家としてのタフト氏に就いては深く知らぬが、個人としての氏は誠に如才のない親切な人で、其の應待の態度といひ、話題といひ、誰にでも好感を與へる好紳士で流石に大政治家であると思つた。又日本に來遊された事があるだけに、日本の事情にも精通して居られ、日本に關する種々の質問などをされたが、今でも其の温顔が髣髴として眼前に浮かぶ心地がする。

### 三、平和論者ジョルダン博士

スタンフォード大學名譽總長ジョルダン博士及び、ボストン大學名譽總長エリオット博士は、共に米國に於ける二大教育家であり、而も共に有名なる平和論者として知らるゝ人であるが、兩博士には私も親しく會見して意見の交換をした事があるし、又共鳴せる點も尠くないから、其の印象の一端をお話する事としよう。

ジョルダン博士は米國に於ける排日の本場とも云ふべき加州のスタンフォード大學名譽總長であるが、日本に對しても比較的好感を持つて居る人で、日本人の門下生も相當多數に上つてゐると聞き及んでゐる。曾て我國に來朝された事もあり、私も渡米した際には訪問し、前後三回ばかり面會して互ひに腹藏なく意見を交換し合つた古い知人である。氏は前にも述べた如く、米國の代表的な教育家であると同時に、非常に熱心なる平和論者であつて、常に『戦争は人智の進歩によつて當然無くならねばならぬものであつて、之れは常に學問的の根據による意見ではなく、實際問題としても戦争は今後必ず衰へる事を確信する』と主張して居る。先年同博士が來朝せられた時に大いに語り合つたが、私の東洋流の平和思想と、博士の西洋流の宗教的な平和思想とが相共鳴したので、それ以來親交を持続する様になつたのである。

昔は宗教的標榜をなして戦争を始め、眞實は領土擴張を目的とする事なども頻りに行はれたが、

近世になつて漸次人類は進歩し、知識が博くなるに従ひ、戦争を少くしようとする觀念が強くなつた。シヨルダン博士は此の觀念を最も強く持つて居る人なので、私と共に鳴る處が少くなかつた。

先年モロッコ問題が悪化して、ドイツとフランスとの交渉が難かしくなつた際、一般世間では獨佛國交の破裂を氣遣つたものであつた。丁度其頃シヨルダン博士が來朝中であつたが、私が會見した時モロッコ問題が話題になると博士は、ドイツが戦費の必要から米國のモルガン氏に金融を依頼した處、モルガン氏は『侵略的な戦争に要する金は貸さぬ』と云つた事を例として、決して戦争にはならぬと斷言されたが、果して此言が的中し、流石に紛糾したモロッコ問題も最後の土壇場に到つて局面が展開し、シヨルダン博士の豫言の如く戦争にはならなかつた。私はそれ以來大いに博士の説に敬服し、今後は戦争の減少して行く事を深く信ずるに到つた。従つて歐洲大戰が勃發した際の如きも、私はシヨルダン博士の説を信じて居つた關係から、最初は決して大戦争に成る様な事はあらずと觀測し、『此の戦争は早く終熄する』と云つて居つたものであるが、不幸にして私の觀測は裏切られて、遂に彼の如き世界未曾有の大慘禍を現出するに到つた。

それで私が三度目の渡米をしてシヨルダン博士と會見した際、私は歐洲戦争の勃發に際して博士平素の意見を信じ、大戦争にならぬと觀測して大いに誤つた事をお話すると、博士は

『それは私の觀察が悪いのではなく、貴下の觀測も誤りとは言へない。要するに人智の進み方が吾々の考へよりも遅いのであつて、遺憾千萬と申すより外に仕方がない。併しながら將來に於いては必らず眞の世界平和を招來する事を信じて疑はぬ。』

と頗る自信のある態度で語られ、更に其の所説を述べ世界の平和に就いて説かれたのであつた。シヨルダン博士は斯くの如く熱心な平和論者であるが、至つて眞面目な人で誰に向つても決して障壁を設けず、赤裸々な態度で意見を交換される人であつた。

#### 四、エリオット博士の平和論

エリオット博士も亦教育家として將た學者として世界的に有名な人であるが、シヨルダン博士と共に著名な平和主義者であることも前述の如くである。曾て日本にも來遊された事があり、私は明治四十二年に渡米の際にも面會して居るので、大正四年に渡米した時には三度目の會見をしたのであつた。博士は相變らず胸襟を開いて種々談話をされたが、其際エリオット博士は大要左の様な意見を述べられた。

『私は教育の進歩によつて、世界の眞の平和を築き上げなければならぬと信ずるものである。そ

れには今回の歐洲大戰を一新紀元として、新らしい平和の世界を展開せしむ可きである。就いてはアメリカとイタリーとを聯合國側に參戰せしめて、此の戦争の終局を一日も速かに告げしむる様にする事が肝要であると思ふ。幸ひ貴國(日本)に於ては平和論者たる大隈重信侯(當時は伯爵)



士博トツオリエ

が總理大臣の椅子に就かれて居るから、同盟國たるイギリスとよく相談をして、アメリカを參戰せしむる様に盡力せられ度いと考へる。而して私自身は米國にあつて參戰の輿論を造ることに努めようから、貴下は歸朝の上は是非此の意味に於いて大隈伯を説かれ度い。之れ聽て眞の世界平和を將來する所以である。」

尙ほ博士は之を前提として種々平和論を述べられたが、博士の説によると「此の大戦が終局を告ぐるに到つた後、眞に世界平和の曙光に接する事が出来やう」といふにあつた。それは「要するに今日の如く科學的知識が進歩し、それが軍事上に應用される結果、戦争の慘禍は空前のものたるべく、従つて世界人類も戦争の罪惡を痛感し、平和を熱望するに到るは必然である」といふ意見であつた。而して「眞の平和は到底國際間の德義許りでは

駄目である。平常に於いては互ひに德義を尊重しても、イザといふ時になれば、どうしても自分のこと、自國のことを先きに考へるのである。されば教育の進歩によつてのみ眞の世界的平和は確保されるであらう」と附言せられたのであつた。博士の意見には確に肯綮に當るものがあつた。

エリオット博士等の運動が、どれだけの力があつたかはよく知らぬが、兎も角米國の輿論は遂に參戰論となり、大正六年米國をして聯合國側の味方として蹶起するに到らしめた。そして前古未有の世界大戰は其の翌年に到つて終局を告げたのである。だが、果して世界の眞の平和は將來するかどうかそれは未知數であるけれども、現に此の大戦後に於いて國際聯盟の締結があり、米國は之れに參加しない爲めに其の効果を疑はれながらも、實際には労働問題、社會問題、其他に就いて着々成績を挙げ、各國の歩調も漸次統一の過程を辿りつゝあるし、又米國の首唱にて太平洋會議の開催を見、曲りなりにも海軍々備の制限協定が出来、平和運動は着々として行はれてゐる。されば直ちに大きな期待を以て臨むことは出来ぬけれども、兎も角、世界の空氣は平和の機運に向つてゐるといふ事は出来よう。エリオット博士の理想とするが如き世界の恒久的平和は、近き將來に實現すべくも思はれないが、其の所説は大いに傾聴に値するものあるを思はざるを得ない。

## 五、バンクロフト氏の追憶

米國大使バンクロフト氏が突如逝去せられたのは大正十四年六月二十八日であつた。私は其報に接すると同時に、哀悼の意のみは早速表して置いたが、何分當時は病臥中のことゝて、公人として其の意志を表明する機会がなかつた。バンクロフト氏が駐日大使として着任せられたのは、確か大正十三年一月十七日であつたと思ふ。私は其の翌々十九日帝國ホテルで氏と會見し、長時間いろいろ打ち解けた意見をかはしたが、爾來病氣にて引籠つたので、其後もしみじみお話が出来ず、大正十四年二月日米關係委員會で、同氏の歡迎會と併せて、松平駐米大使の送別會を行つた時お目にかゝつたのみである。

私としては前任大使ウツツ氏が非常な親日家であつた關係上、彼の移民法の成立に不満を感じて自ら職を去つたと聞いてゐるので、次ぎの大使バンクロフト氏は如何なる人であらうかと懸念して居た。ところがシカゴ、マーシャルフィールドの百貨店のハイブス氏が同氏のことを聞かせて呉れた。此人は事業家であるが、外交上、教育上に相當の意見を有し、宗教家としても有名な人である。即ち二度ばかり私を訪問して「バンクロフト氏と私とは頗る親密であるが、同氏は立派な紳士であ

る。私は貴方のことをよく話して置くからどうかよろしく。」といつて其の人となりを詳しく話した。されば私は最初同氏に會見した時、ハイブス氏から種々のことを聞いたとて、お互ひに打解けた話しをしたが、併し私は當時大使といふ重職にある氏に、着任早々日米問題の將來に就いて談ずるのはどうかと考へて、それ等は猶ほ日本の事情も了解し考究してからでも遅くはないと、所謂日米問題に關しては突つこんだ談話はしなかつた。殊に私は東西文化の融和を目的とし、日米間には面倒な問題の残らぬ様に解決し度いと考へて居るから、單に日本國民として日本が世界列強の仲間入が出来たのは、米國の義侠と信義との賜であると、米人を敬慕してゐる意味を述べたのであつた。亦氏も兩國親善に盡すため胸襟を披いてくれと云つた。

それから後同氏との間にタウンSEND・ハリスが安政三年（西曆千八百五十六年丁度ベルリが來朝した二三年後）下田の近くの柿崎に玉泉寺といふ寺があつて、そこへ米國領事館旗を初めて樹てた。それに就いて色々の話しや相談をした。それは近頃で玉泉寺の本堂や庫裡が大破して修繕せねばならぬが、貧乏で出来ぬとて日米關係委員會へ其の資金の寄付方を同寺の坊さんから申込んで來た。何分此處はハリスが一年餘りゐた由緒ある寺なので、私達も何とかしたいと考へてゐた。處がバ氏は其の修繕費の内へ三百圓寄付したのみならず、ハリスの古蹟として記念したいといひだした。

そして記念碑を建てたい、其の費用はバ氏の友人で實業家のウォルフといふ人が二千圓だけ出資するから、將來に傳へて恥かしくない様に、澁澤子爵に建設者となつて貰ひたいといふのである。私は大變よい事であるとこれを是認し、早速清水組の人を同寺に派して其の設計をさせたのである。勿論二千圓ではあまり立派なもの出来ないが、お寺の門の前へハリスの日記にあつた英文を彫込み、其下に此の文章に基いた感想文を私の手で書く積りにした。

斯く私は一人で定め、バ氏に相談したなら直ぐ實行にかゝる考へであつた。そして氏の病氣は夫れ程の大患とも思はなかつたので、人を遣はしたりなどしたが、遂に氏と私とは此處に幽明境を異にする間柄になつて仕舞つた。實に人生ははかないものであると慨歎に堪へない。殊にバ氏は年齢未だ六十八、私より二十近くも若いのであるから、洵に惜んでも餘りがある。

先年私はニューヨークのブルクリンでハリスの墓に參詣した事がある。當時墓所は紅葉が美事であつたので、ハリスの赤心の強さを此の紅葉の色に喩へて詩や歌を作つたことがある。思ひ起せば實にハリスと云ふ人は維新當時領事から進んで公使となり、日本が外國からの脅威を感じまた脅迫された時分、よく日本の爲めに盡し彼のタリフ（税目）などに就いて親切な相談相手となつて呉れた義侠に富んだ日本の恩人である。

バンクロフト氏は同年の九月四日まで此の碑を建て、欲しいといつて居つたが、遂に其の竣工を見ずして逝かれたのは返へすくも残念に思ふ次第である。

## 五一、國民外交の必要

### 一、世界戦争と米大統領

「無理が通れば道理が引つ込む」と云ふ諺がある。無理が通つて道理の引込むやうな現象は、到底世の中に有り得べからざるものゝ如くに思はれもするが、實際に於いては之れが却々行はれて居るのである。支那の語にも「人多くして天に勝つ」とある程で、如何なる無理な事でも、餘り根氣よく執着く行り續けられると、道理のある方の者は、之れを五月蠅く感ずるから、暫く引つ込んで時節の到來を待たうといふ氣にもなる。そこで無理の方は時を得顔に横行濶歩し、我儘勝手の有りつ丈けを盡くして、道理を苦しむるに到るのである。併し結局道理の勝利に歸するのが是れ天地の大法で、何れの日にか道理は無理を押し込めてしまひ得らるゝやうになるのだが、一旦無理が幅を利かし出したとなれば、それが押し込めらるゝやうになるまでには、相當の時日を要するものである。

彼の歐洲戦争も、觀た處一時は無理が通つて道理が引つ込み、人多くして天に勝つたかの如き形

勢となり、人道をなみする獨逸軍の勢力は駭々として日々に益々昂まり、聯合軍の勢力萎微甚だ振はず、殊に大正七年四月の如きは聯合軍の側に尠なからぬ杞憂を懐かしむるに到つた程不利な形勢に陥り、此分では道理のある聯合軍側も、當分無理な獨逸に頭を押へ付けられてしまつて、逆境に苦しまねばなるまいかと思はれて居つた。

併し獨逸の勢力が一時は如何に旺盛の如くに見えても、到底道理に依つて立つ聯合軍側に勝ち得らるべき筈無く、最後に獨逸の敗北となるべきは、私の信じて疑はなかつた處である。それにしても大正七年の春あたりの形勢では、斯くなるまでに猶ほ多くの歳月を要するらしく見えたので、或ひは餘生の短い私などの生存してゐる中には、聯合軍側の勝利によつて世界の平和を見られるまでにはなるまいとも感ぜられたが、意外にも獨逸が早く降参つてしまつて、大正七年十一月十一日休戦條約の調印を見るに到つた。假令あの勢ひで獨逸が一時聯合軍に勝つたからとて、獨逸の國家は決して永久に繁榮し得らるゝものではないのである。一時は無理が通つて道理が引つ込んでも、長い中には道理が頭を擡げ出して來て、屹度無理を押さへつけてしまひ、獨逸の繁榮を害するやうになるのが天地の大法であるからである。

獨逸が意外にも斯くばかり早く降参つてしまつたのは、固より聯合軍側の持久的努力に依る處多

きは申すまでも無い事だが、米國大統領ウィルソン氏が既然として起ち、米國をして聯合軍側に加擔させてしまつたのに負ふ所が頗る多いと言つても可いのである。米國が參戰するまでには、客船ルヂタニア號が無警告で獨逸潛航艇に撃沈せられて以來、幾回となく獨逸との間に文書の往復を重ねたもので、其間にウィルソン氏は、若し戦ひが聯合軍側の不利に歸して、今後世界の舞臺に獨逸をして跋扈せしむるやうな事になりでもすれば、正義と人道との爲めに由々しき大事を惹起するに到るべきは勿論、人類全般の不幸之れより大なる無きを感じ、茲に意を決して世界の人道と正義とを代表して獨逸を膺懲すべく米國を參戰せしむるに到つたのである。獨逸のカイゼルが亞米利加のウィルソン氏に敗けて、たうとう休戰を提議するに到つたのは、是れ即ちウィルソン氏によつて代表せられた正義と人道とが、カイゼルによつて代表せられた横暴と不仁とに勝つたのだ。

## 二、經濟の發達を希ひ道徳との合一を思ふ

大正七年十一月十一日愈々休戰條約の調印せらるゝや、東京の實業團は同月十六日朝野の名士有力者を丸の内の東京商業會議所に會して祝賀會を開き、内閣諸大臣も之れに列席せられたが、席上藤山同會議所會頭は、戦後の經營に就いては一に實業家の發展に依らざるべからざること故、之れ

が爲め政府も大いに力を盡し、官民相一致して進みたいと云ふ意を演説せられたのである。之れに對し原内閣總理大臣は、

「總じて從來の戰爭では武力の強い方が勝つのを原則としたが、今回の歐洲戰爭ばかりは從來の原則を破り、獨逸が未だ武力に於いて聯合軍に勝る所あり、戰場では獨逸が猶ほ優勝の地位にあつたにも拘はず、却つて獨逸の敗北となつたのは、獨逸は武力に於いてこそ聯合軍に勝りはしたれ、富力に於いては遙かに聯合軍側の諸國に及ばなかつたからで、つまり富力の戰爭が聯合軍の勝利に歸せる結果、全局の戰爭も亦聯合軍の勝利に歸したる次第故、戦後の日本は大いに富力の涵養に力めざるべからざる事情にある。従つて今後益々實業家諸氏の奮勵を望む。」

と云ふやうな意味を演説せられたのである。席上私にも何か一つ演説せよとの事であつたから、敢て異様の意見を立つる爲めでも何でも無く、原首相の演説せられた趣旨を單に補はうとの精神から私は、

「聯合軍側の富力が獨逸の富力に勝つてゐたのが原因で、結局聯合軍側が戰勝者の位置に立ち得るまでになつたのは、如何にも原首相御演説の通りに相違無いが、聯合軍側の富力には道徳力が伴うて居たから、それで其の富力が頗る有力なる勢力となり、遂ひに敵を降參らす事の能さる



までになつたもので、如何に聯合軍に物質上の富力のみが豊かであつても、之れに道徳が伴はなかつたら、到底獨逸に勝ち得なかつたのである。つまり聯合軍の勝つたのは、其の道徳の力で獨逸の不道徳を破れるもの故、日本も戦後は單に物質上の富力を涵養するのみに力めず、まづ第一に國民道徳の涵養に努力し、富力に伴ふに道徳力を以てし經濟と道徳との調和一致によつて、茲に獅子奮迅の力を得、依つて以て世界の競争場裡に立つやうに致したい。道徳力の伴はぬ富力は所謂不義の榮華で、浮べる雲の如く、經濟戰の間に立つても到底勝利を得らるゝまでの力の無いものである。』

との意を演説したのである。

私は今日に於いても、國家の富力を涵養するのが當然必要の大事であると思ふと共に、國民道徳の向上進歩を圖るのが更に一層緊急の事で、經濟と道徳との一致無くしては、如何に産業が勃興しても國力の發展を期し得られぬものであると信ずるのであるが、それにつけても益々論語を普及し、之れを實業家に讀んで實行して貰ひたいと思ふのである。論語は實に良く出来てゐる經書で、章々句々悉く之れを打てば響くの概あり、其の間に空理空想といふやうなものが殆んど無い。悉く實際に處するの意見ばかりであると信ずる。

### 三、戦争防止と國際聯盟協會

私は元來平和を好むものであつて、人類の知識が進み、社會の文化が発達して來れば、平和思想は一國內に止まらず國際的となるのが自然で、遂には道理に基いて何事をも行ひ、所謂經濟と道徳との合一、政治と道徳との合一が完成して、黃金世界を出現せしめるに到るものと信じて居るものである。私の青年時代の思想は相當過激なものであつたから、腕力も強くなければならぬと擊劍なども學び、言論のみの力では足らずして實行力を養つたものである。併し私の云ふ力は『言に訥にして行に敏なり』との意味で、直接行動ではないのである。時々世の中が如何に亂れることがあつたにしても、人類に平和を好む本能があると云ふことは否定することは出来ない、私は六十年前の昔から考へて居たのであつて、之れは決して空想ではない。あの有難い有難いと思つて居れば、阿彌陀様が助けて下さると云ふやうなことを空想であつて、其の様なことは全然異なるものである。勿論國に依つて國體や習慣や制度の相違で、進展の程度にも自ら等差があることを免れないが、人智が進むに伴つて國民は平和を希望し、お互ひによい生活をしようと望むに到るものである。即ち自己のみを先にすると結局は人を虐げることになると云ふ點に自覺を爲し、孟子の『苟

くも義を後にして利を先に爲せば奪はずんば壓かず」と云ふ言葉の意味を解し、道理と仁義とを重んずるに到るべきものと思ふのである。

斯くの如き成行は過去の歴史に顧みても瞭かな處である。昔は宗教的標榜をして戦争を始め、眞實は領土擴張を目的とすることなども頻りに行はれた、其例は西洋のみでなく東洋にも少なくないであらう。然るに近世に移るにつれて、漸次人類は進歩し知識が廣くなり、戦争を少くしようとする觀念が盛んになつた。さうしてジョルダン博士のやうに戦争は起らぬやうになるだらうと主張する人が増えて來た。私も戦争の減少して行くことを信じ、世界大戦争の如きも其初めは果して起るかどうか疑問とし、止むなく物發しても永く續きはしないであらうと觀測して居たやうな次第である。従つて大正三年の八月一日に房州へ行く汽船の中や、向ふへ着いてからも「此の戦争は早く終熄する」と言つて大變に觀測を誤つたことがある。此のことはよく色々な會合の席上で失敗の話題として居るのであるが、愈々歐洲大戦は世界中の大動亂となり、其の結果各國は戦争の慘害を感じた様であつたから、結局は或る方法で共同的に或國の侵略的な欲望を抑制するやうなことになるはしないかと思つた。併しまさか國際聯盟の如きものが成立するとは思はなかつたのである。

處が大正七年の十一月に休戰條約が締結せられると同時に、米國のウイルソン氏は國際聯盟を高

調したのであつた。私は之れある哉と思ひ、たとへ此の聯盟に大なる威力がなくとも、戦争の物發に當面して之れを後らせるだけでも効果がある。若し方法さへ適當に採られるならば、國際紛争の調停機關とならぬとも限らぬと思つたのである。そして私は世界の戦争が少なくなり、知らぬ他國人同士も道理に基いて眞正に權利義務を重んじて行くと云ふ意味から、國際聯盟に賛成するのは人類の義務であると考へて喜んで居た。然るに自身態々渡歐して國際聯盟を高調したウイルソン大統領が米國に歸ると非常に評判を悪くしたのみならず、國際聯盟は成立したが米國では之れに正式に参加をせず、今以つて参加しない。けれども米國として趣旨には賛成して居る譯で、参加しないのはたゞ黨派關係からである。其の後國際聯盟は其の効果を疑はれながらも、實際には労働問題、社會問題、其他に付いて引續き會議を開いて着々成績を挙げ、世界各國の歩調を段々統一しつゝあるのである。

大正十年であつたか、此の國際聯盟に協賛する協會が先づ英國で起り、日本でも同様聯盟援助の協會を起すことになつた。私は其の時分、老人でもあり世界の形勢にも通じて居ないので、自ら之れに加はらうと云ふやうな考へは持つて居なかつた。處が牧野伸顯子爵が私を訪ねられて、其の參加と會長引受のことを頻りに勧められた。そして、

『有志が相談して國際的な此の協會を起すことになつた。これは政府が命ずると云ふやうな性質のものでない、官民一致協力して働くものである。従つて會長には世界の事情も判り、相當の年輩の人で、協會の維持に盡さるゝ方が必要である。其處で相談の結果貴方にお願ひしたいと云ふことになつたから、御承諾を願ひます』と云はれた。私は『或點には御相談に加はるが、國際的なことは餘り判らず、新聞を読んで知る程度であるから、平に御免を蒙る。』

と答へて私は斷つた積りで居た。處が其後愈々築地の精養軒で、此問題に對する有志の協議會が開かれるから出てくれと添田壽一さんが云つて來られたので、折角の勧めでもあるから出た處が、私に座長になれと云はれるので座長になつたらば、今度會長は座長に御願すると云ふ議が出て、それに決つてしまつたから、遂に私は之れを引受けることになつたのである。そして私は次の如く自問自答した。

『國際的なことをよく知らないから斷るべきであるとも云へるが、知らないから大いに勉強して知る様にならねばならぬ故、引受けることは自分の爲めであるとも云へる、殊に日本は東洋に偏在する一島國であるからとて、國際的なことを知らぬではすまされぬ。未來の國運發展上にも世界的な知識を十分吸収して置かねばならない。白人が幅をきかす、アングロ・サクソンが威張ると

云ふのも、知識が汎く道理を極めて居るからである。明治維新の當時薩長が幅をきかせたと云ふが實力があつたからである。將來日本がどうなるか、又東洋がどうなるか判らぬが、兎に角、日本は國が小さいながら、今日の地位に進んで來た以上、爲すべき手順は行つて置かねばならぬ。鎖國的には駄目である、チエツコ・スロバキアさへ國として國際的にやつて居る。勿論聯盟の力を絶對とすることは出來まいが、聯盟の力で戦争の起ることを豫め鎮めることだけでも出来るならば、是非必要なものであるから、空論に走らぬやうに、道理を辨別して誤らしめぬことを心掛けて進むべきであらう。』

と考へて此處に會長を引受けたのである。

私は此の國際聯盟の趣旨を擴めることに努力し、微力ながら相當の心配をして來たので、今年で五年目になるが僭越ながら尙ほ會長の椅子にある。そして先づ知識階級の了解を得ることが必要であるかと考へ、種々其の方法を講じ、又來たるべき知識階級たる學生に對し、大に宣傳を試み、今では各大學其他に支部が設けられ其の数は二十近くとなつて居る。

私は國際聯盟協會は國際聯盟其者と聯絡をとつて將來の發展を計つて行きたいと思ひ、そして世界の平和に對して貢献しつゝ、諸種の刺戟をも與へて行く考へである。尙ほ未參加の米國も近く聯

盟に参加するであらうとのことであるが、同國でも民間に於いては既に國際聯盟協會も成立して居り、相當な人は悉く聯盟を認めて居るのである。私の親友であるヴァンダーリップ氏の如き、大正九年來朝の折にも『結局國際聯盟は世界的に成り立つもので米國も近く参加するであらう』と云ふ意味のことを私に話したことがある程で、心ある人は其の参加を認めて居るのである。

## 五二、大正十二年の大震災

### 一、突如起つた大震災

私は十五歳の時に安政の地震に遭つたが、其時は田舎に居たので、江戸の災害ほどには激しく感じなかつた。故に大地震の経験は全く今度が初めてであつたわけ、それだけ感慨の深きものがある。九月一日地震突發の當時、私は日本橋兜町の濫澤事務所で書類を調べてゐた。餘り揺れ方が激しいので、若い人達に扶けられて玄關まで行くと、凄じい音響と共に玄關上の石材が墜落して來た。到底そこから出られさうもないので、中の口へ引返して裏庭へと遁れた。其中震動が少し緩慢になつたので、折柄隣接の第一銀行から、當方が安全だから來るようにとの迎へを受けて其處へ行つた。事務所は屋根が目茶々に壞れ落ちて全く屋内へ這入ることが出來ないから、重要の書類は悉く取纏め、其夜は其處に夜番を付けておき、翌朝になつたら早々第一銀行へ事務所を移すことにしたいと同行の佐々木頭取と相談し、それから午後三時まで無用の雑談に時を空費して居た。今になつて之れは寔に慚愧に堪へない、地震と同時に諸所方々から火災が起つてゐたのに、八十の老人其點に

思慮が及ばず、警戒の念が發しなかつたのは如何にも無念千萬、老人一生の失策であつた。

間もなく火は迫つて其夜の中に附近一帯と共に丸焼けとなり、折角取纏めた書類も何一つ持ち出すことが出来なかつた。慶喜公の傳記を初め、自分の傳記等も編纂中であつたので、私の古い手紙なども瀧野川の自邸から事務所へ持つて来てあつたのだが、其の瀧野川の家が安全で、事務所が焼失したのだから一入残念の氣がする。併しかうした残念の感じは何れの方面にもある事であらうし、またそれを今更悔いても詮ない事である。それよりは當面の問題である此の未曾有の災害時に善處する方圖を講じなければならなかつた。そこで私は事變の翌日から東奔西走殆んど晝夜兼行に立ち働いたのである。

震災と同時に直に私の念頭に浮んだのは、食糧の充足と亂民の警戒の二點である。此點に就き私は二日早朝時の内閣及び赤池警視總監に對して存意を進言した。次いで私は居住地である瀧野川町の爲めに米を埼玉縣から搬入することとし、基督教徒や町役場吏員達を督勵して救護に努め、引續き市内外全般に及ぼすの考慮を回らした。政府に於いても私の進言と同意見で、既に戒嚴令を布き、徵發令を制定し、其他應急の措置は着々と實行せられ、三日には山本内閣の出現となり、愈々機敏なる活動が各方面に開始された。四日後内相からの急使があつて救護事務局の大方針を聽き、私に

も一骨折るやうにとの懇請があつたので、いろ／＼と愚見を述べ且つ協議するところがあつた。其の結果實業家及び兩院議員協同して『大震災善後會』なるものを組織して復興にいそしみ、後ち、帝都復興院の成立を見、私もそれに參與することになつた。

## 二、國民を誡める爲めの天譴か

今回の大震災をつらく考へると、色々な事が思はれるのであるが、今茲でこんなことを云ふと或ひは餘りに迷信的な言葉になる様であるけれども、天は國民を誡める爲めにかうした大事變を起したのではないかと思ふ。世の中は押しなべて行詰つて居つた、誰か之れを打開しなければならぬ状態に置かれてあつた。五十年の昔に拮据勳勵した國民も、今や華美に流れ、遊惰に陥り、偏に各人は自己の満足安逸にのみ走つて居つた。

従つて私の常に主張して止まぬ所の、孝悌忠信などには耳を傾けるものは至つて少い状態であつた。尤も上御一人に置かせられては、萬世一系の皇統を踐ませられてをられるから、是等の傾向によつて、國基の隆盛を妨げられるやうなことはなかつた。併し國民の中には随分遠慮のない行動をしたり、粗末な、怪しげな知識を持ち出して居るものも少くない。其の爲めに國民は曾つてない華

美になり、贅澤になつてゐたのである。

昔は贅澤な品物を賣る店はひっそりして居たものだつた。申さば隠して賣ると云ふ様にして、決して賑々しいやうにはしなかつた。處が今日になると、立派な店、大きな店になればなる程、誇張した廣告をし店飾りをしてお客を吸引するやうにして居る。私も度々歸途、三越や白木屋などの前を通ることがあるが、其の華やかな店飾りに驚かされるのである。併し之れに依つて其の店が維持されることを思ふと、一入寒心に堪へないことを思はぬ譯にはいかぬ。

國民は華美贅澤になり、又かう云ふ誇張した、好奇心を唆るやうな店に依つて、其の華美贅澤は益々助長されて來て居たのである。然るに地震に依つて是等の總てのものが一朝に破壊され、燒き盡されたのは、國民に一種の天譴を加へられたのではないか？ 斯う言へば古風の學者のやうなことを唱へると云ふかも知れぬが、決してさうばかりでもあるまい。此の事に依つて實際一般の國民が氣を付けるのは、實に此の點にあるのではないかと思ふ。

國民は從來の華美、贅澤に對しては、十分に反省して居なければならなかつたが、併し國民は何かの機會を得なければ之れを自覺する事が出来なかつた。此處に地震が來て國民に一大衝動を與へた。故に國民は過去の誤つた思想傾向から目醒めて、着實穩健な歩武で進まなければならぬ。即ち破

壞され、燒き盡されたあらゆるものを建設しなければならぬ使命を擔はせられたのだ。老人は過去の經驗は多いが未來が少ないので、事を行ふに果斷でない憾みがある。若い人は之れと反對に前途のみを考へることから、果斷ではあるが過ちが出来易い。夫れ故老人は若い人の實行に過ちがない様に、お互ひに歩み寄つて事を行はなければならぬ。

斯う云へば私のやうな老人はどうかと云ふに、今回の震災で失敗したことがある。前に述べたやうにあの當日は事務所には私居たが、一體地震後には火災がないかどうかと云ふことを第一に考へなければならなかつたのであるが、夫れを左程深くも考へず、又よしやあつてもこんな大事にならうとは思はなかつた。そこで事務所の方は屋根がいたんだので、一時第一銀行の二室を借りて重要書類を其處に移した。之れは慶喜公の傳記を初め私の傳記を編纂中であつた爲めに、瀧野川から持つて行つて居た日記や往復の手紙などであつた。中には伊藤との往復の手紙などには却々面白いものなどがあり、其外陸奥、井上、後藤、山縣、木戸諸公のもあつたのに、全部を焼いて仕舞つたので實に残念である。其外穂積君が集めてくれた六百種もある論語を焼いたが、中には到底再び得られぬものもあつた。今思ふと餘りに智慧がなかつたと思ふ。最も經驗がある八十老人が第一番に智慧を出さなければならなかつたのに、それが出来なかつた。若しあの時其處まで氣が付いて傍の者に

云ひつけければ、船なりで運んでも十分餘裕はあつたのに、注意が足らなかつたばかりに空しく天物を亡殄したと云ふことは終世までの恨事である。一日の晩は東の空が赤くなつたので、火事は大きくなつたと思つたけれども、それでも第一銀行は焼けまいと思つて居たが、夫れが焼けたのだつた。之れを言ふのは愚痴とは思ふけれども實に残念でたまらない。

### 三、復興に直面した震災火災善後策

二日の朝阪谷君が来て、東京は大部分焼けて仕舞つた。若しも油断をすると大騒動になるかも知れない。兎角悪い奴はこんな場合に乗じてどんなことをするか知れないから、之れを警備する必要があらうと思ふ。社會の爲め老人の考へはどんなものであらうかと云つた。「安政の地震の時にはどんなことをしたか知らぬが、今政府に色々な希望を述べようとしても、内閣はどうなつて居るか判らぬ。併し其儘にも放つて置く譯にも行かぬから、兎に角内閣の人に云うて見よう。けれども私は方々を駈け廻ることが出来ないから總理大臣に會つて見よう」と云つて、内閣へ行つて總理大臣に會ひ、食糧と警備の必要であることを云ふと厚意は有難い、何分の處置をしようと思ふやうなことで別れた。

山本内閣が三日に出来るかと直ちに救護事務局が出来て、救護の方法を講じたやうな譯である。それから後に復興審議會なるものが出来たが、私は此の委員に選ばれ、又大震災善後會も出来てその評議員となつた。最初此の善後會は實業家のみで組織する積りであつたが、貴衆兩院の議長も評議員に入ることになつたので、所謂政治、經濟の二方面の人を網羅して、其の復興に資した譯で、私は及ばずながら努力した次第である。

要するに最も至難なものは、如何にして一日も早く帝都を復興せしむるかと思ふことである。中には尤大な計畫を樹て、これに由つて事を進捗せしめるがよいと思ふものもあつたが、斯かる非常に際して萬全を期さう、満足を得ようとするには甚だ考へものであつたらう。尤も是れ迄の東京は不規則の儘に進んで來たのであるから、歐米諸國の如く道路、公園、運河、軌道、上下水道等が完全でないで、之れを完全に爲め理想的の計畫を樹てることが、大變に都合がよい譯であつた。たゞ東京は焼けるには焼けても、全然白紙にはなつて居ないし又植民地の如く新たに計畫するのとも異なるから、丁度白紙の上に圖を引くやうな譯には行かなかつたのである。

私の考ふところに依れば、理想的の計畫は立派かも知れないが、都會は人間の住む所であるから單に理想のみ走つて、道路、公園などに大なる土地を使用する事などは、餘程考へものと思つ

た。殊に此の大計畫を實現しようとするには、大なる資金を要し、此の資金の負擔は何人がするかと云へば國民である。併し現在の處國民にはそれは出來兼ねる、若し強ひて之れを實現しようすれば借金せねばならず、それだけ國民の負擔が重くなることになる。故に如何なる計畫を樹てるにしても、國民の實力を考へなければならぬ。國民は富を得て立派になつて行くのに、金も無いのに計畫ばかり立派であつた處で仕方がない。分量に應じて計畫を樹て、國民に相當した金を借りてやるのが當然である。唯漫然として桑港はかうであつたから日本も斯うしなければならぬと云ふやうなことは、之れは眞正な智者のやることではない。

然らば市區には何等改正を施さず元通りにするとか、或ひは間に合はせの計畫を樹て、數年後には鼻のつかへる様な事でも、餘りに人智の發達を無視した淺墓な考へで、國民の實力を見ないものである。かゝる場合には須らく舊習に囚はれず、理想論にも陥らず、眞に國民の經濟と實力とを基調とした計畫を樹てなければならぬと私は確信して居た。

此の大震災で東京の大部分は滅亡したと云ふ有様であり、横濱、横須賀、房州の如きもより以上に甚だしい状態にあつたのである。特に各方面の中心であつた東京を燒盡したことは、自から經濟界に一つの缺陷を惹き起したのであるから、其處に變化を起さないと云ふことはない譯である。

大震災に際して政府は直ちにモラトリアムを實施したことは、銀行界から見ても又一般國民から見ても機宜の處置だと思ふから、政府の此の施政は亦やむを得ないことである。このモラトリアムも十月の一日を以て撤廢され、其の推移は如何様に變化して行くか和大いに心配したが、それも大した變化も呈しなかつたので安心することが出來た。若しも其の結果が不良であつたならば、金融に梗塞が來ぬとも限らず、金融に梗塞を免れぬとすれば、如何なる事態を惹起せぬとも限らぬと思ふと、なか／＼安心の出來なかつたものであつた。

次に大難關とも云ふべきものは、火災保險金支拂ひの問題である。保險會社の説明に依れば、保險契約高は二十億圓であるから、之れに對して到底十分な支拂ひは出來ないと云ふ。若し全額の支拂ひが出來ないならば、見舞金として數割若しくは一割を出すがよいと云ふことも言はれて居た。受取る方ではいくらでも多く取らうとするし、渡す方は渡すことは困ると云つて双方共に下らない、此様な事でも互ひに争ひをしたのは、會社側では法律を楯に取つて居て少しも情合と云ふものを考へないからである。併しながら、法律を形式的にのみ見て居たからとて會社の責任を免れると思ふのは大いなる間違ひで、若しも目前の利にのみ眩んで居ては、遂に保險と云ふものに對する一般の考へを危険にならしめるものである。又政府に於いても、雲煙過眼視して少しも構はぬと云ふこと



はいかぬ、何とか會社に向つて指示すると云ふやうな事にしなければならなかつた。尤も政府は會社が法律の下に働いて居るので、命令的にすることが出来ない憾みもないではないが、何時までも之れを放任することは出来なかつたのである。

實際保險會社は家屋ばかりでなく、物品もある。こんなことに依つて時日を空過しては、元の通りになるかどうか疑問になつて来る。地方から折角荷物が送られて來ても、荷物の取引が出来ないといふ結果となるのである。是れまで我國の海外貿易と云へば、横濱は輸出港であり神戸は輸入港であつた。而も横濱の重なる輸出品は生絲であつて、其の總額は六億以上であると云ふから、之ればかりでも容易ならぬことである。故に一日も早く火保問題の解決に政府も努力し、會社も理窟一逼にしない様にしなければならぬと希つて已まなかつた。

#### 四、震災の影響を受けた關係事業

更に社會的に觀察しても其の影響の甚大なるを嘆息せざるを得ない。維新後五十年間に形作つた諸設備も破壊され、燒盡された。そして破壊よりも火災が大なるが爲めに、燒盡力は破壊力よりも大なりと云ふべきである。就中惜むべきものは帝大の圖書館を燒いたことである、中には到底再び

求める事の出来ないものもあつたのは、文化の上に大いなる遺憾を感じる次第で、其局にある者が火災に對する注意を拂つたならば、此様なことにはならなかつたらうと思ふ。これまで斯様な點に對する取締りが出来て居なかつた爲めである。

自分としても事務所を燒いて重要な書類を燒き、又第一銀行が燒けないだらうと思つて、そこへ重要な物を移したが、それも皆燒いて仕舞つた。若し自分の注意が十分であつたならば、之れを船で運べば、其様な遺憾を残す様な事はなかつた。それに時間がなかつたと云ふのでは無いから、過去に富んで居る自分が氣がつかなかつたのは甚だしい事だ、自分が重要な書類を燒いて居ながら大學を責める事は出来ないといふ者もあるかも知れないが、自分が悪いから人はそれでよいといふものではない。誰でも悪い事は何處までも悪いといふはなければならぬ。

唯私として一つ嬉しいことがある。それは養育院である。斯う云ふと丁度自分の所有物でもあるかの様に聞えておこがましいが、永い間此の養育院の事に携つて居つたので、自分の物の様に思はれて、人に任せることが出来ないのである。數年前から大塚にある本院は狹隘になつて來たので、之れはどうしても郊外に移すことが必要である。殊に之を移轉すれば、市民は其の跡に住むことが出来、所謂市の擴張にもなるので、板橋に三萬坪の土地を求め、前年から工事に着手し、震火災の

年の秋には竣工して移轉が出来た事になつて居つた。大震當時は兎に角略々出来上つて居つたのに、本院は大震の爲めに半倒れになつたので、避難と同時に移轉をした。幸に怪我人の一人もなかつたのは私の非常に嬉しかつた處で、巢鴨の分院は破損もなかつたから怪我人もなかつた。尤も其中で一つ丈私とし、悲しい事は、房州の船形にある分院に、子供の中で肺の悪い者を收容して居たのである。その前には勝山の寺に收容して轉地療養をやらして居つたが、明治四十二年に船形に分院を作つて、此處には百二十人程の子供を收容して居るが、風光は明媚であり、氣候も大變によいので、此種の病氣には効能があつた。處が此處は地震が非常に激しかつたので、此の分院が倒壊し、之れが爲めに十人ばかりの死人を出したのは何とも可愛さうで堪らない。

二日に夜が明けると間もなく養育院の田中太郎君が来て、「本院は半倒れになつたから板橋へ移轉したが、怪我人は一人もない、巢鴨の分院は大丈夫」と云ふので悦んで居ると、十日ばかりたつてから、又田中が朝早く来て玄關に泣き顔をして立つて居て、私を見るとワツと泣くので何の事やらさつぱり解らない。そこで私は之れを叱つて、「孔子が喜怒哀樂色に現はさず節に當るを中と云ふ」と云つて居る様に、成丈心を落ちつけて餘り心を激しない様にせねばならぬと云ふと、私が悪う御座いましたと云つて前に述べた船形分院の事情を語つた。

養育院には又婦人慈善會と云ふのがあつて、毎回義金を募集したが、集まつたのは三萬圓で、之れで船形の分院を作つたのであつた。船形へは私も毎年行くので、其處の人達にも懇意になり、色話し合つた事もあつたのに、其處に其様な不幸が來た事は悲しい次第である。

其の外私の關係して居るものでは、高木兼寛氏が起し有栖川宮大妃殿下を總裁に仰いで居る慈惠會がある。學校も、病院も、事務所も焼けた。學校で直接世話をして居るものは日本女子大學で、此度の大地震で焼けはしなかつたけれども、大破壊をしたので、之れを復興するにもかなりの金を要した。此の大學を綜合大學にしなければならぬけれども、之れには殆んど百萬圓を要するのであるが、二三十萬圓しかないので困つて居つた。處が、近頃有力な寄付者、和田、森村匿名が出來て二四五萬圓寄付された。故に今二三十萬圓もあればどうにか綜合大學が出來ようと云ふ矢先に此様な事が出來て一頓挫を來した様な譯であるが、學校は近い中に開校される事になつた。東京女學館も世話をして居るが、それは宮内省の工部大學を利用して居つたのであるが、大破壊をしたので使用することも出來ない。處が幸にも帝室の澁谷にある地所を貸してくれると云ふので、半バラック式の建築にした。

理化學研究所で火を出したが、直ぐ消止めたので大事に到らなかつたのは幸と云はねばなるまい。

同所は近來ウキターミンで名聲を博して來て居る際に、之れを焼失する様な事があつては非常な打撃を受けるわけである。

國際聯盟協會は焼けたけれども、事務所は借り家であるから損はない、今は協調會に移つて居る。協調會は可なり多くの金を有つて居るので、社會的活動をするには都合がよい。それに火災にも地震にも被害がなかつたので損をしなかつたが、近所の人達が避難したものが多かつた。併し何と云つても焼けなかつたのは非常に幸福であつたと云はねばならぬ。併し決して危険でなかつたとは云へぬ、幸に勇敢なコックが二三人居つてバケツに水を吸んで、窓についた火を消し止めたので、それで被害を免れたのであつた。

此の災害に對しては情報、病院、救助と云ふことに就いて仲々骨を折つて居る。従つて其の費用の如きも仲々多い額になつて居る。けれども焼けた事に比べると都合も宜しいし、それに斯かる場合には、出来るだけ活動して損が出来たとて仕方がないと云つて居る様な次第である。それから經濟界の方で云ふと、第一銀行、澁澤倉庫、東京貯蓄の如きは焼失してしまつたので、其の受けた損害も少くないが、併し斯くの如き損害は殆んど一般的と云つても差支へないのであるから、止むを得ないものと思ふより仕方がない。

## 五、物質文明の弊と精神的復興

以上の如く私一個人から見ても、其の災害の各方面に及んで居ることが判るから、國民は何もかも困難である譯である。幸に生命が助かつた國民は震災に就いて改心することが出来れば、禍を轉じて福となすことが出来る。史記蘇秦傳の「古の善く事を制するは、禍を轉じて福となし、敗に因りて攻を爲す」の章句から取つたものである。併し之れは僥倖的に福を得ると云ふことではない。即ち何物か落ちて來て頭でも打ちこはされるのかと思つたら、それが財布であつたと云ふやうなことではなく、禍に遭遇したが、努力して之れを切り抜けると云ふことでなければならぬ。

其後アメリカ及びアメリカの赤十字社の人々が、此の震災に際してよく世話をしてくれたので、謝禮の爲めに招いた。徳川公は之れに對して今回アメリカ及び有志團體の至り盡せる厚意を謝すと云つた。私にも何か述べよと云ふ事であつたから、

「五十年の物質文明を打ち壊されたのは、天災であつて如何ともすることが出来ない。斯くの如き事物の進歩を見ることが出来たのは米國のお蔭であるが、又之れに依つて國民が浮氣になつたことがないでもない。今回の深き御同情に對し、老人の私がさういふとよくないやうであるが、

經濟は單に利益のみではいけない、徳義によらなければならぬ。若し利益のみを重んずれば、國民に質實、純朴の氣風を進めることが出来ない。處が此の物質文明の輸入に依つて經濟に徳義のないことを憂へる。世の中の事物は形を受け入れることは容易であるけれども、精神を受け入れることは却々六ヶ敷い。山中の賊を破るは易く心の賊を退治することは難かしいと云ふが本當にさうである。

今や國民と共に考究してゐる復興は私の任務とする處である。彼の家を立派にする。道路を廣くすると云ふやうなことは物質的復興である。勿論物質的復興は必要なことに相違ないけれども、こればかりでは到底其の復興を期することは出来るものではない。換言すれば物質的復興よりも人心の復興も第一としなければならぬ。米國の諸君も之れを是とするものと信ずる。之れを禮の言葉に代へる。』

と云つた。此の大變化の機會に於いて精神の復興を期しなければ、如何に物質的復興を計つても眞正なる文明を實現することは不可能である。佛を作つて魂が入らずと云ふことは其間の消息を物語つたものである。私は此機に望んで、國民に精神的復興機運を助長せしめなければならぬと強調した次第であつた。

## 五三、米國移民問題と私の立場

### 一、日露役の調停とルーズヴェルト

移民問題は明治三十九年から四十年にかけて起つたのを最初とするのである。尤も其の以前に於いて日米の國交に就いては、色々なことがあるにはあつたけれども、日露戦争に於いて日本が露西亞に勝つてからのことである。米國に居る日本人は別に此の戦争には關係はないが、日本が勝つたと云うて肩で風を切る様にして歩いた。其の當時大統領であつたルーズヴェルト氏が、日露兩國の間に立つて調停をしたが、在米日本人の間には此の行動に對して多少不滿の感情を有つ者もあつた。此様な事から彼の學童問題が起つたのであらうと思ふ。日本の移民は普通の移民とは少しく異つて居つて、出稼ぎと考へてゐる。それで金が貯まると國へ歸つて仕舞ふから、其國を愛する國民ではあるが、米國を愛する國民ではないと思つてゐる爲めに、こんな國民はなくなと思はれるのも無理はないのである。

米國には農業労働者としてヨーロッパ、アフリカ、印度から多數入つてゐる。其處へ東洋人が入

つて競争するのは、丁度ある商品がある處へ、同じ商品が入つて来て競争するやうなものであるから、日本の労働者は他の多數の労働者から嫌はれるのである。此の感情は加州の近傍が特に甚だしい。故に政治省、領事省及び國民同志の諒解を得てそれが緩和を圖らうとした。當時の外務大臣は小村さん、總理大臣は桂さんであつたと思ふ。此の二人は別懸であつたからよくそれに就いて話したことがある。

それから商業會議所に力を入れて貰ふ爲めに、六大都市の商業會議所の聯合の下に内務大臣と相談して、加州及び太平洋沿岸の八大商業會議所に手紙を出して、一遍日本に遊びに来るやうにと云つてやつた。これは明治四十一年で國民外交の端緒を作つたやうなものである。私は明治十一年から同三十九年まで東京商業會議所の會頭であつたが、何時までも會頭になつてゐるものもどうかと思つて之れを中野武營氏に譲つた。併し長い間會頭をやつて居つたから、重大問題に對しては私は後見するやうになつてゐたので、商業會議所聯合會には之れが會長のやうな事をもせねばならなかつた。故に米國八大商業會議所議員を案内する仲間になつて下廻りをした。併し聯合會を代表する位置に立つてゐたので自ら私の名が知られ、關係も深くなつて來ると云ふやうな譯で、今日日本へ來る米國人にして私を訪ねて來ると云ふのは、かうした關係から米國に知合ひが多くなつたからであると思ふ。

と思ふ。

明治四十二年に反對に米國から招かれて團體旅行をしたことがあるが、之れは渡米實業團と稱し主として商業會議所議員であるが其他を集めて五十三名位になつた。この渡米は丁度前後四ヶ月で米國にある事三ヶ月、一ヶ月は旅行に取られた。此の一行は米國から非常に歓迎されると同時に日本を諒解するところもあり、日本も亦米國を理解するところであつたので、其の目的を部分的に貫徹することが出来、又阻隔する部分ある事をも知り得た。習慣が異ふといふのが色々の障礙をなして、向ふで嫌ふことをこつちで平氣でやる、例へば尻を捲くる、立ち小便をする、又日本人は一人であるところ程でもないが、大勢になると我儘になる、所謂公德心に缺けて來る、婦人に對する態度もそれであり、又仕事をすると子供が泣いても捨て、おく、これは勉強であつても米國人から見ると野蠻だとされる。こんなことが數重なつてゐるところへ以て來て政治家が煽動するからたまらぬ、政治家は多數労働者に排日問題を利用して榮達しようとする。困つたものと思ふけれども、憎いと思つてゐる者が多數であると此様なことになるのである。

殊に或る事柄になると極りがつかないものがある、所謂二重國籍と云ふのが之れである。米國では其國に生れたものは米國人といふ屬地法であるが、日本は親に屬する屬人法である。それに日本

人は兵役に就く、人が育つと鐵砲を持つやうになる、此位憎い奴はないと思つてゐる。先年一部は解決がついたが、之れは却々容易ならぬ問題である。

教育に於いても言葉が異ふから困る、親は英語を使ふことが出来ぬから日本語で間に合してゐるが、子供は英語であるから結局兩國語を教へなければならぬ。英語にするとよいけれどもどうもさうは行かぬらしい、爲めに幼稚園、小學校などでは日本風に教育をするが、それでは米國では困ると云ふ。若しも日本が米國の云ふ通りにでもなると、直ちに賣國奴だと云ひ、米國では日本は米國を占領するものだ云ふ。大正十年ターロツクと云ふところで人や荷物を自動車に積んで日本人を逐ひ出したことがあるが、米國にも此様な氣早やな者も居る。

明治四十二年に多數で行つて各地を周つたので人氣を和らげたけれども、多數の勞働者仲間の排日が止んだのではない。それに政治家は人氣を取る爲めに日本人を排斥することが多い。大正二年加州方面で土地法を制定し、移民に對して土地を制限しようとして、地方制度として制度省から日本をいぢめることゝなつた。此時は困つた、實に困つたのである。私は病氣であつたので、中野氏が骨を折つてくれた、そして添田博士、神谷忠雄氏をたのんで商業會議所から派遣し、土地法を緩和しようとした。多少は修正せられたけれども、遂に土地法は施行せらるゝやうになつた。

## 二、日米關係委員會の意義

最近までは移民問題に就いては一時的であつて、根本的解決ではなかつた。紳士協約の如きものでなく、もつと堅い條約を持つて居らねばならぬ。併し此方で思ふ通りには先方でならぬし、先方で思ふ通りには此方でなれぬ故、何か常設的機關を設けて日本人の事態を知り、又向ふにも知らせやうではないかと云ふことを、添田氏にも話し又時の外務大臣にも相談した。

大正四年にはサンフランシスコにパナマ運河開通記念博覽會が設けられた。此の博覽會には日本も參加することになつて居たが、之れは人氣をなほす好機である、殊に加州に近いサンフランシスコであるから効果もあると思ひ、又斯う云ふ問題は國際的にすべきものであると思つたので、當時の農商務大臣である大浦さんに奨めたことがある。處が大正三年に世界大戰が始まつて、英佛の國は此の博覽會へ出品したものが至つて少いに拘らず、日本は此方から援助も出来、出品もしたので、モアー氏を首腦とする有力者の團體から、重立つた人士が来るがよいと云ふことであつたから私や中野氏が行つて、此時は効果が多かつた。此時私はこれまでの日米關係を説いて、常設的機關を設け、双方相聯絡し通信し合ひ、協議し合つて、國民にも政府にも諒解せしむる爲めに、先方に

二十二人の委員を置く處の日米關係委員會を設けることを相談した。此時私の知つてゐる人では、日米關係委員であり、商業會議所議長であるアレキサンダー氏である。此の委員會の意見は一致したけれども、

『これのみではならぬ、即ち移民に對して米人は如何に、日本人は如何にと云ふやうに、其の公正する處を一致して置かうではないか、先づ日本側から輿論のあるところを聞き度い。』と云ふのであつた。そこで私は

『日本の輿論として茲にお答へすることは出来ない。日本人多數の意見を一致させる事は六ヶ敷い。議會の意見でさへも輿論といふことが出来ない、唯茲に輿論は眞直な事、正しきことでなければならぬ、正義は最後の勝利であるから、此の眞直な事、正しきことには、多數は遂に同意するものである、これが輿論となり得るものであることは私は茲に明言することが出来る。』といつた。

『世界の平等から説けば、紳士協約の目的に副ふことが出来る。此の意味からすれば、土地を多く有つてゐる人口の稀薄なる米國に、土地が狭く人口の多い日本が移民を送るのを嫌ふ譯がないと申したい。併し廣い範圍から政治省の秩序、安寧を圖る上から、無制限に移民を入れるもの

でない。紳士協約は此の意味に於いて出来たものであり、日本がこれを固く守ることは國民の義務であると信じて居る。然るにこれを思はず、自然の道理が斯うであると云々して、國々の支配する條約を破つてはならぬ、この見地から廣い國に直に門戸開放、人類の平等を絶叫すべきでない、即ち紳士協約は政府も國民も之れを尊重して違背あるべきでない。故に地位を以て世に立つ人々は、之れは自然の道理であるからとて、唯々服從的に従ふばかりでなく、遵奉すべきである。此處に組立てた委員會に於いても紳士協約を守つて行くべく、其の度合に於いて、忠恕、博愛、平等を根幹とすべきである。

唯茲に注意を要するは、東西兩文明の始めを異にしてゐるから、之れが爲めに種々なる誤解を來たし易い、即ち東洋では儒道、神道に依つて教育されてゐるに反し、西洋では基督教に教育されて居る様に教育が違ふから、東西兩洋の文明の接觸する兩部が誤解、異議を生ずる故に、茲に誤解を説き、情意を疏通さし度いのである。殊にかう言へば國々の政治家を誹るやうであるが、政治の手段に利用したり、操觚者は誇大に吹聴したりするので、人を過まつたり、激越せしめたりするから、遂に誤解を生ずるに到るものである。故に政治家、操觚者は此處に深甚なる注意を拂ひ、國民を冷靜にして誤らしめざるやうに努力すべきである。此事にして宜しきを得れば、兩

國間の面倒が起らないばかりでなく、國交の上にも親善を來すべきである。これが委員會の趣意である。』

と云つた。さうして之れに對して皆喜んで居たのである。最近一人の友人が來ての話に依ると、アレキサンダーは此の排日問題に就いて非常に心配してゐると稱して居た。同氏は溫和で人情が厚い人で考へも優れてゐるから期待するところが尠くない。實に日米問題は一時的解決ではいけないから、兩國政府に於いては委員を作つて協議し、地方的感情も聞き、調査もして、其處に根本的解決案を作るがよいと思ふたのである。

### 三 排日法案の通過と經濟的影響

私は多年國民外交の必要を提唱して來たのである。日米問題に關しては單に移民問題に限らず、日米間のあらゆる問題に就いて、私は一國民として多年微力を盡して居る次第であつて、排日案の提出せられぬ以前から、前申す通り私は及ばずながら出来るだけの事は骨折つて來たのであるが、其の甲斐もなく遂ひに排日移民法案の通過を見るに到つたのは、誠に残念な事である。私が日米協會及び日米關係委員會の創立に盡力したのも、畢竟彼我の親交を増進せんが爲めに外ならなかつた

大正十三年の排日案問題の如きも、曩に政府當局と打合せの上、大正十二年の震災當時、米國及び米國民から多大の援助と同情とを受けたのであるから、其のお禮旁々、民間から金子堅太郎子か或ひは他の適當な人物を特派しては怎うかと建言し、場合に依つては私が老軀を提げて渡米してもよいと考へて居つたのである。そして實際米國の有力者と接觸して、移民問題に就いても、人道上又は國際情義の上から大いに融和を圖るやうにしたならば、幾分効果があるだらうと思つたのであるが、民間有力者の渡米説が米國新聞に發表さるゝや、埴原(正直)駐米大使から外務省に電報があつて民間有力者の渡米は却つて問題の解決上不利であるから、見合せる様にした方が得策であらうとの通牒に接したので、結局此の計畫は沙汰止みとなつた次第である。

斯かる事情であつたから、私共は埴原大使の努力によつて相當の効果を收め得らるゝ事と思つて居つたのであるが、其後頻々として傳へらるゝ電報は悉く悲觀材料のみであつて、遂ひに上下兩院の通過をさへ見るに到つたのである。此の排日案の通過は日本にとつては面目丸潰れであつて、實に遺憾千萬であると痛嘆に堪へない。私の考へでは問題がドン詰りに到らぬ前に、日米兩國政府が任命する特別委員會を設けて、互ひに十分の研究をなし、無理のない解決策を見出す様にしたいと希つてゐた。其の爲めには大正十年に渡米した際に、米國の民間有力者とよく相談の上、政府の



任命する日米委員會を設ける事が最も適切であるといふに意見一致し、私は此の協定に基いて日本に歸つてから、日本政府に對して其の諒解を求むることに努め、一方米國政府に向つては、米國の日米關係委員より國務卿ヒューズ氏に運動したのであるが、遂に其の實現を見るに到らざるに先立つて、排日移民法案通過といふが如き事態を見るに到つたのである。既に排日法案が上下兩院を通過して確定議となつた以上、急速に之れを改正するといふ事は困難であらうが、今後日米問題の根本的解決策を講ずる爲めには、どうしても前に述べた如き日米委員會の設置が必要であると信ずるを以て、此の運動を徹底せしむる爲めには、私は何時でもアメリカに出かける決心である。

さて此の排日法案を經濟的に考へて見るに、之れが爲め直接直ちに我が輸出入貿易に影響する様な事は萬々ない筈である。又米國民としても、日本の品物に對しボーコットをするといふ様な無法な舉に出づる愚もあるべきではないが、今後何かにつけて壓迫し、掣肘せらるゝやうなことがあると思ふ。元來、アメリカといふ國は正義人道をモットーとして居るが、其の國民性は何時でも極端に走りたがる傾向がある。それに非常に自尊心の強い國民で、米國及び米國人を凡ゆる意味に於いて世界一と自信して居るのであるから、此の國民性をよく諒解しないと、動もすれば誤解を招く基となる。されば日本人は徒らに感情に驅られて盲動する様な言動を慎み、米國民の正義人道の良心

に訴へて圓滿なる解決を見る様に努力する必要がある。暴に酬ゆるに暴を以てするが如き態度に出づるに於いては、一層兩國國民の感情が阻隔し、將來に於ける解決を却つて困難ならしむるに到るであらう。

それに米國は極端なる保護政策的の國である。一例を挙げれば歐洲戦後自國の船舶の過剩に苦みや、外國船と極端なる差別待遇をなして之れを保護すると云つたやうな遣り方である。されば此の機會に於いて、日米の經濟關係に支障を來さしむるやうな思ひ切つた事をしないと限らない。之れは私の杞憂に過ぎぬかも知れぬが、米國の過去に於ける保護政策の實例から推測すれば、滿更根據のない心配ではないと思ふ。殊に日本は米國から輸入を仰がなければならぬ品物が澤山あるけれども、米國としては日本からでなければ需められぬと云ふ様な必要品は生絲位のものであつて、其他は殆んど取立て、云ふ様な品物はないのであるから、排日法實施が直ちに經濟界に大なる影響を惹起しないとしても、日本としては經濟的見地からしても、大いに考慮しなければならぬと信ずるものである。

尙ほ此の排日移民法案の通過が、果して全米國民の眞意であるか否うか、之れは甚だ疑問である。私は現に日本に對して非常に好意を有して居る多數の知己を有して居るし、是等の人々以外にも米

國の建國精神たる正義人道の立場より、正論を主張して居る國民が多數居るのであるから、結局一部の政治家に利用せられたものではないかと思ふ。米國に於ける輿論の代表とも見る可き新聞の論説を見るに、ハースト系以外の新聞は何れも正論を主張して、上院の態度に反對を表示して居る一事に徴しても、國民全體の意志による排日でない事を推察することが出来る。されば吾々日本國民たるものは、一面に於いては經濟的見地より深甚なる考慮を要すると共に、他の一面に於いては他くまでも米國人の正義心に訴へて、差別待遇の徹底を期する様にしなければならぬと信ずる。

#### 四、眞の親善は國民外交に俟つ

私の信ずる處によれば、眞の日米親交を期するには、國民と國民との隔意なき握手によつて初めて成立つと思ふ。如何に政府と政府とが美麗なる外交的辭令によつて相結ばうとしても、彼我兩國民が互ひに理解し合はなければ、到底國交の圓滿を期することは出来ない。此の意味に於いて私は多年國民外交の必要を説き、自から微力を顧みずに、日米兩國民の親善に就いて盡瘁して來たのであるが、今日は此の國民外交が特に必要な秋である。言葉を換へて言へば、外交的國民總動員を要する重要な時機である。但し外交的の國民總動員と云つても、決して國民が擧つて米國の非違を

糾弾し、戦争も亦敢へて辭せずといふ様な硬論を主張せよといふ意味ではない。私は平和主義者であつて、従つて武力によつてまで此の問題を解決しなければならぬとは思はない、切に排日問題が圓滿なる解決を告ぐる事を希望してゐる。此の圓滿なる解決の時期を促進する意味に於いて、外交的國民總動員の必要を提唱してゐるのである。此の問題を圓滿に解決するには、どうしても國民と國民との眞の諒解、眞の融合眞の握手が必要である。此の意味に於いて國民は外交的に眼醒め、所謂國民外交の實を擧げて、日米兩國の國交を圓滿に復せしめたいと思ふのである。又政府としても外交に於いても、國民の輿論が背景とならなければ、力強い外交が行はれないのは事實であるから吾々日本國民は不幸にして誤られたる一部米人の誤解を解く爲めに、米國人の正義人道心に訴へて、其の反省を促すことも必要であるのである。

元來此の排日問題は一部米國人の誤解もあるが、前にも述べたやうに、中には排日問題を政治に利用してゐる人、即ち公正の見地からでなく、選舉其他に於いて自分の立場を有利ならしむる爲めに、殊更に之れを提唱してゐる人もある。日本及び日本人を誤解して居る人々に對しては、よく日本及び日本人を理解せしむる様に努めたならば、恐らく釋然として親日的態度に一變するのであらう。或ひは親日とまでは行かなくても、少くも惡感を懐くやうな事は無くするであらう。斯くの如

く米國民の大部分が眞に日本及び日本人を理解する様になれば、如何に一部の野心家が排日を振りかざしても、米國の輿論は之れを許すまじく、結局移民問題も圓滿なる解決を見ることが出来るだらうと思ふ。尙ほ此の排日移民法案の通過は、大統領選挙と餘程密接な關係を有して居た模様であるから、早急に解決をなすことは或ひは困難であつたかも知れぬが、當時の駐日米國大使ウツツ氏はよく日本及び日本人を理解して居り、此の問題に對しても非常なる同情を以て米本國の誤解を解くに盡力され、私共の希望して居る日米委員會設置に就いても衷心より賛成されて大に骨折つて居られた。斯う云ふやうに國民外交と外交官の盡力、斡旋とて、或ひは多年切望して居る日米委員會の設置が、實現し得られるかも知れぬと私は一縷の希望を懐いてゐる。其曉に於いては、お互ひに隔意なき意見の交換と正しい理解に基いて、無理のない解決が出来はしまいかと思はれる。

正義は何時の場合でも最後の勝利者である。米國の上下兩院が感情に驅られてか、選挙に利用しようとしてか、兎も角不條理なる排日移民法案を可決したのは遺憾千萬であるが、全米國民の輿論でない事だけは明かであるから、全然失望するには當らぬ。現に新聞の論調を見ても知らるゝ通り米國には正義人道の公平なる見地より、日本の立場に同情して居る人々も尠くないから、應て是等の正しい輿論が具體化する時機があらう。私は其日の一日も速かならんことを切望して止まぬも

のである。

それにつけても目下の内外多端の重大時局に際會して、國民は舉つて國力の充實を期する事に精進しなければならぬと思ふ。國力が充實して居らなければ、動もすれば外に侮りを受ける。然るに國內の状態を見るに、政治家は徒らに内争を事として、外を顧るの暇なき有様である。又實業界にしても、蝸牛角上の争ひを事として眼を大局に注ぐことを怠つてゐる憾みがある。汽船會社にしても、銀行にしても、紡績業にしても、將た電力會社や砂糖會社にしても、事業合同の餘地は頗る多いのである。而して一個人乃至一會社の利害より打算せず、又私情に囚はるゝことなく、國家社會といふ高所大局より誠意を以て之れに當る時は、多少の困難な事情があるとしても、事業合同は十分に行ひ得る可能性があるだらうと信ずる。言ふまでもなく今日は一郡一村が單位でなく、國家が單位であり、且つ世界は共通である可き筈である。此の意味に於いて私は今日の重大時局に際し、國民に對して世界人としての國民性を涵養せんことを切望すると同時に、禍を轉じて福となすの誠意努力を望むものである。

## 五四、先帝陛下の東宮時代を偲ぶ

### 一、我帝室と西洋の皇室

先帝陛下が崩御遊ばされたに就いて、特に感想を申述べることは、誠に畏れ多い極みであるが、此際静かに過去の日を顧み、大正天皇の御事に關する思出を辿り、奉悼の微衷を披瀝するのも敢へて不敬ではあるまいと思ふ。

私は皇太后陛下には幾度か拜謁の光榮に浴したが、大正天皇には私の地位や私の事業の關係上其の機會が餘りなかつたので、陛下に就いて知る處は極めて少ない。たゞ東宮にあらせられた時のお噂を、親しくして居た伊藤博文公から聞いた事があるのと、早稻田大學に行啓あらせられた折、咫尺して御下間に應じたことがある程度に過ぎぬ。

伊藤公は明治大帝から非常な御親任を受け、國家の重臣として盡された方であるが、公と懇親であつた私には、帝室の現在とか將來とかに關する公の考へをよく話された。殊に明治大帝の御事蹟や御日常のことは屢々語られた。勿論明治大帝は聰明にましく、臣下の爲す處を安んじて

御覽になりながら、御自ら政務を嚮はすと云ふ風であられたと承つて居る。私は別に君徳に就いて御尋ねした譯ではないが、伊藤公から斯様な御噂を再度ならず聞かされたものである。私はよく伊藤公に慶喜公の御話をしたので、それと關聯して明治の維新や、明治大帝御平素の御様子などを承るやうになつたのであらう。時を確かに記憶せず、御幾つ位であらせられたかも判然せぬけれども、當時東宮で御在になつた大正天皇の御事をも拜聞致した事がある。伊藤公は、

「我が帝國は國體の關係上、どうしても聖賢の君主が相繼いで出て頂かなければならぬ。處で陛下の聖明にましますことは申すも愚なことであつて、我が國の爲め眞に慶すべき極みであると常に思つて居る。而して又有難い事には東宮殿下（先帝）も亦誠に御憐愍であらせられるのであつて、寧ろ餘りに御憐愍に過ぎさせられはせぬかと拜する位である、それに就いて斯様なことがあつた。殿下（先帝）は西洋の皇室のことを御承知と見えて、或時我が帝室のことが餘りに鄭重に過ぎはしないか、今のまゝでは尊嚴に失して居るやうに思はれる。西洋の如く簡易にしてもよくなるまいかと仰せられた。私はそれに對し「御尤もの仰せではありますけれども、日本は古來から禮儀の頗る鄭重な國柄でありまして、今之れを簡易率直に致しますと、大體整頓した國風を破る虞れがあります。鄭重と云ふことを單に外面的な取扱ひのみであると、お考へ遊ばすやう

に存じますが、鄭重と申すことは、日本の誠によい風習になつて居りまして、寧ろ簡易に勝るものであります。殊に帝室の御事に關しては、尊嚴に致すことが必要であります。」と諫言がましく進言した事があると語られた。私は之れを聞いて、成程重い位置に在る人の、君に仕へるにはさうなくてはならぬと感じたのである。

## 二、經濟界の事に就き御下問

其後明治四十二年、私が歐米を漫遊して歸國した時分であると思ふが、未だ東宮にましました頃のこと、一日大隈侯が御願ひして早稻田大學に行啓を仰ぎ、學校の全部を御覽に入れた事がある。先帝陛下は東宮として大學の各部各科を限なく御巡視になつたが、其時私は學校の關係者として御側近く侍することが出来た。御巡視後午餐の際も陪食の光榮を得たが、其時は主人たる大隈侯の右に時の東宮殿下(後先帝陛下)が御着座になり、侯の向ふ側に私が年長者と云ふ意味で席を與へられたから、私は東宮殿下と斜向ひになり親しく拜したのである。此時『濫澤は幾つだ』とか、『若い』とか、『丈夫』だとか雑談を交してゐてになつたが、大隈侯は『濫澤を優しい老人だと御覽になつて居られる御様子であります、彼れは中々物騒な男で、討幕軍を起して天下を覆へさうとしたこ

ともあるので御座います」など戯談であるが、酷い批評をしたものだから、『さうか、それは怖いネ、然し今はさうでないだらう』と笑つて仰せられ、私から『御安心下さいませ。今は大丈夫で御座います』と申し上げたこともあつた。

それから御食後、溫室でお茶を召上つた折に、私もお伴した處、お附の方が『御遠慮なく御話をなさるやうに』と云ひ、先帝も傍に空いた椅子があるのを御覽になつて、『掛けたらよからう。私は前に何處かで濫澤に會つたことがあるやうに思ふ』と仰せられ、尙ほ『經濟界のことに就いて尋ねたいが、今日の事態はどう成るのであらう』と御下問があつた。當時は日露戦争後の一時的な好景氣の後を享けて、不況が繼續して居た時期であつたから、特にさう云ふ御下問があつたのであらうと思ふ。其處で私は『日本の事業は總じて基礎が強固でない弊があります。よく踏みしめて居ない嫌があります爲め、動もすると崩れ易いやうであります。併し場合によりましては、基礎を鞏固にしないで進まねばならぬこともあります。故に個々の事業に就いて考察致しまして、此事は好いから進める、これは悪いから壓へると云ふやうにしなければなりませんから、一概には申せませぬ』と申上げると、『それは今どうすればよいか判らぬではないか?』との仰せがあつたので、畏れ多いことではあるが、申し上げたことを御理解遊ばされたこと、拜察した。そこで私は更に『それ故如

何にして適當な措置を執るべきかと云ふことを申上げるのは難しいのでありますが、今日としては退嬰的にならぬ程度に緊縮して整理すべき時代であると思ひます。上滑りしないやうに注意せねばならぬと信じます。併し日本はどうしても歐米に較べて、後から進んで居ります關係上、驅足で行かねばならぬ時のあるのは已むを得ませぬ。でありますから、積極的に出ることを一概に悪いと批難することも出来ませぬ」と、大要右の通り叮嚀に申上げた。するとよく御理解になつた模様であつたから、誠に御賢明にあらせられると拜したのである。

私が 大正天皇に就いて知る處は以上の通りで、要するに先帝は明治大帝の遺された大事業たる新國家の經營を御繼承遊ばされ、益々日本の國威をして世界に發揚せしめられた。たゞ御壯健にあらせられなかつた爲め、御思召も完全に御遂行遊ばすことが御出来にならなかつたかと拜察して、畏れ多くも遺憾に堪へないと存じて居る。

私としてはなほ申述べたいことも少なからずあるが、事實に觸れた點のみを些か御話した次第である。

## 五五、大都市の計畫

### 一、體育と德育の修養

我國に於ける商工業は、幾度の變遷を経て今日の隆盛を來すに到つたのであるが、商工業の發達に伴うて、人口が著しく都市に集中し、従つて大都市は非常な勢ひを以て膨脹した。其の一面に於いて農村疲弊といふ問題も起つて來るが、之れは扱措き、元來都會生活には自然の要素が缺けてゐる。而も都會が膨脹すればするほど、自然の要素が人間生活の間から缺如して行くのは、免れ難い現象である。自然の精神上に及ぼす感化及び肉體上に與ふる効果に就いては、今更贅言する必要はないと思ふが、都會が發達して自然の要素が缺乏する結果、道德上に惡影響を及ぼすばかりでなく肉體上にも惡影響を來して、健康を害し活動力を鈍らし、精神は萎縮して仕舞ひ、神經衰弱患者が多くなる。之れは人爲的に將た物質的に發達して來た都會の避くべからざる缺陷であつて、大都市に不良少青年の輩出するのも道德的頹廢と不健康とが齎らす都會生活の產物と謂はなければならぬ。然るに都會と云へば一も二もなく好い處だと思ひ込み、都人士も農村の人も、押しなべてさう考へ

る事を當然とする様になつたのは大なる誤りであつて、是非とも反省する必要があると信ずる。話はちよつと側路にそれたが、人間は到底自然なしには生活出来るものではない。人間と自然との交渉が稀薄になればなるほど、之れを求むるの情が強烈ならざるを得ないのは當然の事である。近年、東京大阪等の大都市生活者にして郊外生活を營む人の多くなつたに就いては、一面に於いて經濟上の理由もあるけれども、主として都會の生活に堪へ切れなくなつて、自然に親しむ欲求からである事は争はれぬ事實である。都會の最も發達してゐる英國などに於ては、餘程以前から都會生活中に自然を取り入れる事に就て苦心して居るが、年々人口の増加する大都市に自然を取り入れることは難かしい。そこで二十年計り前から田園都市といふものが發達して來てゐる。此の田園都市といふのは、簡單に申せば自然を多分に取り入れた都會の事であつて、農村と都會とを折衷したやうな田園趣味の豊かな街をいふのである。私は東京が非常な勢ひを以て膨脹して行くのを見るにつけても、我が國にも田園都市のやうなものを造つて、都會生活の缺陷を幾分でも補ふ様にしたいものだのと考へて居つた。

## 二、田園都市の創設と都市集注の弊害

御承知の通り私は大正五年に實業界を全く引退し、餘生を公共事業のために献げる決心をしたので、其の後は一切營利的の事業には關係せぬが、此の田園都市については自から其の衝に當らぬまでも、どうかして實現したいものと思つてゐた。それで敢て私が主唱したといふ譯ではないが、機會ある毎に此の意見を述べて居つた。處が時代の要求でもあらうし、又幾分か私の説の反響もあつたと見えて、追々と同じ様な意見が行はれるやうになり、大正七年頃に至つて同志の間に田園都市を造る相談が成り立つた。私は實業界を引退して居るから直接田園都市會社の仕事には携はらぬけれども、萬事について相談相手となつて及ばずながら力添へをしたのである。會社が創立する同時に現在の土地を選定して田園都市計畫を進めたのであるが、會社に關係して居る秀雄（澁澤子爵令息）なども英國に於て田園都市について實地視察研究をなしたので、是等を參考として我が國情に適合する様に計畫し、小公園や運動場を始め、充分に自然の要素を取り入れる様にしたが、更に都市との交通の便を期するために、姉妹事業として目黒蒲田電鐵會社を經營し、漸次發達して今日稍々完整の域に達した。理想から言つたら未だ不足な點もあるだらうが、兎も角、此の會社の創設

によつて我が國に於ける田園都市の發達を促し、其後、此の種の計畫が他にも行はれ、郊外に大學町のやうなものも出来るやうになつたのは、健康上から云つても、教育上から云つても、思想上の感化といふ見地から見ても、頗る悦ばしい現象と言はなければならぬ。

厨川白村氏は曾て其著近代文學十講の中に都市集注の弊害を論じて居るが、頗る適切であるから左に採録する。(編者)

自然科学の進歩に伴ふて種々の機械が發明せられた結果、商工業は著しく盛になり、農業の數は漸次勢力を失ふに至つた。即ち製造機械や交通機關が發達して人は多く田舎を去り都會に集るといふ有様である。殊に田舎者の内でも教育あり活動ある者が、自由な發展と享樂を望みて都會に出て來るから、都會は益々繁昌するのみならず、近代は各國皆中央集權を重んずるために首府益々繁華となり、他の小都市も漸次重要な位置に立つやうになつた。實際上の都會に於ける人口集注は、最近歐洲各國に於て統計が明かに示す所の現象である。倫敦の人口が最近に於ける激增の結果、蘇國全體のそれよりも少くなつた如きは其の一例である。云ふ迄もなく都會は生存競争の最も激烈な所で、所謂塵芥萬丈の巷に奮起して成功を求むる人は、過度の刺戟の爲に疲勞一

層甚だしく絶えず興奮して居る。今迄は田園の清く静かな生活を送つてゐた人も、人口稠密の地へ來て煤煙に汚れた空氣を吸ひ、鋤鋤を棄て、商工の罪惡の途に踏み込む仲間に入るが爲に、自ら體質の衰弱するは勿論一般に都會の死亡率全人口の平均よりも四分の一だけ多いさうだ。狂者病人の類は増し人が皆早老になるのも、皆都會生活から來る被害の結果である。殊に物質的進歩の著しい爲め生活状態が益々自然と遠ざかつて人工的になり、歩くところも電車、少し寒くつても暖爐といふ風になり、身體はおのづから天然に對する抵抗力を減じ、少しの事にも健康を損ずるやうになつて、神經のみが益々鋭敏になる。朝から晩まで視神經や聽神經に受ける刺戟も、之を田舎や或は昔の時代に比すれば、烈しさに於て實に數十層倍であらう。看板、廣告の強い色、白熱電燈の光、電車の響、器械の運轉する音、凡て外界から絶えず強烈なる刺戟を耳や目に與へる。實際都會病の原因は單に烈しい生存競争ばかりでなく、神經に及ぼす外界の刺戟が有力な原因をなして居る事も疑を容れない事實である。これは要するに都會は近代文明の恩恵に浴すること最も大なると共に、其の弊害を受くることも亦最も甚だしい場所である。



### 三、田園都市及目蒲電鐵の業績

澁澤子爵の熱心なる唱導によつて實現された田園都市の現況はどうか。附帶事業とも稱すべき目黒蒲田電鐵と共に、其の業績を左に紹介する。(編者)

田園都市株式會社は、澁澤榮一子爵の主唱によつて、大正七年九月設立せられたるものにして其の經營する田園都市は、東京近郊中第一に推すべき理想的住宅地であり、田園の美と都市の便とを兼ね備へたる、自由にして清新なる感じの溢れてゐる新市街で、専ら社會の中堅たる中産階級の人々のために創設せられたものである。今更事新らしく説くまでもなく、我國の大都市は歐米のそれに劣らず人口過集の慘害に陥つて居り、即ち東京市は一戸當り坪數廿坪で、大阪市は十九坪二京都市は三十八坪二といふ状態であるから、一英反(約四反二十四步)に十二戸乃至二十戸以上を過集と見做すといふ學說に従へば、東京市の如きは實に驚くべき人口過集状態に陥つてゐるのである。斯うした過集生活の市民に及ぼす慘害の中でも、最も著しいのは死亡率の増加と出生率の減少と、小兒死亡率の激増と結婚率の低減及び不良少年の輩出等であるが、我國に於ては從來之に對する緩和策が少しも講せられて居らなかつた。市民は徒らに屋上屋を重ね、方寸の地を

も争ひながら地價昂騰の趨勢に悩まされつゝあるが、最も苦痛を訴へつゝあるのは中産階級の人々である。茲に於てか澁澤子爵は大に之を憂慮され、率先して田園都市の創設を主唱し、有力なる同志と相諮つて、年々非常な勢ひを以て膨脹しつゝある大東京の人口過集状態から生ずる種々なる弊害を避け、併せて中産階級の住宅難を緩和する目的を以て、社會奉仕の精神に基き幾多の歳月と多大の經濟的犠牲を拂ひ、汎く歐米の長所と本邦特有の事情とを參酌して、此の計畫を具體化するに到つたのである。

さて田園都市の創設に當り、最も苦心せるは事業地の選定であつて、土地高燥にして大氣清純なること、地質良好にして樹木多きこと、面積は少くとも拾萬坪を有すること、一時間以内都會の中心地に到達し得べき交通機關を有すること、電信電話電燈瓦斯水道等の設備完整せること、病院學校俱樂部等の設備あること、消費組合の如き社會的施設をも有すること等を條件として銓衡したのであるが、幸ひに地元村民の熱心なる同意によつて理想的事業地を選定し得るに至つた。即ち東京府荏原郡洗足池附近及び同碑叡村平南大岡山一圓並に調布、玉川兩村に亘る多摩河畔一帶の地合計約四十六萬坪の勝地であつて、丁度品川、大崎、目黒近傍に於ける郡市境界線を隔たること西南約二十町乃至一里半の中に在り、其の土地は高燥で滿潮時の海面を抜くこと四

十米の高きに及び、地味は肥沃で花卉の栽培に適し、近くは老松の葉越しに多摩の清流を俯瞰し遠くは富岳の秀峰と武相遠近の丘陵とを居ながらにして眺望し得るのみならず、品川大森の海濱を模糊の間に指摘する事が出来る場所であるから、空氣の清淨であることは言ふまでもない。加ふるに附近には足洗池や日蓮上人の袈裟掛の松、御松庵、勝海舟の墳墓、西郷南洲の留魂碑を始め、九品佛、池上本門寺、御嶽神社、等々力の瀧、淺間神社、矢口ノ渡、鶯ノ木の櫻等歴史的名所舊蹟が各所に散在し、四季の遊覽地に富んで居る、斯くの如き理想的住宅地は全く他に其の比を見ることが出来ない。

然らば交通の便はどうかといふに、姉妹會社たる目黒蒲田電鐵會社があつて、郊外居住の不便を補ふて余りある。目蒲電鐵會社は大正十一年に創立せられたものであるが、田園都市の舊電鐵部の事業を繼承し、更に線路を延長して田園都市住宅者の便益を増しつゝありて、大正十三年三月に目黒、ひさし丸子間開通し、同年十一月ひさし丸子蒲田間の開通を見、今春更に洗足大井間の新線が完成するに到つた。従つて事業地の一着端に位する多摩川より東京驛に達するには僅かに四十分を要するのみで、洗足よりは三十分にて到達することが出来、巢鴨、大塚、新宿澁谷或は本郷、深川、千住等の市電終點附近に居住する人々と同等若くは短時間で東京の中心地

に往復する事が出来るのである。然かも蒲田に於て京濱線と連絡して居るから、横濱方面の交通は頗る便利であり、更に洗足、大井間の開通によつて、一層其の便を加ふるに到つた。

田園都市が住宅地區を決定し、第一回の賣出しをしたのは大正十一年六月で、洗足地區七萬六千坪を提供したのであつたが、豫期以上の好況で締切つた。其後大正十二年十一月に調布の七萬六千坪を賣出し、大正十三年一月には大岡山の地區九萬一千坪を東京高等工業學校に移譲し、同年六月には調布の四萬坪を第二期賣出しとして提供するといふ風に、着々として理想が實現しつゝありて、從來一軒の家もなかつた畑地に設計通りの道路が出来、下水が出来、公園が出来、其所にぞし／＼文化的な住宅が建築され、洗足地區の如きは段々立派な新市街が建設せらるゝに至り、又調布停留場を中心にして新住宅が續々建築せられつゝあつて、歩一步理想郷の完成に近づきつゝあるし、多摩川停留場附近には理想的遊園地たる多摩川園が開園し、大岡山は大學町としての理想を實現せんとしてある。斯くの如く田園都市は目黒蒲田電鐵の事業と相俟つて、着々當初の理想に近づきつゝありて、街路、下水の完成及び電燈電力の供給は勿論、居住者日常生活の機關も漸次整ひつゝある故、眞の理想郷を實現するも茲數年を出でざるべく、現に今日に於ても

既述の如き特徴ありて郊外住宅の通例とする不便且つ不經濟な生活を脱却しつゝあるを以て、諸種の施設が理想的に行はれた曉には東京市内よりも安價な生活を送ることが出来るであらう。

然らば土地の分譲については、どういふ方法を探つて居るかといふに、元來田園都市を提供した目的は、つまり好箇の住宅地を、安價に然かも年月賦拂ひの便法を以て、理想的の田園生活を樂しんで居る間に、知らず識らず若干の地所を所有し、住宅の安定を確乎たらしめ様々の趣意に出たものであるから、分譲する土地は一人一口とし、面積は百坪乃至五百坪を其の限度とし三ヶ年乃至十ヶ年の月賦若くは半年賦拂とする事になつて居り、契約の際に内入金として總額の約二割を拂込むこととなつてゐる。尤も別に即金拂の契約法もあつて、一時拂は土地引渡しと同時に支拂ふのであるが、賦拂契約に對しては價格一千圓につき左の割合で拂込む事となつてゐる。

賦金表

賦拂期間	半年賦	月賦
三年	一九七、〇二	三三、二七
四年	一五四、七二	二五、三七
五年	一二九、五〇	二一、二四

六年	一一二、八三	一八、五三
七年	一〇一、〇二	一六、六〇
八年	九二、二六	一五、一六
九年	八五、五五	一四、〇七
十年	八〇、二四	一三、二〇

田園都市に於て提供する土地は、百坪とか二百坪とか適當に區劃してある故、希望者は自由に撰擇する事が出来る譯であるが、假りに宅地百坪(單價四十圓)を購入し、十年間の月賦で支拂ふ事とすれば、地價總額四千圓の中、契約の際二割八百圓の内入金支拂を以て契約の土地の引渡を受け、殘金三千二百圓に對しては毎月四十二圓廿四錢宛拂込むと十ヶ年後には完全に其の土地が自分の所となるのである。借地代であれば最初は安くても近所が開けるに従つて地代は漸次昂騰し、然かも借地してゐる間は何十年でも地代を拂はなければならず、其上他に引越す場合には永年支拂つた地代は全部唯棄て、仕舞ふと同様の結果になるが、田園都市の宅地購入者はつまり坪當り四十二圓二厘四毛の地代を十四年支拂へば地主になれる譯である。中産階級者にとつて全く福音と謂はなければならぬ。尙ほ土地購入者に對しては契約の成立と同時に土地を引渡す事となつてゐるが、條件と

して土地は住宅用としてのみ使用すること、土地の引渡を受けた時から一年半以内に住宅を建築すること、近隣に對し悪感迷惑を惹起する程度の事物を發散せしめぬこと、會社の承諾を得るに非ざれば一區分地を二個以上の宅地として割譲又は使用しないことが規定されて居り、之れによつて田園都市本來の目的を傷けぬ様にして居る。

清鮮の風致と歴史的名所舊蹟に富み、然かも多摩川園の如き理想的遊園地もある好適の地であるから、田園都市の視察旁々、目黒蒲田電鐵を利用して一日の散策を試むるは最も意義ある事と信ずる。

田園都市及び目黒蒲田電鐵の概況は大體以上述べた如くであつて、澁澤子爵の提唱された理想的の田園都市は着々として實現化しつゝある。兩社の業績について更に數字的に統計的に述ぶるは屋上屋を架するに過ぎない故、茲には其の繁を避ける。

尙ほ田園都市の居住者及關係者等が、其の今日あるは全く澁澤子爵の主唱盡力にあるを以て、之を縁とし、去る六月三十日、多摩川園に於て盛大なる澁澤子爵歡迎會を開いた。其の席上、澁澤子爵の述べられたる祝辭はよく田園都市の由來を盡して居る。

## 祝 辭

機を見るに敏にして事を處するに公平なる地方諸賢の斡旋と、會社當事者諸氏の忠實なる努力と相俟ちて我が田園都市會社の事業が斯く完全の發達を遂げ、茲に地方諸賢より特に老生の爲に此大會を舉行せられたるは、實に望外の光榮にして、欣喜に堪へざる所なり、因りて老生は此機會に於て一場の祝辭を陳べて地方諸賢に感謝すると同時に、數十年來の記憶と理想とを喚起して來會諸君の清聽を請はんとす。

回顧すれば老生は維新前より數回歐米の諸邦を旅行し、其大都市を観察するに各商店は概ね店鋪と住宅とを異にし、而して其住宅は多く都塵を避けたる郊外に在りて、朝に店鋪に來り夕に住宅に還るを常とせり、然るに我が東京市の如きは古來の慣習上店鋪住宅同一なるが爲に、緊要の商業地區を庭園庖厨等に浪費して各般の施設を妨ぐるのみならず、風紀衛生上に及ぼす弊害も亦少からず、之を改善するは實に都市に於ける地積の經濟にして同時に商工業發達の一助たるべきを痛感せり。

仍りて老生は此理想を實現せんと欲し、大正四五年の交二三の同志と謀りて多摩川の澁に沿へる